

令和元年度

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

プロフェッショナル型

# 研究実施報告書

未来価値を創る玉手箱「地域協創スペシャリスト」育成プログラム



長野県飯田OIDE長姫高等学校  
Iida OIDE Osahime High School

「地域との協働」から「協創力」育成、そして「夢の実現」へ

長野県飯田 OIDE 長姫高等学校  
校長 原 康 倫

本年度から3年間、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（プロフェッショナル型）の研究校として研究開発を進めます。

この事業では、生徒の（1）専門性の追究（2）課題解決力、そして（3）協創力の向上を目標として、「地域協創スペシャリスト」を育成します。「地域協創スペシャリスト」とは、多面的に物事を捉え、そこから探究的に思考し、試行錯誤しながら課題を解決しようと実践できる人材であり、地域産学官や異業種とも協働しそれらの一連の活動に取り組む「現代のスーパーマン」です。

さて、多感な時期を送る10代後半の高校生の夢と、その保護者の高校への希望や期待は何でしょうか。それは、ズバリ「進路実現」です。しかし、この進路実現は高校教育の目的や目標ではありません。幸福な人生を送るという目的のための手段です。その目的に対して、高校の教育課程ではどんなことが出来るでしょうか。正義や価値観の違うそれぞれの生徒に幸福な人生を送るための教育課程を構築するような僭越かつ烏滸がましいことはできませんが、その目標が具現化した手段である「進路実現」のための教育課程の構築はできるはずで、そうでなければ高等学校の存在価値は全くありません。

我々教員は、その責任を果たす使命があり、その大前提の下でのこの事業でなければならないわけです。異業種とも協働して新たな付加価値を創造できるような「協創力」を育てるとともに、それとはトレードオフの要素もある「専門性の追究」も、生徒の進路を保証するために総合技術高校の名に懸けて担保しないとはいけません。そこがこの研究開発の工夫のしどころであり、正に教員としての「魂の試される遣り甲斐のある苦勞」のしどころでもあります。

「協創力」向上のための仕掛けも用意しています。まず、「環境」「ビジネス」「地域資源」の3つのテーマについて、1年次普通科目の中での「協創教育基礎」、2年次学校設定科目「地域ビジネスと環境」及び3年次学校設定科目「地域活性プロジェクト」において、学科横断的に生徒が主体的・探究的に学び合います。「地域活性プロジェクト」は研究最終年度にその成果を、飯田市の姉妹都市フランスのシャルル・ビル・メジュールで生徒が披露する準備も進めています。この事業では、生徒も教員も何が飛び出すか分からない玉手箱を開けて新しい世界に飛び出すようなワクワク感を何よりも大切にします。

これらの事業は、地域産学官の協力無くしては不可能です。本校はこの事業を進めるにあたって機械電気電子系「未来ものづくり委員会」、建設系の「夢まちづくり委員会」、商業系の「地域人教育推進委員会」を立ち上げ、密接に連携し協働しています。また、それぞれのコンソーシアムが実施する諸事業を他学科にも取り入れ横断的に実施する委員会及び校内体制も整えています。校内では来年度から「地域協創推進室」を設置し本事業を主導します。

文科省の研究指定校として、学校や専門学科を超え汎用性のある「課題解決力を養う主体的・探究的な地域人教育」や「協創力を身に付けるための学科間連携と融合教育」が求められています。指導・助言を頂いております文部科学省及び県教育委員会学びの改革支援課、また、連携により協働いただいています地域の皆様に感謝を申し上げ、巻頭の挨拶といたします。

# 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（長野県立飯田OIDE長姫高等学校）

## 未来価値を創る玉手箱「地域協創スペシャルリスト」育成プログラム

○工業科と商業科について専門性を追究するとともに、学科間連携から「環境保全」、「ビジネス」、「地域資源」の有効利用の面から多角的で実践的・探究的な考え方や行動ができ、かつ地域の産学官や異業種とも連携し、新たな付加価値・産業の創発（オープン・イノベーション）ができる「地域協創スペシャルリスト」の育成を目指す。

### 【コンソーシアムの体制】

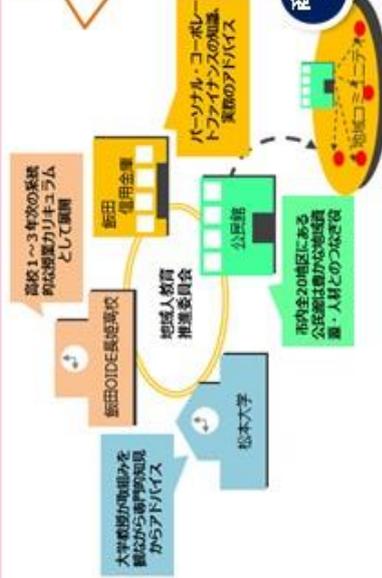
○機械電子電気系「未来ものづくり委員会」  
飯田精密機械工業会 電子工業会 商工会

○建設系「夢まちづくり委員会」  
飯田建設業協会 建築士会 土木会

○商業系「地域人教育推進委員会」  
飯田市 松本大学 飯田信用金庫

### 【研究開発の内容】

#### 「課題解決能力」の育成～地域人教育を通じて～



#### 「高度な専門性」の育成

- 複合的な視点から、自らの専門性を探究し、高度な専門性を追究する力
  - 多角的で客観的に考える力
- 【主な具体的内容】
- ・実践的・体験的な工業技術、土木建築、ビジネスの各分野の専門性を探究
  - ・地域公開講座の実施及び研究開発



社会基礎工学科「測量実習」  
「夢まちづくり委員会」と連携し、対象物を自動検知する測量機器やドローンなど先端機器を活用した実習を行っている

#### 「協創力」の育成

- 高度な専門性を追究する力と経営管理能力の双方が結びついた人材の育成
- プロジェクト型学習を実践で個々の能力を伸長
- 専門を異にする学びから様々なアイデアが融合させることで、革新的で斬新的な発想力を育成

【主な具体的内容】

- ・学校設定科目「商品開発実践」において、模擬株式会社形態をとるから、各課の生徒がテックレンジャーを題材としたマーケティングデザイン等の実践



学科連携により、UVプロシッタを活用し作成したテックレンジャーグッズ

#### 「地域人教育（課題研究）竜丘地区グループ「こうこうせい」といっしょ～90分の茶話会～」

公民館主事とともに、地域を題材としたプロジェクト型学習に取り組んでいる。このグループでは、家族以外と話す機会が少なく高齢者が地区に増えている現状を知り、高齢者と高校生が気軽に話しができる「茶話会」を5回開催した。この取組をきっかけに、今後は地域住民がこの活動を引き継いでいく。竜丘以外にも飯田市内の6地区において、地域の課題（願）を解決する取組が「地域人教育」を通じて行われている。



地域住民との打ち合わせの様子

商業科における地域人教育の仕組

## 未来価値を創る玉手箱「地域協創スベジヤリスト」育成プログラム

工業科と商業科について専門性を追究するとともに、学科間連携から「環境保全」、「ビジネス」、「地域資源」の有効利用の面から多角的で実践的・探究的な考え方と行動ができ、かつ地域の産学官や異業種とも連携し、新たな付加価値・産業の創発（オープン・イノベーション）ができる「地域協創スベジヤリスト」の育成を目指す。  
【コンソーシアムの体制】

○商業系「**地域人教育推進委員会**」  
飯田市 松本大学 飯田信用金庫

○建設系「**夢まちづくり委員会**」  
飯田建設業協会 建築士会 土木会

○機械電子電気系「**未来ものづくり委員会**」  
飯田精密機械工業会 電子工業会 商工会

### 目標

○探究型プロジェクト型としての「高度な専門性」  
共通教科を含む学科間連携と学科融合を通し、各学科の専門的な技術などについて深く深く探究できる教育課程を構築

○地域人教育の実践を通した主体的な「課題解決力」

「ものづくり」と「ビジネス」を相互に関連付けながら、「地域人教育」を通した課題解決力の育成に資する教育課程を構築

○地域産学官や異業種と協働して新しい付加価値を創り出す「協創力」

各コンソーシアムと連携した諸活動を、学科の枠を越えて横断的に実施し、「協創力」の育成を目指す教育課程の構築



### 取組



土木技術講習会

地域公開講座

#### シーナンス講習会



地域人教育



リサーチ・ツアー 講演会

#### 課題研究発表会



地域活性化プロジェクト



UVプリント事業

### 成果と課題

例) 「夢まちづくり委員会」実施講習会・講演会(最新測量機器・製図技術他)を通し「**専門的な知識・技術が身に付いた!**」78.61%!(生徒アンケート:当てはまる・たいいたい当てはまると回答した生徒の割合)  
・ものづくりコンテストでの成果  
・将来の職業意識の形成  
・高度な資格取得

#### 「探究型プロジェクト型」

課題  
本事業と連携した評価の観点(目標)が不明確

#### 「課題解決力」

#### 「協創力」

「高度な専門性」

「地域活性化プロジェクト」による学科融合

「地域ビジネスと環境」(令和2年度入学生から)

「共通教科」「地域人教育基礎」の実践

1年次



2年次

「課題研究」の学科連携

3年次

次年度以降の教育課程の構築 成果



# 長野県飯田O I D E長姫高等学校

## 地域と協働による高校教育改革推進事業

### 未来価値を創る玉手箱《地域協創スペシャリスト》育成プログラム報告集

#### 目次

I	令和元年度研究開発実施報告	・・・2
II	主に探究型プロフェッショナルとしての「高度な専門性」育成を目指す取組	
	シーケンス制御（GOT）講習会	・・・5
	建築士会及び長姫建築会と連携して信州ECOコンテスト課題への設計指導	・・・7
	長姫建築会と連携してOBによる社会人講演会	・・・9
	長野県瓦事業組合と連携して瓦葺き実技講習会	・・・10
	地元大工技能士と連携して大工実技講習会	・・・12
	県建設業協会と連携して重機操作技術指導講習会	・・・13
	県建設業協会と連携して最新機器を利用した測量実習を実施	・・・14
	地域公開講座(春)	・・・15
	地域公開講座(秋)	・・・16
	学校設定科目「地域ビジネスと環境」の研究開発	・・・17
	工業科の講演会	・・・18
III	主に「思考力・判断力、表現力等」の育成を目指す取組	
	工業科における「地域人教育」の実践及び研究開発	・・・22
	商業科の「地域人教育」の実践及び研究開発	・・・28
	課題研究における高校生カフェ開店に向けた研究	・・・33
	商品開発における地元青果の付加価値向上の関する研究	・・・36
	学校設定科目「地域人教育基礎」の研究開発	・・・38
	県建設業協会及び長野県建設部と連携して松川の河川整備事業の実施	・・・40
IV	主に新たな付加価値を創り出す「協創力」育成を目指す研究開発	
	テックレンジャー活性化プロジェクトと学科融合科目の実践及び研究開発	・・・44
	UVプリンタの活用を題材にした学科融合実践及び研究開発	・・・46
	海外交流事業を活用した学科融合実践及び研究開発	・・・48
V	視察研修事業	
	京都すばる高等学校	・・・64
	立命館大学	・・・71
	和歌山大学	・・・75
	東川町・旭川大学	・・・79
VI	各種委員会の報告	
	コンソーシアム	・・・90
	カリキュラム開発専門家	・・・92
	地域学習支援員・学校指導委員会	・・・93
VII	広報活動	・・・103
VIII	関係資料	
	教育課程	・・・104

# I 令和元年度研究開発実施報告

## 1 研究開発の概要

総合技術高校の強みを生かし、工業科と商業科についての専門性を追究するとともに、学科間の連携を強化し「環境保全」に配慮し、「ビジネス」マインドを持ち、「地域資源」を生かし、課題を多角的で探究的に考え、かつ地域の産学官や異業種とも連携し実践することで、ものづくりやビジネスにおける新たな付加価値を創発(オープン・イノベーション)できる「地域協創スペシャリスト」の育成を目的とする。

ものづくりとビジネスの諸活動を通して、専門の力と協働の力を豊かな地域づくりに繋げる職業人を育てる。そのために、生徒が以下の力を身に付けることを目標とする。

- |                                     |
|-------------------------------------|
| (1) 探究型プロフェッショナルとしての「高度な専門性」        |
| (2) 未来の地域人教育の実践を通じた主体的な「課題解決力」      |
| (3) 地域産学官や異業種と協働して新しい付加価値を創り出す「協創力」 |

## 2 目標の進捗状況、成果、評価

### (1) 主に探究型プロフェッショナルとしての「高度な専門性」の育成を目指す取組について

各コンソーシアムと連携し、高度な専門性を身に付ける取り組みは、現在のところ概ね順調に事業を進めている。

#### ①各種技術講習会

- ・「夢まちづくり委員会」が行った講習会・講演会においての生徒アンケート結果は、「専門的な技術が身に付いた」に<当てはまる・だいたい当てはまる>と答えた割合が78.6[%]となった。知識・技能の習得にとどまらず、これらの講習会・講演会の受講を契機とし、長野県高校生ものづくりコンテストにおいて1位を受賞し北信越大会に出場するなど、自ら技術の習得目指し、実力を身に付けた生徒が育っている。
- ・「未来ものづくり委員会」と連携したシーケンス制御(GOT)講習会は、生徒のアンケート結果は概ね、「専門的な技術が身に付いた」に<当てはまる・だいたい当てはまる>と答えた割合は7割を超えている。
- ・他にも、コンソーシアムと連携し専門的な知識及び技能を高める講演会及び講習会は予定通り実施できた。
- ・一例であるが、建築学科で行った各種講習会において、次の①～③に示す目標とする力を身に付けることができたかどうかについて、指導教員等が評価した結果は次の通りである。

身に付けさせたい力	大工技能	建設現場 安全教育	ECO コンテ スト
①各コンソーシアムの実施する講話や実習等の指導を通して、地域の工業技術とビジネスについて基礎的な知識と技術を身に付けること。	4	4	3
②企業の経営や環境保全への取り組みや地域資源の活用等を学ぶことで、それらに関する課題を見出すとともに解決策を考え、ビジネスの視点や科学的根拠、コンソーシアムからの助言等から、結果を検証し改善すること。	3	4	4
③コンソーシアムの担当者等と積極的に関わることで職業人として必要な豊かな人間性を育み、探究型プロフェッショナルを目指して多角的に積極的に学び、地域の発展に主体的かつ協働的に取り組むこと。	4	3	4

※評価対象者：関連する専門科目の授業を担当する教員及び講師。講習会を行ったことで、①～③の力が身に

ついたと思うかについて、<1当てはまらない、2あまり当てはまらない、3どちらともいえない、4概ね当てはまる、5当てはまる>のいずれかを選択し、回答の平均値を示した。

すべての力を同時に身に付けさせることはできていないが、「4概ね当てはまる」がほとんどであったことからこれらの取組を通して、着実に目標とする力を身に付けているといえる。

②マーケティング技術の向上

「商品開発」における商品企画、デザイン、知的財産権といった知識と、地域の青果業・卸売業の実態を外部講師の指導のもと理解し、マーケティング技術を向上させることができた。

③「地域公開講座」（生徒と地域が共に学ぶビジネス学習講座）

「地域公開講座」においては、春と秋の2回「ファイナンシャル・プランナー講座」（春季）と「ビジネス法務

リーダー」（秋季）の公開講座を実施し、金融や法律に関する学習を行うことで、ファイナンシャル・プランニング技能士（3級）およびビジネス法務リーダー（3級）にも数名の合格者を出すことができた。受講後アンケートでは、「子供が通っているため、受講しやすく、今後も参加したい」（保護者）、「高校での普段の授業で学ぶ専門をもっと詳しく勉強でき、大人になってからも役立ちそうなことをたくさん知ることができた」（生徒）等の意見があり、地域住民と協働した学びの機会を提供することができた。

④「地域ビジネスと環境」の研究

新設科目「地域ビジネスと環境」については、令和2年度入学生の教育課程に編成した。ECO検定を教員が取得したり、シラバスの作成を進める中で、工業科と商業科の教員のチームティーチングを行うための時間割編成の調整等を行い、開講に向けて進めている。また、令和2年度に実施する模擬授業では、3観点評価を行うために、評価基準についての研究も進めた。

(2) 主に主体的な「課題解決力」を育成する実践及び研究開発について

「地域人教育」の取組を中心に、概ね計画通り事業が進んでいる。

①工業科における「地域人教育」の実施

工業科における「地域人教育」については、現在、コンソーシアムと連携して行っている様々な取組を、「地域人教育」の視点から再構成し、系統立てて実施できるよう改善を行っている。計画段階では、1年次で本事業として地域域事業所の見学を新規に予定していたが、従来実施してきた進路指導の一環で行う事業所見学で代替して行った。

②商業科「地域人教育」の推進

商業科の「地域人教育」の実践及び研究開発については、企業担当者からの講演・講義や、フィールドワークを通じた地域課題の発見や気づき、解決方法を考える場面設定等、計画に沿って順調に進んでいる。生徒のアンケートからは「物事を一つの方向から見のではなく、いろいろな立場から眺めることの大切さが理解できた」「最新のビジネスは、利益を生み出すだけでなく、地域の課題についてビジネスで解決していることがわかった」など、生徒の成長が見られた。

商業科の「地域人教育」について、次の①～③に示す目標とする力を身に付けることができたかどうかについて、指導教員等が評価した結果は次の通りである。

身に付けさせたい力	評価平均
①地域事業所の見学や、企業担当者の講演、企業展示説明会などにより、地域の産業やビジネス等についての知識と技術を身に付けること。	4
②地域における商業の強みや課題を就業体験やフィールドワーク、課題研究等で発見し、ビジネスに携わる者として独創的・創造的・工夫・努力（OIDE精神）で地域課題を見いだすとともに解決策を考え、身に付けた知識や技術、コンソーシアムからの助言等により結果を検証し改善すること。	4
③ビジネスの視点を活かした課題解決の方法について自ら学び、地域の商業の発展やまちづくりに主体的かつ協働的に取り組むこと。	5

※評価対象者及び集計方法は(1)建築学科の評価と同様に、商業科でおこなったものである。

概ね目標を達成しており、地域住民との交流を重視した地域連携学習を通して、生徒各々の主体性を引き出す取り組みができていくことが評価に結びついた。

### ③経営者によるリーダーシップ論講演会

未来ものづくり委員会が主催したこの講演会は全学科で受講したが、生徒アンケート結果は、内容について「大変興味を持った」と答えた生徒の割合を学科別でみると、機械工学科 44[%]、電気電子工学科 31[%]、電子機械工学科 26[%]、建築学科、17[%]、商業科 10[%]となっており学科によって差が表れた。一方、記述コメントからは「何かを産み出すためには、多くの問題や試練を乗り越えてひらめき、行動力を駆使することが大切だと思った」「夢や行動は回りまわって自分の経験として積み重なっていくのだと思った」「一つの目標からおおきな事を成し遂げるためには、周りの人と協力していくチームワークも必要だと思った」など学科による差はなく肯定的なものがほとんどであった。全学科で講演会等を実施する場合の各科の事前指導やふりかえりの方法について検討し、教科横断的な学びから課題解決力の育成につなげたい。

### ④共通教科における「地域人教育基礎」の研究

地域課題の「発見→分析→研究→仮説→解決策の立案、実践」について、それぞれのプロセスで必要になる知識・技術を各教科の学習活動を通して身に付ける授業について研究した。「国語総合」では「リニア」に関するもの、「科学と人間生活」では「災害(地震、水害)ハザードマップや過去の災害」に関するものなどを行い、実施内容の一覧を完成することができ、令和2年より1年次の各科目の5時間程度を活用して実施する。

## (4) 主に新たな付加価値を創り出す「協創力」育成を目指す研究

概ね計画通り事業が進んでいるが、学科間で連携して行う事業について一部進捗の遅れがある。

### ①「地域活性化プロジェクト」(学校設定科目)の研究

学科融合科目として実施し、IoT技術を活用しながら、企業活動を通じた社会課題の解決を目指す授業を行うため、生徒が実際にドローンやプログラミングロボットに触れながら、協創力の育成を行うことができるよう購入し、研究を進めた。また、当初計画していた「テックレンジャープロジェクト」については本授業のグループの一つとして実施する。両学科がともに学ぶ学科融合科目として、シラバスの作成や授業担当者の分担、教材の開発を行い、3年生の選択科目(学校設定教科)において、令和2年度から実施する。

### ②UVプリンターを活用した協創力の研究

UVプリンターの活用を題材にした学科融合実践及び研究開発については、工業科では導入にあたり、事前学習を十分におこない、実際にアルミ板上に印刷を行う授業を実施したことで、その特性を理解した活用方法を見出すことができた。商業科の「課題研究」では、地域交流のグッズ作成に活用し、完成した製品は、地域の方からの評判もよく、生徒自身が自分たちの活動に、自信を持つ場面がみられ、成長の様子を伺うことができた。

### ③海外交流事業による協創力の研究

海外交流事業を活用した学科融合実践及び研究開発については複数回の会議を持ち、飯田市龍江地区の方を含め飯田市と協力している。担当教員が、地域人形劇委員と共にフランス・シャルル・ヴィル・メジュール市の現地視察を実施し、外交政策担当者と調整をおこなっており、生徒が「テックレンジャー」を題材に新たな人々との交流を実現したい。

## 3 次年度以降の課題及び改善点

### (1) 研究開発について

「高度な専門性」の育成を目指す取組については、概ね計画通り事業が実施できているが、「探究型プロフェッショナル」として高度な専門性を育成するには、得た知識・技能を活用しながら「課題解決力」「協創力」の育成を目指す取組の中でその育成を行う必要があり、次年度は育成を目指す「3つの力」をバランスよく身に付けさせられるよう事業を行っていく。

「課題解決力」の育成を目指す取組については、概ね計画に従い事業を実施したが、「課題研究」の授業等において、従前の評価をおこなっている点は改善が必要である。次年度は各学科において、それぞれの科目の目標と照らし合わせ、ルーブリックを作成するなどして、生徒に対し、本事業の目標と関連付い

た評価の観点（目標）を明確に示した上で授業を実施する。また、「課題研究」における学科融合と研究開発について、来年度は事前に各科で調整を行い、課題研究の授業を進める。

「協創力」の育成を目指す取組については、コンソーシアム関係者や外部指導者から、専門的な視点から多くのカリキュラム開発の提言を得て、それぞれの専門学科の授業にフィードバックできたが、学科連携や学科融合の取組はまだ始まったばかりである。今年度は、3つのコンソーシアムを統括する「学校地域協働推進委員会」（構成員：各コンソーシアムの代表者、カリキュラム開発等専門家、松本大学、飯田信用金庫、飯田市）の設置はしたものの、実質的には機能させることができなかった。そこで、この「学校地域協働推進委員会」から、十分な意見を引き出し、それを参考として、学科・コンソーシアムの枠を超えた取り組みを加速させ、生徒の「協創力」の育成を推進する。

また、「地域魅力化評価システム」（三菱UFJリサーチ&コンサルティング（株）が実施）を活用した生徒アンケートでは、生徒の行動実績（主体性に係る行動、協働性に係る行動、探究性に係る行動、社会性に係る行動）を他地域の生徒と比較した結果、社会性以外はすべてマイナスの行動実績であった。社会性の項目は地域に関わる行事等の「参加」経験を問う実績で、他の3つの行動は「考えた」「調べた」「アドバイスを求めた、した」という学びのリフレクションを問う実績であり、学びにより自分が「どう変容したか」の認識が本校の生徒には乏しい。そこで次年度は、授業や課題研究発表会で使用するワークシートの見直しを行うなどして、生徒が記述等を通して「何ができるようになったか」を理解し、自己の成長を実感できる「ふりかえり」等の取組を充実させていく。

## （2）実施体制について

各科や学校全体の行事が増えているため、特に「協創力」の育成を目指す取組に関して、各学科間で連携しながら事業効果の検証をおこなう時間がとりにくいという課題がある。また、各コンソーシアムや「学校地域協働推進委員会」からの意見を反映するための授業改善等について、各科で共有しながら検討する機会も十分とはいえない。そこで、令和2年度4月から、校内分掌として「地域協創プロジェクト推進室」を、常駐3名（工業系・建設系・商業系各1名）と非常駐4名の7名の構成により設置する。共通テーマ（環境保全・ビジネス・地域資源）に関わる講演や見学、授業支援等の諸事業や、各コンソーシアムが実施する諸事業を他学科と合同して行う際にこの推進室が中心となって運営を行い、「学校地域協働推進委員会」とともに、コンソーシアムが実施する諸事業を他学科と合同で実施することで、課題となっている「学科間連系」「学科融合」の取組をより一層推進していく予定である。

## Ⅱ 主に探究型プロフェッショナルとしての「高度な専門性」育成を目指す

### 取組

#### シーケンス制御（GOT）講習会（シーケンス制御 タッチパネル基礎講習会）

1 日 時 令和2年2月1日（土）、2日（日）

2 実習場所 本校 工業科棟4階 電気磁気実習室（電気電子工学科）

3 講 師 小口 眞喜男 氏

4 担当教諭 電気電子工学科 田中 海史

5 参加者 電気電子工学科1年生3名，電気電子工学科2年生2名，教職員2名 計7名

6 活動概要 本講習会は製造・生産現場で広く用いられているシーケンス制御について扱った。企業ではタッチパネルにより操作をする生産ラインが多くなってきている。本学科ではプログラマブル表示器(タッチパネル MITSUBISHI GOT2105)を導入し、タッチパネルの設計とその操作方法について講習を実施した。講習内容は以下の通りである。



①実習装置の配線確認

プログラマブルロジックコントローラ (PLC)，タッチパネル，制御対象(シーケンス制御検定盤)の配線確認作業

②タッチパネルへの表示・設計

開発ツール(GT Designer 3)を用いたタッチパネルへの設計方法，各種ボタン・ランプ・数値表示の設計方法の習得

③PLC へのプログラムの実装

制御対象を動作させるためのプログラムの実装



受講した生徒からは、「学んだことを応用して組み合わせることで幅広くやりたいことができるようになった」、「タッチパネルから数値を入力し、コンベアの往復回数を設定できた」、「タッチパネルを使用する上で気を付けなくてはならないこと，どのような手順で使用するかを体験できた」などの感想があった。開発ツールの使い方を理解すると，生徒は様々な機能を用いて主体的に講習会に取り組む姿が見られた。今後も講習会を実施し，高度な技術を生徒に身につけさせていきたい。



7 アンケート結果

①講習会を実施後、あなたはどのように感じましたか。5～1の欄に適切な箇所に○をつけてください。

	5	4	3	2	1
話をしっかり聞くことができましたか。	5人				
技術や技能を学ぶことができましたか。	5人				
法令遵守や環境保全に関することを感じられましたか。	4人	1人			
進路を実現するための一役とすることができましたか。	4人	1人			
充実した講習会とすることができましたか。	5人				

5 当てはまる 4 だいたい当てはまる 3 どちらともいえない  
2 あまり当てはまらない 1 当てはまらない

## ②学習の成果

- ・教えてもらったことはできるようになり、今後活かしていけると思った。いろいろな設定ができるので凄と思った。課題はしっかりと出来た。
- ・講習会に来たことで来ないと絶対に分からないことが学べた。試験の時よりできることが増えた。
- ・学んだことを応用して、組み合わせることで、幅広くやりたいことができるようになった。
- ・シーケンス制御の検定練習の中で使った SSO の自動・手動の切り替えスイッチをタッチパネルで行うことができた。GOT を使う上で気を付けなくてはいけないことや、どのような手順で使用するのかがよく分かったので良かった。
- ・入力がやりたかったのでできて良かった。

## ③意見・反省・感想

- ・今まで、ネットでしらべたりして、使ってきたが教えて頂くと分かりやすく、またネットに書いていないことも多かったので来て良かった。
- ・初めてやってみたが画面の設定はあまり難しくなくできたがプログラミングをするのは難しくリレーがごちゃごちゃになってしまいそうだったが上手にできて良かった。  
自分なりの表示画面でシーケンス制御の実習盤を動かすことができた。動く面白いと改めて感じた。
- ・GOT を使って、やれることが多く、今までのシーケンスをもっと応用できるものだと感じたので、もっとやってみたいし、実際に使ってみたいと思った。
- ・今回の講習会を通して、GOT を用いたシーケンス制御の基礎的な部分を理解することができた。課題研究や今後の進路を決定するうえでとても役に立つ知識や技術を身に付けることができ、貴重な体験になった。

## 建築士会及び長矩建築会と連携して信州ECOコンテスト課題への設計指導

- 1 日 時 令和元年9月12日(木)午前10時から午後0時(1年生)  
令和元年9月12日(木)午後1時30分から午後3時30分(2年生)
- 2 場 所 本校 2F 会議室
- 3 講 師 公益社団法人長野県建築士会飯伊支部より12名  
田中 慎治氏 山口 隆秀氏 野牧 賢司氏 代田 勇氏  
岡島 弘幸氏 鈴木 利也氏 伊原 良平氏 大平 賢秀氏  
佐々木 健司氏 勝野 久美恵氏 志水 裕希子氏 鈴木 はるか氏
- 4 担当教諭 清水 潔
- 5 参加生徒 建築学科 2年生:35名、1年生:40名

6 活動目的 長野県建築士会青年女性委員会飯伊支部の指導により設計手法と地域の特徴について学び、設計スキルの向上と地域の発展に主体的かつ共同的に取り組む姿勢を身につけるワークショップの様子

7 活動概要 「信州 ECO コンテスト」のテーマである防災倉庫について、防災倉庫についての知識の講義があり、班に分かれて地域の特色や防災倉庫につなげるためのアイデアをワークショップにより、意見を出し合い、各自のアイデアを広げた。



8 まとめ 生徒アンケートの結果より、建築への興味が深まり、話し合いの中で問題解決する力が身についたと言える。さらに、環境を考慮した設計についてや、地域について考え、自分の意見を主張できる機会となったため、活動を通して設計スキルの向上と地域について考える力が身についたと言える。地元建築士の方のアドバイスにより、地域の発展に主体的かつ共同的に取り組む姿勢が身につ「信州 ECO コンテスト」いたと言える。



表彰式「信州 ECO コンテスト」の結果、1名奨励賞、1名審査員特別賞を受賞した。

## 9 アンケート結果

①信州エココンテストワークショップを実施後、あなたはどのように感じましたか。5～1 の欄に適切な箇所に○をつけてください。

5当てはまる 4だいたい当てはまる 3どちらともいえない 2あまり当てはまらない 1当てはまらない

	5	4	3	2	1
建築に対して興味が深まりましたか。	23	32	14	0	1
建築の設計の仕事に興味を持てる機会となりましたか。	21	30	19	0	1
グループワークにおいて、話し合いの中で問題解決していく良い機会となりましたか。	27	31	13	0	0
周囲の環境を生かす設計について知る機会となりましたか。	26	30	15	0	0
地域とともに活動していることを知る機会となりましたか。	26	31	14	0	0

### ②講習会で学べたこと

- ・防災倉庫の中身など今まで気にしたことがなかったが、知る良い機会だった。
- ・地域の良いところや、環境や防災について考えることができた。
- ・地域の特徴をつかむ大切さが学べた。
- ・災害の種類やそれに対する必要なものなどがわかった。
- ・地域の良さを改めて学ぶことができた。
- ・環境を生かした設計をするのにいろいろなアイデアをもらった。

### ③反省・感想など

- ・他人の意見や考え方によって色々な感じ方が出来るようになった。
- ・同世代だけでなく、様々な年代の方との話し合いでたくさんの意見を聞くことが出来た。

- ・グループで1つのことに対して色々と意見を出し合う楽しさ大切さを知った。
- ・自ら発言していくことの大切さ、みんなの意見を聞くことの大切さを学べた。
- ・みんなで考えることで気づくことがあると思った。
- ・自分の中のテーマを作ることが出来た。
- ・多くの人たちで建築のことについて話し合うと色々なアイデアが出ることと楽しく学べることを知った。

## 長炬建築会と連携してOBによる社会人講演会

- 1 日 時 令和元年12月10日(火) 午後1時30分から午後3時30分
- 2 場 所 本校 プレゼンテーション室
- 3 講 師 株式会社シノダ設備 代表取締役社長 篠田忠尚氏
- 4 担当教諭 清水 潔
- 5 参加生徒 建築学科 1年生：40名、2年生：35名、3年生：40名
- 6 活動目的 地域で活躍されている卒業生から、建設設備の仕事の内容や建築関係全般についての講義を受け、進路に向かう姿勢や、地域の発展に主体的かつ協働的に取り組む姿勢を身につける。
- 7 活動概要 建設業の設備会社の仕事について講演を受け仕事に対する考え方や姿勢や思いを学ぶ。そして進路について深く考え、将来の進路選択の参考とする。
- 8 ま と め 生徒アンケートの結果より、社会人講演会を通して進路に向かう姿勢や、地域の発展に主体的かつ協働的に取り組む姿勢が身についたと言える。また、設備会社の仕事内容を知ること、地球環境の保全に務めることの重要性を知る機会になったと言える。また、建設会社の内容を知ること、将来の進路について深く考える機会にもなった。
- 9 アンケート結果
  - ①社会人講演会を実施後、あなたはどのように感じましたか。5~1の欄に適切な箇所に○をつけてください。
  - 5当てはまる 4だいたい当てはまる 3どちらともいえない 2あまり当てはまらない 1当てはまらない



	5	4	3	2	1
建築に対して興味が深まりましたか。	46	40	19		
建築の仕事に興味を持てる機会となりましたか。	44	42	18	1	
自分の進路を考えるうえで参考になりましたか。	36	42	24	1	2
建築の設備について知る機会となりましたか。	53	38	14		
地域とともに活動していることを知る機会となりましたか。	46	46	13		



② 講習会で  
と  
・設備会社  
について知  
ること。  
・地場企業  
にの住環境  
を人々の生命、



学べたこ  
仕事につ  
とができ  
は、地域  
通して  
財産を守

ある大切な使命があることがわかった。

- ・設計業務は緻密さとスピードが要求される。
- ・「段取り八分仕事二分」と言うように、仕事では段取りが重要であるとわかった。
- ・コミュニケーション能力が必要だとわかった。
- ・現代にあわせた地球に優しい設備に変わっていることを知れた。

### ③ 反省・感想など

- ・建築の心構えを知り、改めて建築への興味ややる気ができました。
- ・建築という職業はやりがいがある仕事なんだと思った。
- ・建築における設備工事の大切さが改めてわかった。
- ・自分が普段使っている公共施設などにも設備が空間を快適にしてくれていたのかと思い知った。
- ・自分の仕事に誇りを持って働いている印象を受けたので、自分もこれから誇りを持てるような仕事を見つけないかと思った。
- ・たくさんの職業の人が工事に関わって建築物ができていくんだとわかった。
- ・今は省エネは当たり前で、どれだけエネルギー効率を上げるかが大切だと知った。
- ・設備は省エネにもなり未来のためになる仕事だとわかった。

## 長野県瓦事業組合と連携して瓦葺き実技講習会

1 日 時 令和元年 11 月 20 日（水）午後 0 時 30 分から午後 3 時 30 分

2 場 所 本校 設計実習室、施工実習室本校

3 講 師 長野県瓦事業組合青年部より 9 名  
仲田 圭二郎 氏 松澤 洋一 氏 吉川 雄基 氏 市川 雄一 氏  
荒川 聡 氏 松島 雄一 氏 関 賢吾 氏 池田 浩之  
角谷 将吾 氏

4 担当教諭 清水 潔

5 参加生徒 建築学科 2年生：35名

6 活動目的 長野県瓦事業組合の指導により瓦葺きの知識を学び、さらに実技体験を通して、基礎的な知識と技術を身に付ける。また、建設現場で働く職人と積極的に関わることで職業人として必要な豊かな人間性を育み、地域の発展に主体的かつ協働的に取り組む。



7 活動概要 建設現場で働く瓦葺き職人による講習会。座学では瓦の知識を学び、実技では実際の瓦を使用して屋根を葺く体験をした。講習会を通して、地域で活躍する職人の仕事を理解し、建築への興味関心を深める。

8 まとめ 生徒アンケートの結果より、建設現場で働く職人の仕事について知り、理解を深められた。さらに職人の方と接する中で、職業人としての人間性に触れ、職業感を培うことができた。又、地域で活躍していることを理解し、地域の発展に主体的かつ協働的に取り組む姿勢が身についたと言える。



#### 9 瓦葺き実技講習会アンケート結果

①瓦葺き実技講習会を実施後、あなたはどのように感じましたか。5～1 の欄に適切な箇所に○をつけてください。

5当てはまる 4だいたい当てはまる 3どちらともいえない 2あまり当てはまらない 1当てはまらない

	5	4	3	2	1
建築に対して興味が深まりましたか。	16	14	5		
建築の仕事に興味を持てる機会となりましたか。	20	12	3		
自分の進路を考えるうえで参考になりましたか。	10	12	9	4	
瓦葺きについて知る機会となりましたか。	25	9			
地域とともに活動していることを知る機会となりましたか。	12	16	5	2	

#### ②講習会で学べたこと

- ・瓦葺き実習を通して、職人の仕事がわかった。
- ・瓦について知ることができた。
- ・屋根の材料として、瓦は他の材料に比べて耐久性や耐火性が高いことを知ることができた。
- ・瓦葺きの仕組みがわかった。

#### ③反省・感想など

- ・瓦葺き職人の方に優しく指導いただき、自分で瓦を葺くことができ、貴重な体験ができた。
- ・瓦葺き職人の瓦に対する思いが強く、職人はカッコいいと思った。
- ・建築にはいろいろな職人が携わっていて、そのなかの一つを知れて良かった。
- ・建築の職人も面白いと思い、興味を持ちました。

## 地元大工技能士と連携して大工実技講習会

1 日 時 令和元年8月20日(火) 午前9時から午後0時  
令和元年8月22日(木) 午前9時から午後0時  
令和元年8月24日(土) 午前9時から午後0時  
令和元年8月26日(月) 午後4時から午後7時  
令和元年8月28日(水) 午後4時から午後7時

2 場 所 本校 1F 木造実習室

3 講 師 飯田職業訓練校 講師 森 寿弘 氏

4 担当教諭 清水 潔

5 参加生徒 本校建築研究部員 4名

6 活動目的 地元大工技能士による大工技術の知識及び技能の指導を受け、地域の発展に主体的かつ協働的に取り組む姿勢を身につける。  
原寸図指導の様子



7 活動概要 計5回の講習会を計画的に行った

- 1回目 原寸図指導
- 2回目 木造り・仕上げ指導
- 3回目 墨付け指導
- 4回目 加工指導
- 5回目 加工・組立指導



8 ま と め 生徒アンケートの結果より、活動を通して大工の仕事について参加生徒全員が理解し、知識と技能を身に付けられた。さらに、講師の地元大工さんと共に活動する中で地域発展に主体的かつ協働的に取り組む姿勢はおおむね身に付けることができたと言える。1名が高校生ものづくりコンテスト木材加工部門北信越大会に参加した。  
完成作品



9 大工技能講習会アンケート結果

①大工技能講習会を実施後、あなたはどのように感じましたか。5～1 の欄に適切な箇所に○をつけてください。

5 当てはまる 4 だいたい当てはまる 3 どちらともいえない 2 あまり当てはまらない 1 当てはまらない

	5	4	3	2	1
建築大工がどのような仕事かわかりましたか。		4			
大工道具の使い方がわかりましたか。	3	1			
現場で必要な知識を知る機会となりましたか。		4			
環境保全の取り組みについて知る機会となりましたか。		3			1
地域とともに活動していることを知る機会となりましたか。	1		3		
大工技能が身につく良い機会となりましたか。	3	1			

②講習会で学べたこと

- ・大工道具の使い方や管理の方法を知ることができた。
- ・加工のときの注意点を知ることができた。
- ・原寸図の書き方が学べた。

③反省・感想など

- ・加工の回数を重ねるごとに段々改善点や工夫すべき点に気づけたのでよかった。
- ・講習会では自分のためとなるような技術を教えて頂きためになった。
- ・教えていただいたことを自分の進路に生かして地域に貢献していきたいです。
- ・加工がうまくいかず落ち込んでしまったときも、しっかりと根気良く教えていただき嬉しかった。

### 重機操作技術指導講習会

1. 活動内容 施工実習「重機講習」

2. 実施日 12月16、18、23、25日

3. 実施場所 本校

4. 講師 有限会社 五味重機 様

5. 参加生徒 社会基盤工学科1年生

6. 活動内容 建設系の現場で多く使用される重機「バックホウ」についての講習を行った。油圧装置の仕組みや操作方法を学び、実際に講師の指導のもと重機運転をした。また、「危険予知活動」のシュミレーションをグループで実施し、安全についても考えた。本校OBの方を講師に迎えて、地元の歴史や身近な建設現場についての話にも触れてもらい地域の社会基盤への意識を高めさせることができた。



7 アンケート結果

①重機操作技術講習会

	5	4	3	2	1
話をしっかり聞くことができましたか。	8[%]	72[%]	15[%]	5[%]	0[%]
技術や技能を学ぶことができましたか。	12[%]	68[%]	11[%]	9[%]	0[%]
進路を実現するための一役とすることができましたか。	23[%]	57[%]	18[%]	2[%]	0[%]
社会基盤の仕事を理解する一助とすることができましたか。	11[%]	14[%]	55[%]	20[%]	0[%]
充実した講習会とすることができましたか	25[%]	55[%]	18[%]	2[%]	0[%]

5当てはまる 4だいたい当てはまる 3どちらともいえない

2あまり当てはまらない 1当てはまらない

**県建設業協会と連携して最新機器を利用した測量実習**

1 活動内容 最新測量機器実習

2 実施日 6月4日

3 実施場所 本校および矢高グラウンド

4 講師 長姫土木会

5 参加生徒 社会基盤工学科3年生



6 活動内容 生徒たちが日頃の実習では体験できない最新の測量機器を使った実習を行うことができた。実習室での座学では最新機器を利用した実務例を学んだ。本校OBの方を講師に迎えて、地元の歴史や身近な建設現場についての話にも触れてもらい地域の社会基盤への意識を高めさせることができた。

7 アンケート結果

①最新測量機器講習会を実施後、あなたはどのように感じましたか。

5当てはまる 4だいたい当てはまる 3どちらともいえない 2あまり当てはまらない 1当てはまらない

	5	4	3	2	1
話をしっかり聞くことができましたか。	10[%]	70[%]	15[%]	5[%]	0[%]
測量機器の取り扱いや知識を学ぶことができましたか。	12[%]	68[%]	11[%]	9[%]	0[%]
測量機器の講習会は充実させることができましたか。	23[%]	57[%]	18[%]	2[%]	0[%]
進路を実現するための一役とすることができましたか。	10[%]	15[%]	55[%]	20[%]	0[%]

## 地域公開講座(春)[社会保険・生命保険・金融・税務・不動産・相続を学ぶ地域開放講座]

- 1 日 時 5月から7月 9時から12時
- 2 場 所 本校プレゼン室
- 3 講 師 学校長 原 康倫
- 4 参 加 者 51名
- 5 活 動 内 容 5月25日(土) 開講式 ライフ・プランニング等  
6月1日(土) 雇用保険から失業手当等  
6月8日(土) 年金制度や民間の生命保険等  
6月22日(土) 生命保険の続き, 損害保険, リスク管理等  
6月29日(土) 金融資産の運用, 金融商品の関連法規等  
7月6日(土) タックスプランニング等  
7月20日(土) 不動産の価格, 不動産に関わる民法の知識や登記等  
7月28日(土) 相続と事業継承の分野, 講習会閉講式

### 6 感 想

・勉強のために何処かへ通うことや習うことは敢えて時間を作らないとできなかったが、学校からの手紙でこのような機会を与えられ自分の知識にできたことは有り難いと思った。(30代 女性)

・高校での普通の授業で学ぶ専門をもっと詳しく勉強できたし、大人になってから役立ちそうなことをたくさん知ることができた。(高校 女子)

・毎回の授業が分かりやすく、進学してからも勉強できたら良いなと思う(高校 女子)

・商業科3年の娘が部活が終わるので一緒に勉強しようと思い受講した。3時間はとても長いかなと思っていたが、毎回あっという間に時間が過ぎていった。税理士事務所に勤めているので今後の仕事に役立つ講座だった。略地域公開と子供が通っているため、受講しやすかった。今後も参加した。(50代 女性)

・日々の業務に追われ言葉の意味や内容に疑問を感じも調べることさえなかった事が分かりました。自分の源泉徴収や給与明細等を見て計算しても合わないことがあり、控除の欄をもう一度見てみたい。

・仕事上直結した内容が多く大変ありがたかった。知らないこと、不明に思っていた部分もこの講座で納得したことがあった。分かりやすい説明で、長姫の高校生は良いなと感じた。(40代 女性)

(40代 女性)

・元々興味があって受講したが、受講してとても良かった。自分の卒業以来の母校の雰囲気・活動・取組も知ることができ、校長先生のフットワークや姿勢を感じられ、有り難いと思った。今後も長姫のHPをチェ



ックしながら、仕事のスキルに合う講習を受講したい。  
(40代 女性)



### 地域公開講座(秋)[法律を学ぶ開放講座]

1 日 時 10月から12月 9時から12時

2 場 所 本校プレゼン室

3 講 師 学校長 原 康倫

4 参 加 者 27名

5 活 動 内 容 10月12日(土) 開講式 民法の基本理念、物権や債権の意味等

10月19日(土) 権利義務の主体と契約等

10月26日(土) 民法上の解約手付、期限と条件の違い、債務不履行、消費貸借等

11月2日(土) 不法行為、債権の消滅、時効、手形・小切手等

11月9日(土) 人的担保(保証、連帯保証、連帯債務)、物的担保(留置権、先取特権、質権、  
抵当権)当11月16日(土) 特許権、実用新案権、意匠権、商標権、著作権、独占禁止法、  
大店立地法、消費者契約法、特定商取引法、個人情報保護法等ビジネスに関する諸法規等

11月23日(土) 会社、法会社の形態、労働・雇用関係法の続きから家族  
法等

11月30日(土) 「婚姻」、「離婚」、  
「相続」、法定相続と遺言、遺留分減  
殺請求、「労働者派遣」等 閉講式(修  
了証と本校のオリジナルライセンス  
「ビジネス法務アシスタント」の称  
号認定証)



## 地域ビジネスと環境の研究開発

- 1 活動内容 地域ビジネスと環境の学習内容及び授業体制の検討
- 2 担当教諭 和田貢、山田、古田、吉田、田中、吉澤
- 3 検討内容 地域ビジネスと環境の学習内容の検討を行った。環境については座学を15～20時間行い、座学をもとにした調査・研究を10～15時間行う。その後、クラス単位の間接発表会、学年単位の年度末発表会を行う。具体的な学習内容は以下の通りである。
  - ・座学
 

地球を知る 地球の成り立ちについて学ぶとともに、地球を形づくる物質や地球上を循環する物質について学ぶ。また、人間が、地球上の物質や生物を資源としてどのように利用しているのかについて学ぶ。

環境問題を知る 地球温暖化問題を中心に、しくみと予想される影響および対策の考え方について学ぶ。また、人間がエネルギーをどのように利用し、そこでどのような技術が使われているのかについて、地球温暖化対策とのかかわりを考えながら学ぶ。

持続可能な社会に向けて 人間が将来にわたって地球の環境から、その恩恵を享受し、発展し続けていくためには「持続可能な開発」の考え方に基づく行動が必要であることを学ぶ。
  - ・発表、準備（10～15時間）
 

日常空間の中で生じている問題について、座学で学んだ基礎情報をもとに、解決への筋道について生徒自身が考え、理解を深める。

10月頃からのクラス単位での発表会を実施する。2月にクラス単位での発表会を行った後、クラス代表を選出し、学年単位での発表会を実施する。

#### 4 R02 年度計画 計画(予定)

	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
地域 ビ ジ ネス		学年・クラス・生徒にお知らせ			模擬授業 (2C) (2G)		模擬授業 (2C) (2G)		
			外部指導者打合せ		学科融合 外部指導者		グループ発表		
環境		学年・クラス・生徒にお知らせ				模擬授業 (2E) (2F)		模擬授業 (2E) (2F)	
			外部指導者打合せ			グループ振り返り		グループ発表 ルーブリック評価	

5 設定科目の参考資料

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	長野県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	長野県飯田O I D E長姫高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	総合技術・地域ビジネスと環境
単位数	2
対象学科・学年	全学科（機械工学科、電子機械工学科、電気電子工学科、社会基盤工学科、建築学科、商業科）・2学年
必修修・選択の別	必修
設定する教科・科目の内容	<p>設定する教科：総合技術（学校設定教科）</p> <p>科目の目標：専門性の育成          ビジネスと環境保全の知識について、持続可能な地域社会の実現の視点で捉え、実践的・体験的な学習活動を行う。</p> <p>科目の内容：環境やビジネスの基礎を学習すると共に企業連携による課題をグループ学習により解決の道筋を理解し、それを発表する学習を行う。</p> <p>1 ビジネスと環境の基礎学習          (1) 授業ガイダンス          (2) 地域ビジネス(地域の産業、ビジネスコミュニケーション、民法の基礎とCSR、産業財産権、原価計算基礎、マーケティング)          (3) 環境(地球を知る、環境問題を知る、持続可能な社会に向けて)</p> <p>2 企業連携による課題解決          (1) 企業から課題の提案          (2) 課題の洗い出し、調査、分析 グループ分け          (3) 各種課題を解決するアイデアの創出</p> <p>3 課題解決の道筋の発表          (1) 解決のための道筋のまとめ(レポート、プレゼンテーション)          (3) プレゼンテーションによる発表会          (4) ふりかえり</p>
その他特記事項	評価は小テストと課題解決の発表会のパフォーマンス評価を合わせて行う。

工業科の講演会

1. 講師 ソニー元副社長 高篠静雄 氏

2. 日 時 令和元年 11 月 21 日 (木) 6 限目 (14 : 30～15 : 20)

3. 場 所 飯田 OIDE 長姫高校 大体育館

4. 聴 講 者

1 学年	機械工学科・電子機械工学科・電気電子工学科・商業科	199 人
2 学年	機械工学科・電子機械工学科・電気電子工学科・商業科	193 人
3 学年	機械工学科・電子機械工学科・電気電子工学科・建築学科 商業科	239 人
		合計 631 人

5. 目 的 高篠静雄 氏のソニーでの、ものづくりの経験及びプロジェクトリーダーとしてのリーダーシップ論について講演をいただき、生徒にリーダーとしての心構えおよびプロジェクトメンバーとしての考え方について学習する。また、今後の高校生活について考えさせる場にする。



6. 講演アンケートの結果

別紙参照

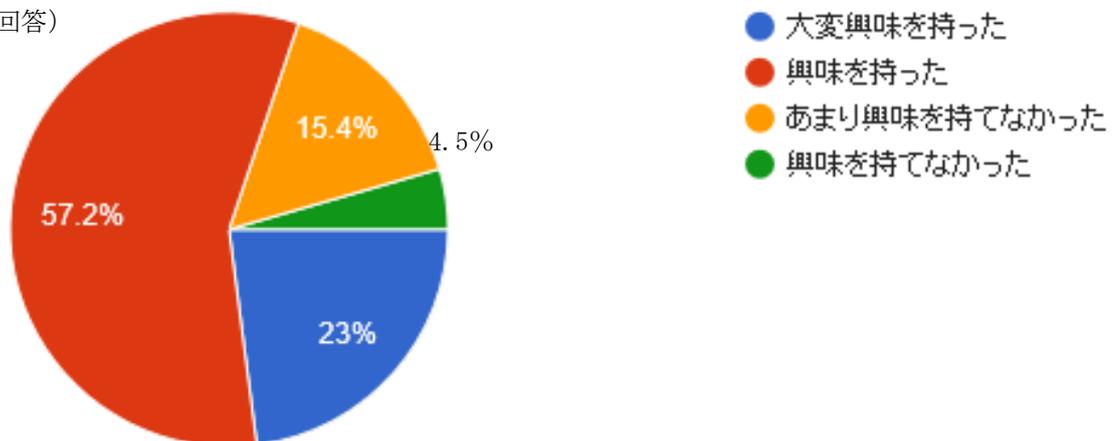
7. 担当者所見 1 時間の講演でしたが、生徒にはものづくりへ取り組み方・イノベーションの起こし方や夢を持つことの大切さなどをお話しいただき、生徒のアンケートからも 80%以上の生徒が講演内容に興味を持つことができました。また、感想にも夢を持つことや努力の大切さについて記入されていた。以上のことより有意義な講演会が行われることができたのではないかと考える。



“ウォークマンの父” ソニー元副社長 高篠静雄さんの講演のアンケート結果

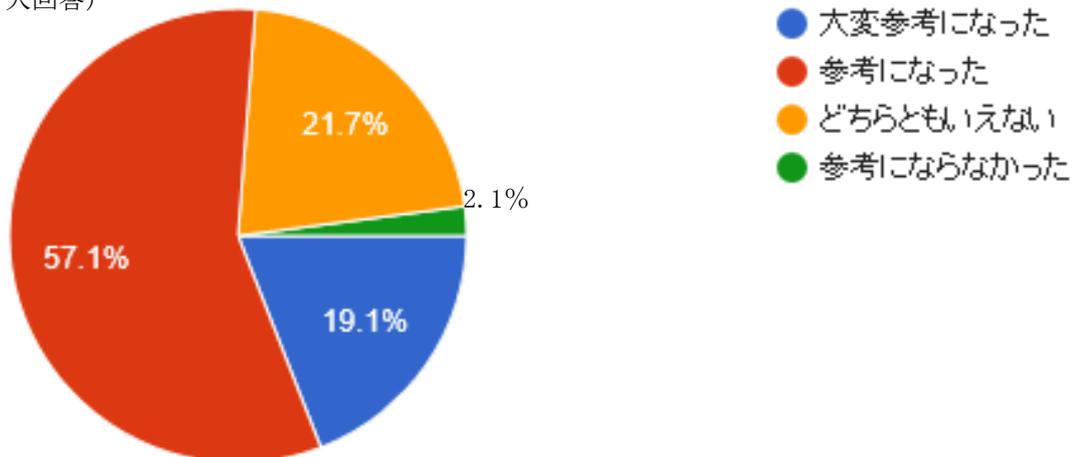
①講演の内容に興味を持ちましたか？

(579 人回答)



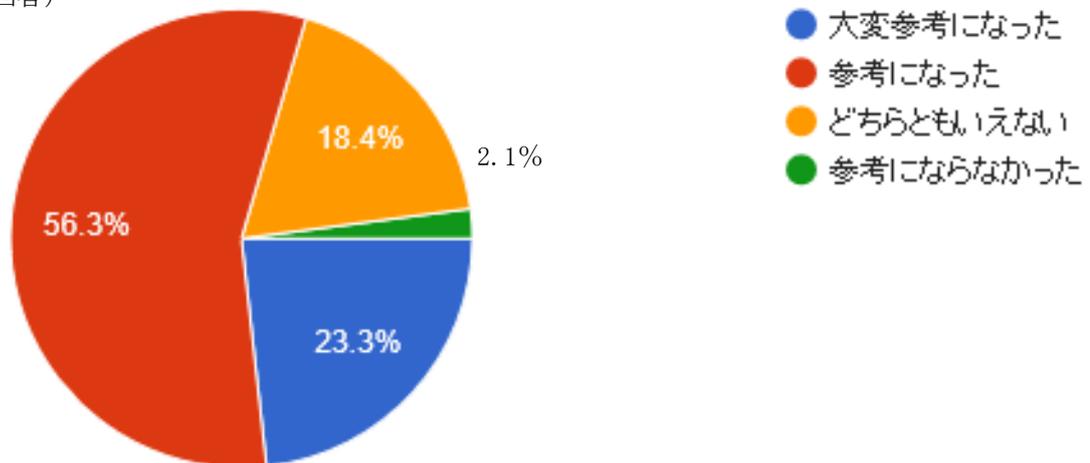
②企業でのリーダーシップの取り方についてわかりましたか？

(576 人回答)



③プロジェクトチームのメンバーとしての、意識の持ち方についてわかりましたか？

(576 人回答)



④講演の感想や疑問に感じたことや発見について。(抜粋)

- ・ 新しく、すごいものを作るには、知識も必要だけどその知識でできる範囲ではなく、理論で考えたらできないものを発想力や努力が必要ということがわかった。
- ・ 目標に対しての姿勢や、大きい目標には失敗が付き物だということがよく分かり失敗したからといって挫折せず、継続することが大事だと分かった
- ・ 目標は必然性を持つことが大切というお話で、可能性で目標を立ててしまうと妥協するということになるほど
- ・ 何かを産み出すためには、多くの問題や試練を乗り越えてひらめき、行動力を駆使することが大切だと思った
- ・ ウォークマンが完成するまでかなりの時間や労力がかかったと思うが、諦めずに努力して作った静雄先生の熱意が伝わってきた
- ・ 可能性は妥協の産物でしかないという言葉に感銘を受けました。何かをするときにリスクをおそれるより失敗を恐れず、何かに取り組みたいと感じました。
- ・ ととても、参考になりました。目標を持って生きること。そして、その目標はできるだけ高くもつこと。その大切さを学びました。常に上を目指し、尽きることのない向上心こそが、成功の秘訣だと感じました。ありがとうございました。
- ・ 連続した発想ではいいアイデアは生まれず、思い切って非連続な発想をすると良いという事は大変勉強になった。
- ・ プリントの裏面に書いてあったことが参考になりました。人生は勉強！

- ・ 今まで世の中になかったものを開発するのは大変な事だと思ったしその努力があったからこそ今の私達は端末を使って音楽を聞く文化があるんだと思ったのでほんとに感謝したいなあと思いました。
- ・ いろいろな経験を聞かせていただいて、とても楽しかった。大胆さが大切なことや、目標の達成のための努力の大切さを知ることができた
- ・ 夢や行動は回りまわって自分の経験として積み重なっていくんだと思いました。一つの目標からおきな事を成し遂げるためには周りの人と協力していくチームワークも必要だと思いました。

⑤講演を聞いて高校生活では、重要なことは？（抜粋）

- ・ いろんなものを見て、感じて、学ぶそんなことが重要だと思う。
- ・ 夢を持つことは大事だと思った
- ・ 将来に向けて勉強をし、準備すること
- ・ 夢を持つこと、そして叶えるための努力を怠らないこと。
- ・ 自分の目標に対する努力と、馬鹿にされても意に介す事がない鉄の意思
- ・ 自分の目標を見つけたらその目標を追い続けることが重要だと思った
- ・ 夢は大きく設定してそれに向けて努力していくことが大事だとだと思った。
- ・ これから社会人となるために自分の中で目標を立ててその目標に向けて日々の生活を送るということ大切にしていきたいと思いました
- ・ 検定やテストなど普段の生活でも何か目標をもつことが重要なのではないかと感じた。
- ・ 自分の目標を持って生活することが重要だと分かった。また、その目標を成せるようになりたい。
- ・ すぐに達成出来る目標を設定するのではなくて達成が難しい目標を設定してそれに向かって努力をするべきだなあと思いました。
- ・ 諦めないこととか努力が必要であるということを感じました。夢とか目標を達成するために頑張ろうと思います。
- ・ 新しいものを作り出すとき、目標を低く作るのではなく、高い目標を持ち自分たちを向上させる気持ちで挑み、失敗しても諦めずに挑戦することが大切だとわかり、これから挑戦を大切にしていきたいと思いました。
- ・ 知識を広げるために、授業などで習う基礎的なところを大事にして、周りの色々なことに興味、関心をもっていくことや、努力を続けることを大切にしていきたい。最初からできないと諦めるのではなく挑戦する勇気を持ちたい。
- ・ 先生から教わるだけではなく、自分が興味を持ったことについて意欲的に調べ、質問をすることが知識をつける上でも重要なことだと感じた。
- ・ 授業や課外活動、友達との話でも無駄なことなんて何一つないということが分かったので、出来るだけたくさんを経験して自分の将来に生かしていきたいと思った。
- ・ 自分の将来なりたい姿にどうすれば近づけるのか叶えることが出来るのかまずは目標を持ち、実行していくことが重要だと思いました。また、目の前に見えていることだけに囚われず、新しい発想をそしているいろんなことに興味を持っていきたいなと思いました(◡̈)✧
- ・ 普段から使用している物には色んな人の努力がつまっているということがわかったので、勉強やものづくりをする時は、諦めず、努力して行うことが重要だと思います
- ・ 仲間を大切にし、協力や切磋琢磨しあって目標、夢を叶えていくことが大切だと感じました。日頃の態度、生活でもコミュニケーションを大切にしていきたいと思います。

## 工業科の地域人教育

工業科における「地域人教育」の実践及び研究開発

- 1 期 日 6月13日(木)(キャリア学習)  
 8月28日(水) 8月29日(木)(インターンシップ)  
 11月28日(木)(企業展示会)

- 2 参加者 キャリア学習 1年生, 2年生 全員  
 インターンシップ 工業科2年生 全員  
 企業展示会 2年生 150名

### 3 活動概要

(1)キャリア学習 クラス別に学科の特性に合わせた見学場所や地域でのフィールドワークを実施した。企業や大学等の見学を通して、製作現場で働き社員の姿や大学の講義の様子等を知ることより、主体的に進路を決める一助とすることができた。

2年生

	担当教員	見学場所等
械工学	福澤智之 吉川照晃	諏訪東京理科大 セイコーエプソン
電子機械工学	西川恵 宮下亮太	トヨタ自動車 名城大学
電気電子工学	田中海史 岡崎和弘	名古屋文理大学 三菱電機(株)名古屋製作所
社会基盤工学	小林洋一 返町和貴	黒部ダム
建築学	木下良示 伊藤彰朗	茅野市民館 八ヶ岳美術館 キースヘリング美術館
商業科	木下通彦 武藤悠子 鈴木卓 長谷川三香	名古屋市大須商店街フィールドワーク 名古屋商科大学

1年生

	担当教員	見学場所等
機械工学	細田貴仁 松島健二	愛知製鋼 トヨタ自動車
電子機械工学	小池伸一 木下史夏	トヨタ産業技術記念館 三菱重工 MRJ 組立工場
電気電子工学	原伸樹 平坂勇樹	碧南火力 リニア鉄道館
社会基盤工学	木下史歳 和田貢	東海地区現場見学
建築学	藤田晶子 石原真也	軽井沢ハルニレテレス 発地市庭 千住美術館
商業科		松本市上土ふれあいホール 松本市上土商店街フィールドワーク



(2)インターンシップ 地域への企業へ出向き実際の業務を体験することで、企業や職種への理解を深めると共に企業の社員がどのように働いているのかのイメージを持つことができた。

インターンシップ企業一覧と参加生徒数

企業名	人数	企業名	人数	企業名	人数
豊信合成(株)	1	(株) 協和精工	4	信南交通 (株)	1
(株)南信精機製作所	1	(株) ケーツー	1	輸入石油 (株)	1
信州航空電子(株)	1	(株) アイテク	1	(有)ホテル弥生	2
(株)ヒューブレイン	1	(株)甲信マツダ飯田店	1	三菱ライフサービス(株)	1
多摩川モータロニックス(株)	1	(株)オートボックス美濃	2	小林製袋産業 (株)	1
伊那食品	1	トヨタカローラ南信飯田上郷店	1	(株)ジョイフルテン	1
NSKマイクロプレシジョン(株)	1	(株)ホンダカーズ信州	2	(株) NEXAS	1
(株)コシブ精密長野工場	1	飯田市上郷図書館	1	(有)協和電設	2
日邦電機(株)	1		1	シチズン時計 (株)	2
(有)米山金型製作所	1	飯田広域消防本部	5	ハナブサ精機 (株)	1
天恵製菓 (株)	1	飯田市美術博物館	2	三菱ダイヤモンド工業 (株)	1
飯田精密 (株)	2	新井電気工事 (株)	2	(株)キンポーメルテック	2
横浜ゴム(株)長野工場	1	(株) 富士電機	8	アジア電子工業 (株)	1
エネティーツール(株) 飯田工場	1	信菱電機 (株)	1	(株)アルファーステム	4
三菱バストラック(株)	3	(財)中部電気保安協会	2	みなみ信州農業組合	1
飯田市立鼎みつば保育園	2	板倉電設(有)	1	(株) 平安堂飯田店	1
夏目工学 (株)	2	三菱電機(株) 中津川製作所	2	聖くらはら幼稚園	1
多摩川マイクロテック(株)	2	(株)スタンレー伊那製作所	2	TDK庄内(株) 飯田工場	3
飯田市役所 スポーツ課	1	飯田市役所 水道課	2	飯田市役所 下水道課	1
飯田市役所 建築係	5	(株)LADVIK飯田事業所	1	日進精機(株) 飯田工場	1
山京インテック (株)	3	オムロンオートモーティブエレクトロニクス (株)	4	KOA (株) 匠の里	1
(有)野中製作所	2	旭松食品 (株)	2	化成工業 (株)	2
KOA (株) 七久里の社	2	多摩川精機 (株)	2	中部電力 (株) 飯田営業所	5
飯田建設事務所	9	吉川建設 (株)	5	木下建設 (株)	4

神稲建設 (株)	5	勝間田建設 (株)	3	(株) 三六組	2
(有)井坪工務店	2	(株) ナガイ	2	明和工業 (株)	2
小澤木材 (株)	2	(株) 鈴木建設設計事務所	2	(株) 桂建築設計事務所	2
長豊建設 (株)	1	金本建設 (株)	1	北沢建設 (株)	2
(株) カリス	1	小池建設 (株)	3	(株) 嶺水	2
技研開発 (株)	2	(株) 小林コンサルタント	2	栄和測量 (株)	1
(株) 飯田コンサルタント	2	(株) 長姫	2	長姫調査設計 (株)	2
(株) アンドー飯田支店	1	国交省中部整備局天竜川上流事務所	3		



### (3) 企業展示会

(公財)南信州・飯田産業センターと協力し、産業振興と人材育成の拠点(エス・バード)にて地域の高校生(8校)、短大や専門学校の学生と共に企業展示会に参加した。クール制を採用し第1から第3クールまでは希望する企業の話をも30分聞きます。自由見学の時間には3つのクールで聞けなかった企業をフリーに選択し話を聞くことができます。本校は就職希望の生徒を中心にバス4台で約150名が参加した。

企業展示会の当日の日程は下記の通りです。

自由見学	13:30 ~ 14:30
第1クール	14:30 ~ 14:55
第2クール	15:05 ~ 15:30
第3クール	15:40 ~ 16:05
自由見学	16:15 ~ 16:45

また、本校の参加は下記の通りです。

データの数字は第1クール、第2クール、第3クールの参加者数を合わせたものです。

企業名	人数	企業名	人数	企業名	人数
シズン時計メニファクチャリン	18	夏目光学(株)	14	山京インテック(株)	9

グ(株)飯田殿岡工場					
(株)NEXAS	13	信州航空電子(株)	14	(株)マルヒ	2
天恵製菓(株)	18	昭和電設工事(株)	6	ミナト光学工業(株)	3
旭松食品(株)	8	KOA(株)七久里の杜	17	(株)協電社	3
柴田科学(株)飯田工場	5	(株)コシブ精密長野工場	3	(株)JMC	3
多摩川モータートロニクス(株)	16	三和ロボティクス(株)	12	綿半ソリューションズ(株)	12
(株)協和精工	5	(株)川辺製作所長野事業所	2	興亜エレクトロニクス(株)	7
信菱電機(株)	6	(株)セイコーアドバンス飯田支店	4	(有)米山金型製作所	1
津具屋製菓(有)	5	谷口醸造(株)	2	飯田精機(株)	5
シルクホテル中田製絲(株)	18	吉川建設(株)	18	(株)エムケーセラ	2
信南交通(株)	15	(株)イイダアックス	4	(株)キャストイーネット	2
(株)ジョイフル・テン	11	喜久水酒造(株)	7	ハナブサ精機(株)	2
(株)キンポーメルテック	3	南信州菓子工房(株)	14	(株)浜島精機	1
(株)阿智精機	1	丸西産業(株)	4	(株)矢崎製作所	1
(株)花井メディテック	2	(株)キラヤ	18	(株)ピーエーイー	1
(株)南信精機製作所	4	メディネクス(株)	7	(株)ヒューブレイン信州松川事業所	2
小林製袋産業(株)	15	(株)木下建設	18	アルプスウェア(株)	2
技建開発(株)	9	オムロンオートモーティブエレクトロニクス(株)飯田事業所	18	(有)エクスルース	1
神稲建設(株)	18	クロダ精機(株)	3	エトナ(株)飯田開発センター	1
(有)井坪工務店	11	(株)エフプラス	2	(株)ミナミ	8
荏原環境プラント(株)	13	(株)スタンレー伊那製作所	2	プロスク(株)	3
大王パッケージ(株)	5	飯田精密(株)	2	東海興業(株)下条工場	1
(株)山岸エーアイシー	5	大和グラビヤ(株)南アルプス工場	1	(株)スヤマ	2
NSK マイクロプレシジョン(株)	2				

#### 4 アンケート結果

(1)キャリア学習 2クラス分のみのアンケートの人数の合計

質問事項	5	4	3	2	1
見学先企業はどんな仕事をしているか分かりましたか。	52	25	1	0	0
企業で働いている方の様子を知る機会となりましたか。	51	18	8	0	1

専門性を高める工夫について知る機会となりましたか。	31	30	13	3	1
環境保全等の取組について知る機会となりましたか。	35	29	14	0	0
見学先企業の企業活動を知ることができましたか。	42	28	7	0	0

キャリア学習先の企業において、「どんな仕事・・・」、「働いている方・・・」の質問項目では5の回答が最も多く、企業の様子は良く分かったと捉えることができる。「専門性を高める・・・」項目において自分の学科の専門性が活かせるか、企業自身がさらに向上するには、という意味を含めて問うたところ、その回答では5と4がほぼ同数となった。また、「企業活動・・・」の項目では会社の組織という意味も含めて質問であるが、ここでも若干5が多いという結果となった。表面的なものは見えて理解できるが、その内面にはなかなか迫ることができない状況であることが推察できる。

(2)インターンシップ 数字はパーセント 母数は約 260 です。

質問事項	5	4	3	2	1
インターンシップ先企業はどんな仕事をしているか分かりましたか。	73.8	24.2	1.2	0.8	0.0
企業で働いている方の様子を知る機会となりましたか。	78.3	19.8	1.6	0.0	0.4
企業の利益を上げる工夫や社員の技術・技能を高める工夫について知る機会となりましたか。	42.9	38.3	16.5	1.5	0.8
インターンシップ先企業の環境保全等の取組について知る機会となりましたか。	43.0	35.7	17.1	3.5	0.8
インターンシップ先企業の活動を知ることができましたか。企業活動→組織の様子やその活動状況	59.8	35.5	4.2	0.4	0.0
自分自身を向上させる機会となりましたか。	58.1	35.7	4.3	1.6	0.4

(2)のキャリア学習とほぼ同一内容の項目でアンケートを全クラスから実施した。表中の数字は分母を 260 としたパーセントで示してある。結果はほぼ同じ傾向であるとみることができる。見学中心のキャリア学習と体験が中心であるインターンシップの体験が伴っている場合でも「技術技能を高める・・・」と「環境保全・・・」の項目は数字の変化が少ないため、あまり効果がないことが分かる。企業の組織の様子等の項目ではキャリア学習と比べると若干であるがインターンシップの方が改善されている。これは実際の職場で働くことによりその様子を感じられる場面が多々あったのではないかと推察される。

(3)企業展示会 数字はパーセント 母数は約 140 です。

企業説明会はあなたにとって有益であったと思いますか	
項目	人数
①大変有益だった	40
②まあ有益だった	81
③どちらともいえなかった	14
④有益ではなかった	2

上記設問において、①・②と回答した方は、具体的にどのような点が有益か、また、③・④と回答した方は、その理由をお聞かせください。

①②について

- ・普段気にしていない会社の事業内容を詳しく知ることができた
- ・地元企業の実態が分かった
- ・企業の人の熱意のある説明がよかった
- ・自分で調べるには限界があるので、業務内容の詳細を実際に働いている人から直接聞いてよかった
- ・採用試験でどんなところが見られているのかわかった
- ・自分がどんなことを目指しているのか、どんな仕事がしたいのか、詳しく理解することができた
- ・進路の選択肢が増えた
- ・生の声が聞けた
- ・電力を使う以上、抵抗器は必ず必要になってくることを知り、抵抗器を作る企業はこの先も安定していると思った
- ・絶対にこの企業は嫌だという企業を知ることができた
- ・事務希望だが、事務職の人も来てくれていて、自分が不安に思っていることが質問できたり、質問に対してきちんと答えてもらえた
- ・それぞれの企業が自社のアピールを最大限にしているのわかりやすかった
- ・これまで民間企業についてあまり知らなかったのでいろいろな話が聞けてよかった
- ・地元就職を選択肢の一つとして考えられるようになった
- ・志望する企業で必要とされる資格や求められる人材について知ることができた
- ・いろいろなジャンルの仕事があると知った
- ・自分に向いているかを判断する材料となった
- ・進路をまだはっきりと決めていないが、もし就職したら…をイメージする良い機会となった
- ・様々な企業の取り組みを知ることができおもしろかった
- ・入社してみたいと思う企業をみつけることができた
- ・年ごとの採用人数や入社したらどんなことをするのか知ることができ、今後の参考になった
- ・先輩方のアドバイスを聞けた
- ・仕事について、働くということについて学べた
- ・自分が興味をもてるものを開発している企業を知ることができた
- ・最新の技術のことがわかった
- ・企業の人と直接会うことができたので、パンフレットやホームページより詳しく知ることができた
- ・様々な職業をみることでよかった
- ・どういう人が必要なのか、何が必要になるのか、などわかった
- ・地元の企業でも知らないところがあり、新たな発見があった
- ・親がどんな企業でどんな仕事をしているか知ることができた
- ・会社内でのイベントや、理念や目標、活動など社内の様子を知ることができた
- ・展示物に興味をもてた
- ・普段なら聞けない話を聞いて進路選択の参考になった
- ・様々な企業の特徴を知ることができた
- ・現場で活用されている技術や企業としての意見を知ることができた
- ・どのようなことを学んでいくとよいか参考になった
- ・月給なども知れたし、社会のしくみをいろいろ知ることができた
- ・地元の企業にどんなことをやっているところがあるのか、どんな良さがあるのかがわかった
- ・分野の違う企業のことも知ることができた
- ・どの企業も社員が欲しいということがわかった
- ・飯田にも有名な会社がたくさんあることを知れた
- ・様々な業界でどんな人材が求められているのかを知り、自分に合っていそうな分野の企業を選ぶことができた
- ・休日についてなど、聞きづらいこともいろいろと話してくれた

- ・自分の気になっている企業の仕事内容などを知ることができた
- ・他企業と比較できた
- ・将来働く時には挨拶や礼儀などはどの職についても大切なことだと思った
- ・会社によっては採用の話も詳しくしてくれたので参考になった
- ・業務内容や仕事内容だけでなく、社会人になってからの生活のことも教えてもらった
- ・綿半ソリューションズの方々がとてもいい方々で、話していて楽しかった
- ・自分で調べるだけでは分からないことも知ることができた

### ③④について

- ・どこにいきたいのか決まっていなかったから
- ・見たい企業がなかった
- ・進学希望なので必要ないと思った
- ・入社したいと思う企業がなかった
- ・人が多すぎた
- ・自由時間の時間が短かった
- ・高校卒業後は進学希望なので、意味がなかった
- ・興味がなかったところしかなかった、この会自体に興味がなかった
- ・入社したいと思う企業がなかったから
- ・自分は進学を考えていて、就職は先のことだから
- ・説明を受けた会社にあまり良い印象をもたなかったから
- ・県外希望だから
- ・自分の学んでいることを活かせる企業がなかった

## 商業科の地域人教育

1 参加者 商業科の1年生、2年生、3年生のおよそ240名

### 2 活動概要

- (1) 1年生 松本市FS6/13(木)、飯田市FS10/23(水)、24(木)、金融財政プログラム12/9(月)
- (2) 2年生 地域イベント運営4月～11月全6回、インターンシップ、全国生徒商業研究発表大会見学
- (3) 3年生 10の地区・テーマにおいて課題解決型学習を実施。地域人教育成果発表会 12/24(火)
- (4) 派生した取組

#### ① 学輪IIDA 主催 飯田市

- ア ソーシャルキャピタルフィールドスタディ 生徒3名、職員2名参加 8/8(木)～10(土)
- イ アグリイノベーションフィールドスタディ 生徒4名、職員1名参加 8/17(土)～20(火)
- ウ 遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 生徒3名、職員2名参加 9/14(土)～16(月)  
(祝)
- エ フィールドスタディ事前学習・事後学習 生徒7名、職員3名参加 7/19(金)、24(水)、  
11/11(火)
- オ 公開セッションにおける発表、内部討議参加 生徒3名、職員3名参加 1/25(土)、26(日)

外部講師による講義等

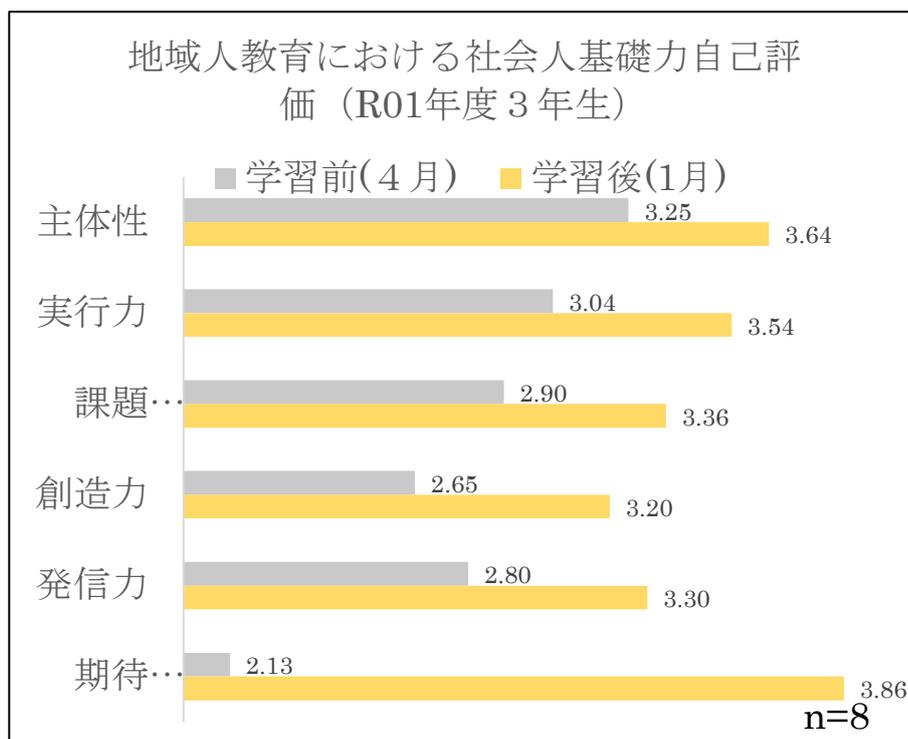
- ア 科目「商品開発」マーケティング分野の技術向上講義 10月から12月 全20回
- イ 科目「課題研究」高校生カフェ開店に向けた研究 9月から11月 全20回

#### 4 アンケート結果

(1) 生徒によるふりかえり (3年生)

A 社会人基礎力調査より

(各指標5段階評価による平均値)



経済産業省 2006年提唱「社会人基礎力」の12の能力から、地域人教育推進委員会において特に地域人教育で育成したい能力を5つに絞り込み、

B 年間ふりかえりアンケートより

①学習テーマ『交流を重視した地域連携学習 社会(地域)に対して当事者意識を発揮する』についてあなたの達成できたと思う事柄、達成できなかったと感じる事はなにか。

【達成できたこと】

- ・地域の課題を発見するときに、当事者意識を発揮できた。
- ・地域に出て課題を見つけて解決に向けた活動をしていく中で、自分の住んでいる地域にも私の知らない課題があるのでは?と考えることができた。このことから、地域のことを他人事として考えるのではなく、自分も地域の一員なんだと感ずることができた。
- ・課題研究を通して、たくさんの地域の人々が活動に協力していただいたので、深い交流ができたと思う。
- ・テーマ型だったこともあり、地域を限定せず多くの地域の方と交流ができた。その交流を通して、「私がやろう」という思いが出てきたので、当事者意識を発揮することができた。
- ・テーマ型で、自分達で研究することを決めたことで、当事者意識が高まった。
- ・農家さんや生産者の方と交流ができたことで、自分たちが他の人に伝えていく立場だと思った。
- ・交流を通して、他人事ではなく自分が積極的に関わろうと意識が変化した。
- ・お客さんに喜んでもらったことで、当事者意識がより高まった。

- ・地域の人ともっと交流する回数を増やしたらさらに当事者意識が高まると思う。
- ・地区の子どもたちがなぜ地元に関心がないのかを子どもたちの立場になって考えることができた。
- ・自分たちで課題を見つけて、それを解決するための取組を通して、当事者意識が高まった。
- ・地区の人の気持ちになって考えることができた。
- ・フィールドワークによって、地域の課題解決についてアイデアが出てきたことにより当事者意識が高まった。

#### 【達成できなかったこと】

- ・自分の意見を人に伝えることが上手にできなかった。伝える力を伸ばしていきたい。
- ・グループの人に頼ってしまうことが多かった。一人の方が当事者意識をより持てるかもしれない。
- ・交流をもっと深めることができなかった。
- ・特定の地域を持たないので、当事者意識はよくわからない
- ・たくさんあるこの地域の良いところを自分たちのやりたいことと絡めながらできればもっと良い課題研究になる。
- ・地域の課題とは異なるテーマのため、地域に対して当事者意識をもち、課題に向き合うことはできなかった。

#### ②「社会人基礎力の自己診断シート」を完成させ、その結果を見ながら、1年間の活動を振り返って、あなた自身が成長したこと、頑張ったこと、変わったことなどを具体的に書き出してみよう（書きにくい場合は、具体的な場면을挙げてみよう）。

- ・地域の人との交流によって、人見知り克服し（頑張った）、人と話すのが楽しくなっていった。
- ・地域イベントで自分からスピーチしたいと名乗り出たことに自分でもびっくりしたし、成長を感じた。  
→（コミュニケーション力に関わる自己成長感の意見多数）
- ・1, 2年生の時のフィールドスタディを経て、3年では地域課題に対する着眼点が変わったと思うし、課題の解決方法を考える時、いろいろな考え方をするようになった。
- ・パワポの使い方、発表方法など成長できた。
- ・誰かに頼ってばかりいたが、自分が何とかしなければという想いが増えた。
- ・地域のHP制作を通して、特に発信力、実行力が伸びたと感じている。
- ・一年間の活動を通して、受け身の考え方を改め、自ら動くことができるようになったと感じる。一年でそれだけ成長することができたなら、今後さらに成長できると思う。
- ・私は創造力というか、アイデアをそんなに出せないと思っていたが、なんのためにやるのか、今やるべきことはないかなどを考えることで、自然とアイデアが出せるようになった。
- ・今まで協調性がもっとも大事だと思っていたが、それぞれが意見考えをもち、主体性をもって意見しあい、そこから協調していくことがいいなあと思うようになった。
- ・自分の意見を言うのが得意ではなかったですが、提案ができるようになった。
- ・活動の中で、広告やお店のデコレーションなどを制作した際、「誰かが見る」という意識でやることによって、新しい考えがうまれました。
- ・自分が言いたいことをいうときに、伝わるよう具体例を出しながら言えるようになった。
- ・自分と違う意見を否定するのではなく、素直に聞き入れることができるようになった。

#### ③1年間の活動を振り返って、グループが成長したこと、頑張ったこと、変わったことなどを具体的に書き出してみよう（自分以外のメンバーがグループに貢献できたことも含めて書いてみましょう）。

- ・会話が弾むようになり、メンバー同士が協力しようと意識が変化した。
- ・他のメンバーの得意不得意がわかり、役割の分担ができてから円滑に活動できるようになった。
- ・意見のぶつかりがあったが、途中から相手を尊重する気持ちになれた。
- ・グループの一部の人しか意見しなかったが、最後には全員が意見を言えるようになっていった。
- ・はじめは知らなかったメンバーの得意なことや好きなことを生かして、グループの力が発揮できた。
- ・自分から意見をいう人が増えたことと、周りが言わなくても自ら行動できる人が増えたこと。
- ・ただ自分たちがやりたいことをやるのではなく、地域のためになるようなことを考えて企画したこと。

- ・意識して協力しているわけではなく、無意識にみんなが協力しあっている感じがして良いなと思った。
- ・活動をはじめたころは、話し合いをしても無言の時間が多く、なかなか話が進まなかった。共に活動していくにつれて、自分の思いを伝えたり、楽しいことを共有したりして楽しく活動で来た。それぞれが思い通りにならず、ぶつかってしまうこともあったが、自分なりに反省して乗り越えられた。
- ・誰かが忙しい、できないときは他の人がサポートしたりカバーしたりするなど、協調性が成長した。
- ・飯田のいいものを知ってもらいたいという目標が定まってから、一人一人がその目標に向かって努力できた。

④ 1年間の活動を振り返って、困ったことや苦労したことを教えてください（書きにくい場合は、具体的な場面を挙げてみよう）。また、そのときにどのように対応したのかも教えてください。

- ・地域人教育に対する熱意の違いから積極性の違いが少し出て、衝突しかけた
- ・白戸先生が「自分たちが楽しいと思うことをやった方が良い」と教えてくれたから、興味のあった商品開発をすることになった。
- ・人任せにされたことが何回かあったけど、逆にチャンスだと思えば平気だった。
- ・地域の要望と自分たちがやりたいことのずれがあった（後に修正された）。
- ・活動を引き継ぐ人がいない
- ・時間が足りない。早め早めに計画しないと大変。
- ・ケンカした。
- ・グループ内の人間関係。
- ・最初の地区決めでもめた。
- ・自分の考え方が全て正しいと思っている人にこそ成長してほしかった。結局周り的那个人に合わせてしまったので、グループとしての成長を感じられなかった。
- ・話し合いで意見が出ないとき（意見多数）
- ・研究テーマが決まらないとき。（やりたいことが見つからない）。
- ・発表会の準備の際、協力者が少なくて精神的に苦痛だった。
- ・イベント前や当日は全員でやろうという気持ちが強かったが、終わった途端にそういう気持ちがなくなった。
- ・話し合いやパソコンで作業している際、真剣に取り組まない。遊んでいる。ゲームしている。
- ・特にない。
- ・当初決めたテーマができないとわかったとき。挫折した。が、乗り越えた。
- ・カフェ店舗の飾りつけのアイデアが浮かばなくてこまった。
- ・イベントでの子どもの接し方に困った。また耳が遠いお年寄りの接し方に困った。
- ・最初はやることの意味、何のためにやるのか、誰のためにやるのかを見出していくのが困った。やっていくなかで見いだせた。
- ・計画したイベントが開催直前に次々とイレギュラーなことがあり、対応に困った。うまく乗り切った。

⑤ 1年間の活動を振り返って、今だからこそわかる、反省事項と改善案（あれば）を教えてください（自分自身のことでも、グループ活動のことでも構いません）。また後輩への引継ぎも含めて、気を付けておくべきことを書いてください。

- ・どの地区でも不安いっぱい。が、最終的にはやって満足になるから、どの地区になっても頑張る
- ・調理室を使うときは、エプロン、三角巾をつけること
- ・時間があるようでない。放課後まで話し合うことがある
- ・地域型よりテーマ型の方が課題に対する自由度が高い
- ・テーマ型より地区に入る方がオススメ。地区に入る方が「THE！地域人教育！！」
- ・テーマ型より地区に入った方が地域の方との関わりが多くて研究がとてもしやすい。地域に入ることをおすすめします。
- ・メンバーとのコミュニケーションを大切に。そうしないと良い研究にならない。
- ・主事さんや先生と頻りに連絡をとった方が進めやすい。

- ・日誌にどんな小さなことでもいいからメモを残しておく。メモがきっかけになることもたくさんあるから。
- ・関わった人の名前と顔をしっかり覚える。
- ・使えるお金の把握。
- ・発表会前はめちゃくちゃ忙しくなるから、早めにまとめること。
- ・協力してくれる人を探すのが大事。
- ・写真は発表のときに重要だから、こまめに撮る
- ・「どうする」ばかり言っても話は進みません。
- ・イベントなどの活動には極力参加した方がいいです。全員が参加した方が後に意見が一致しやすい。
- ・アンケートを取るのも大切。アンケートの内容によって全然違ってくるから、見直しをもってアンケート内容をきちんと考える。
- ・仕事を分担するなどにして、誰かにまかせきりにしない
- ・自分ひとりでやろうとすると絶対にうまくいかない。協力をお願いすることは勇気のいることだけど、自分のためにもみんなのためにも仕事は分担した方がいい。
- ・積極的に行動したり、チャレンジしたりしてみる
- ・地域の方やグループの仲間に思いやりをもつ
- ・課題研究を自分たちから楽しむ
- ・自分たちが地域のためにやってあげていると思わないこと。
- ・講演会は1、2年生のうちにやっておくべき。活動の時間が減る。
- ・講演は市長や白戸先生の以外いらない。プレゼン講義も1時間にまとめて、活動の時間を増やしてほしい。
- ・無駄な講義が多すぎて、活動時間が短い。
- ・グループの決め方を変えてほしい。
- ・グループを勝手に決めるのは良くない。先生からみて仲のいい人、リーダーになれる人をみて、決めるのはよくない。
- ・グループは別に仲良い人をくっつければいいとは思わないし、むしろ全然話さない人の方がやりやすい。とにかく2度とやりたくない。
- ・クラスに関係なく、自分の入りたい地域やテーマでグループを作った方が、「自分で選んだ」ということもあるので、最初の意欲や当事者意識も高く学習が始められる。
- ・先生が一人ひとりをちゃんと見ていない。日誌よりも実際に活動している時を見てほしい。
- ・情報はきちんと全員に伝わるようにしてほしい。
- ・先生として生徒とどう寄り添うべきか考えてほしい

⑥この授業に対する、年度初めの期待感と現在の満足度を教えてください（1が最小、10が最大）。

また、その満足度の理由（1年間の感想）を教えてください。

- ・最初は面倒くさかったけど、やってみて地域の方と関わって楽しかった。（同意見多数）
- ・達成感すごい（同意見多数）
- ・最初は全く興味がなかったから、面倒くさいと思っていたけど、やっていくうちにいろんなことが分かってきたり、顔見知りが増えたりして楽しいと思えました。課題研究の目標達成だけでなく、大人の方、初めましての人とたくさん話せたことが一番うれしかったです。
- ・地域の方と関わるのが元々好きだったから、地域人教育の時間はすごく好きだった。楽しかった。
- ・最初は何も知らない地区だったが、活動を進めていくにつれて地区のことを知ってきて、最終的に大満足。
- ・当初は課題研究の3時間、その時間勉強すればもう一つ何か資格が取れたんじゃないかと思っていましたが、今では、地域人教育をやってよかったと思っています。貴重な体験ができました。
- ・出会えた大人たちは自分の仕事に精一杯、愛を持って働いていて、そんなカッコいい姿を見るべきだと感じた。

- ・一年間を通してグループで取組むことの大切さがわかった。就職先でも生かしたい。
- ・もっと地域に関われる活動がしたかった。地域があって、主事さんと地域の方と1年間やってみたかった。
- ・テーマ型は結局O I D E じゃなくてもできる活動だと思う。

## 商業科の「課題研究」における地元企業連携

1 活動内容 商業科「課題研究」における地元企業連携  
～高校生カフェ開店に向けた研究～

2 日 時 令和元年9月13日（金）  
令和元年9月20日（金）  
令和元年9月27日（金） など全20回

3 実施場所 本校（飯田O I D E 長姫高校） 2F 3F教室  
カフェ三連蔵（飯田市通り町2丁目）  
やきまる（飯田市本町1丁目）

4 講師 株式会社 trackworks 代表取締役 近藤 識 氏

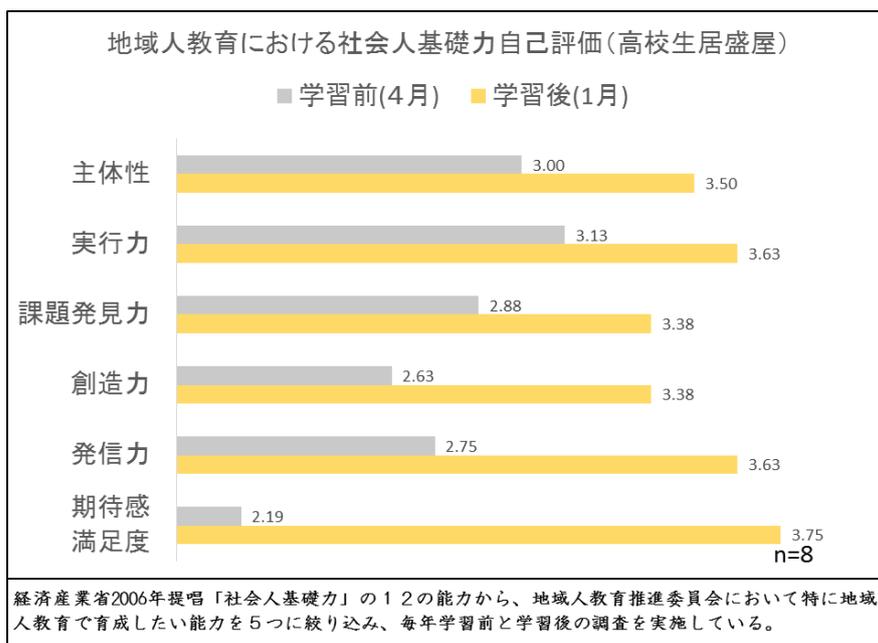
5 担当教諭 國松 秋穂

6 参加生徒 商業科3年 8名

7 成果と研究概要



図1：講義のようす



## 高校生居盛屋「笑歩」(テーマ2)



### 【研究メンバー】

小西 英瑠真    下平 風月    横道 愛友  
 石川 詩桜    藤本 里菜    吉沢 優花  
 後藤 和        横前 瑠美  
 國松 秋穂 (指導教員)  
 片岡 博昭 (飯田市役所職員)  
 脇田 久世 (飯田市役所職員)

### 【ご協力いただいた方々】

t r a c k w o r k株式会社	吉澤農園様
カフェ三連蔵様	農園さくら様
やきまる様	臼井農園様
株式会社テスク「生活菜園」様	
旭松食品株式会社様	
小野子人參クラブ様	

### (1) はじめに

私たちは、飯田下伊那の良いものを再発見し伝えることにした。食に目を向けた時、私たち自身が飯田下伊那の食材やその良さについて知らないことに気がついた。加えて、中心市街地には居酒屋が多いことに気づき、この2つを組み合わせ、飯田下伊那の食材を使った料理に親しむ場を作ることにした。そして、私たちのようにお酒の飲めないひとでも楽しめる場をつくりたい、そのお店で盛り上がってほしい、と願いを込めて、酒という字を盛るという字に変えて「高校生居盛屋」を開店することにした。

### (2) 研究課題

- ①飯田下伊那の食材の良さを知らない若者をターゲットとする。
- ②飯田下伊那の良いものを再発見する。
- ③飯田下伊那の食材を使った料理を提供し、良さを知ってもらう。

### (3) 研究経過

- 4月 チーム結成
- 5月 中心市街地にて聞き込み調査
- 6月 飯田下伊那の良さについて出し合う (ブレインストーミング)
- 7.8月 カフェ三連蔵の近藤さんに協力していただきながら居酒屋開店に向けての準備 (メニュー決め・広告作成・協力店舗探し)
- 9月 店舗名を高校生居盛屋「笑歩」に決定 (みんなで笑って歩んでいくという意味)
- 10月 生活菜園の塩澤さんに協力していただきながら仕入れ業者への交渉  
第1回開店
- 11月 農家さんへインタビュー実施・飯田下伊那の食材の良さをまとめた冊子の作成  
第2回開店

#### (4) 研究内容

飯田下伊那の食材の良さを再発見し、居酒屋を通してそれを提供することで、高校生などの若い世代に食材の良さが伝わるのか研究した。

- <事前調査> 中心市街地でフィールドワークを行い、高校生が気軽に入れるお店や、日中開店しているお店が少ないことを確認。
- <開店準備> 協力店舗、仕入れ食材など様々な交渉を実施。  
広報宣伝活動（広告・SNS・新聞）  
メニューの考案
- <開店> 10月12日と11月23日に開店。飯田下伊那の食材を使ったメニューの提供。

#### (5) 考察（研究課題は達成できたのか）

①飯田下伊那の食材の良さを知らない若者をターゲットとする。

自分たちの宣伝不足や台風の影響もあり、若者を呼び込むことはできなかった。このことから、①は達成できなかった。しかし、最終的にターゲットの幅を広げ、より多くの人に飯田下伊那の食材の良さを伝えることはできたと思う。

②飯田下伊那の良いものを再発見する。

1年間の活動を通して、生産者の方にインタビューやアンケートを行い、自分たちから飯田下伊那の良いものにふれあうことにより発見できた。また、飯田下伊那の良さはおいしい食材だけではなく、その地域に住む人だということも改めて実感できた。このことから、②は達成できたといえる。

③飯田下伊那の食材を使った料理を提供し、良さを知ってもらう。

2回の居酒屋開店を通して、自分たちが発見した飯田下伊那の食材を使った料理を提供した。当日行ったアンケートでは「地元の新鮮な有機野菜を知れて嬉しかった」「素材の味が楽しめた」「全体のバランスがよく、地元野菜の彩りを感じた」などの意見をいただいた。このことから、③は達成できたといえる。

#### (6) 今後の課題

課題研究を通して私たちは飯田下伊那のたくさんの良いものを発見できた。それは、課題研究でこのテーマを掲げ活動していなければ、知らなかったことだと思う。このことから、日常生活の中でも飯田の良いものを感じることができるようになるべきであると感じた。この活動に携わってくださった方々は1人ひとりが熱い思いを持ち、自らの仕事を愛していた。たくさんの素敵な大人たちに出会えたが、それが地域の人に伝わらなければ意味がない。まず、地域の生産者や販売者、お店の経営者がそれぞれの思いを伝えられる環境が必要だと感じた。

#### (7) まとめ

私たちは課題研究に取り組むにあたり、多くの方々に協力していただきました。地元野菜の生産者の方々や塩澤さん、近藤さんと関わり、私たちは「かつこいい大人」の姿を見ることができました。自分のやりたいことと熱心に向き合うこと、私たちのやりたいことを全力でサポートすること、どれも当たり前のようにこなしていましたが、それは簡単にできることではありません。これから社会に出る私たちの目指すべき姿だと感じました。そして、活動を通して知ることができた飯田の良いものをこれからも大事に、誇りを持っていきたいと思いました。

## 商業科の「商品開発」における地元企業連携

- 1 活動内容 商業科「商品開発」における地元企業連携  
「地元青果の付加価値向上に関する研究 ～「食」と「農」～」
- 2 日 時 令和元年 9月30日(月)  
令和元年 10月 7日(月)  
令和元年 10月21日(月) など全20回
- 3 実施場所 本校(飯田OIDE長姫高校) 2F 簿記室  
株式会社テスク「生活菜園」 (飯田市鼎名古熊)
- 4 講 師 株式会社テスク「生活菜園」 代表取締役 塩澤 忠文 氏
- 5 担当教諭 國松 秋穂
- 6 参加生徒 商業科3年 12名



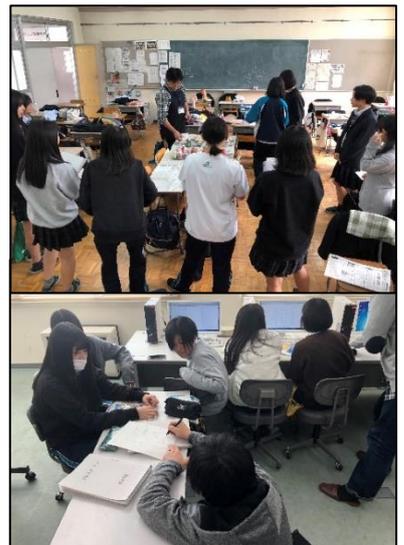
図1 講義のようす

### 7 活動目的

- (1) 地元青果物の流通について学ぶとともに、卸売業の特徴について理解する。
- (2) 「食」と「農」が密接につながっていることを理解する。
- (3) 個々の「食べる」に着目し、日常の食に配慮する消費者を目指す。
- (4) 地元の「食」と「農」について思いをめぐらす消費者を目指す。
- (5) 地元の青果品を加工した商品のパッケージを考案し、デザイン力の向上を目指す。

### 8 活動概要

- (1) 学習のテーマを「今、あるべき姿の商品とはなにか」と据え、地元の卸業者と連携し、生徒たちが比較的関心が高い食について様々な視点から学んだ。また、農(農業、農産品、農家など)について実際の野菜や果物を題材に学んだ。これらのことから、食に関する商品を開発する側に立場にとって必要であろう知識や技術のほかに、倫理観や価値観の涵養を図った。
- (2) 卸売業者が研究開発している乾燥野菜や乾燥果物を題材に、付加価値を向上するためのパッケージデザインの考案を実施した。  
その際、生鮮食品の廃棄問題も含まれるフードロスや災害時の食料確保などの社会的課題にも触れ、販売するための技法に留まらず、社会的意義のある商品の開発に向けた心構えを養った。



### 9 生徒アンケート

- Q1 「食」と「農」について、どのようなことを知る、または理解することが出来ましたか
- ・日本の食糧自給率が低いことをあらためて知ることができた
  - ・自分が普段どんなものを食べているかがわかった

- ・食料が手軽に買える環境で育ったから、食べることの大切さ、重要性をあまり考えた事が無かったから、この授業を通して「食」や「農」を意識することができた
  - ・塩澤さんを通して、生産者の方のことがわかったことは安心感につながった
  - ・農業を知ることで、農家さんに対する感謝の気持ちが湧いた
  - ・地元で育てられた野菜自体のおいしさを知ることが出来た
  - ・「食」に対しての気持ちが「農」を知ることで変化した
  - ・地域の野菜でも、種は外国産であるものが多いことを知った。考えさせられる。
- Q 2 付加価値向上について、どのようなことを知る、または理解することが出来ましたか
- ・色やバランス、画像の使い方が人に与える印象に大きな影響があることがわかった
  - ・パッケージで売り上げが変化するだけでなく、人も感情までも動かせることと知った
  - ・農業とデザインにつながりがあることがわかりました。
  - ・最初の印象が大事なので、パッケージ制作について真剣に取り組もうと思った。
  - ・パッケージデザインについて実際につくってみたから、苦労がわかった。
  - ・乾燥野菜の魅力をどう伝えればいいのかをしっかりと考えることが出来た。
  - ・安全さ、新鮮さをデザインすることをこころがけた
- Q 3 この授業を通して今後チャレンジしてみたいことはなんですか
- ・スーパーで安い外国産の肉を買うのではなく、国産のものに目を向けたい
  - ・農業や漁業に従事する人のことをもっと知りたい
  - ・食は自分の健康に深く関わることから、これからも関心を持っていきたい
  - ・青果品を選ぶ際は、生産地や育て方についてもこだわりたい
  - ・見た目や値段だけでなく、こだわりや特徴を理解した上で購入していきたい
  - ・難しいけど面白いので、他のパッケージ制作もやってみたい
  - ・デザインについてもっと深く学びたい
  - ・商品を開発する前に、きちんと事前の知識をつけておくこと、その地域の人やそれに関わる人たちと協力することがわかった。今後にかしたい。
- Q 4 意見、感想
- ・グループで考えたり、話し合うことが多くあった。自分だけでは考えつかないアイデアに刺激を受けた。
  - ・私はデザイン系の学校に進学するので、この授業が今後すごく役立つと思うし、すごく勉強になりました。
  - ・この授業をやったことで、地域の農産品や普段目にする広告やチラシに対してデザインの観点で興味が湧いた。

## 9 成 果

### (1)高度な専門性

- ①地元の卸売業の方から直接指導を受けることで、生産者から消費者へ商品がわたる流通を直に知る機会となった。また、卸売業が物流だけでなく、多くの情報が集まり提供する仕組みを有していることから、卸売業に対する理解が深まり、商業に関する専門性が向上した。
- ②アンケート結果からビジネスを展開する上でもっとも大切な「よりよい社会をつくるためのビジネスの実践」という価値観や倫理観を養えた。
- ③第1次産業が本地域の基幹産業の一つであることを理解するとともに、「食」と「農」に付加価値を生み出すことが商業の役割であることを理解できた。
- ④具体的な商品（乾燥野菜、ドライフルーツ）について顧客志向（マーケットイン）の発想のもと、商品パッケージを考案できたことで、マーケティングに関する能力の向上が図れた。

## 10 ま と め

生徒たちの関心が高い「食」と、それに強い結びつきがある「農」を商業の科目においていかに結びつけられるかを、講師である塩澤氏と随時協議した。また、視察で伺った和歌山大学観光学部において農に関わる研究者である藤田先生からも助言をいただくことができ、授業に反映することができた。生徒のアンケート結果からは、本授業が学びの多いものであったことがうかがえる。特に経済的な側面からだけでなく、倫理的な側面から商品を選択する消費者の立場、消費者のためによりよい商品を開発しようとする開発者の立場、の両者の立場に立って学べたことに対する満足度が高かった。しかしながら時間の都合上、パッケージデザインをしたものを販売、流通させるまでに至らなかった。次年度以降も「今あるべき姿の商品とは何か」を生徒とともに模索できる授業をつくっていきたい。

### 地域人基礎の実践及び研究開発実践及び研究開発

「地域人教育基礎」の実施に当たり、下記の実施原案を基に各科から意見を集約した結果である。教科総合技術の一旦を担う部分として、導入できるように着実に準備を進めたい。そのためにも、来年度には模擬授業実施や生徒用のテキストの制作を行えるように計画をしたい。なお、職員の見解の中からは商業科の地域人教育とタイトルが重なるので、変更したほうがという声があり、来年度からは「協創教育基礎」と名称変更することとした。

#### 1 実施原案

- ①取扱い時間数は各教科5時間程度（単位数に応じて増減可）を目処とする。
- ②実施時期は各科目の履修内容との対応を考慮しながら各教科が自由に設定する。全クラスに同一内容の授業を行うことを原則とするが、実施時期は一斉でなくても良いものとし、出張等による自習時間の活用も可とする。
- ③年間を通して使用するテキスト（全教科を1冊に集約）を作成する。今年度中に原案の作成を行う。テキストは基本的に担任が管理し、授業担当者が担任から受け取って配布と回収を行う。
- ④年度初めには学年集会等でガイダンスを行う。年度末にはLHR等でまとめを行い、次年度2学年への接続を意識した総括を行う。
- ⑤成績評価に関しては、各教科の成績評価に組み込むことを原則とする。各教科の判断でレポート提出を課したり、定期考査問題の中に組み込む等を行う。

#### 2 集約した結果

科目	今年度担当	学習予定内容	想定時間数	テキスト	授業実施時期	提出課題 成績評価等
国語総合	小林	井上ひさし『ナイン』（小説）を読み、東京四ッ谷の新道商店街が高度経済成長期から1980年代にかけてどのように変化したかを読み取	7時間	本文4ページ程度、リニア飯田駅周辺の開発コンセプト資料4ペー	夏休み明けから2学期中間考査前まで	提出課題：「リニア開通後の南信州」800字、またはワークプリント。 成績評価：中間考査得点及び提出課題

		る。街の変化と人々のきずなの在り方について学んだ上で、リニア新幹線開通後の飯田下伊那の街づくりについて議論し、各自の考えをまとめる。		ジ程度		
数 学 I	大日向	経産省地域経済分析システム「リーサス」の紹介と統計分野の基礎（数学Iデータの分析3学期履修予定）	5 時 間	未定	習熟度別授業をクラス単位に戻して実施。2学期以降、修学旅行中も活用。	提出課題を評価に組み入れる。
現 代 社 会	未定	未定				
科 学 と 人 間 生 活	山内	災害（地震、水害）ハザードマップや過去の災害を例に、どんな課題があるかを学習する。	2 時 間	A4カラー 両面で2ペ ージ程度。 ハザードマ ップなど別 刷り資料も 準備。	2～3学期を中心に実施	実施後の考査にて評価する。
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 英 語 I	西川	「地域人教育基礎」の年間の学習のまとめとして、地域の課題やその解決方法について英語でまとめ発表する。	5 時 間	英文の構成 やプレゼン の仕方につ いて数ペー ジ。	3学期 地域人教育基礎の他 科の学習が進み、地域 課題テーマが形にな ってきた後で行う。	英文レポート提出。 英文とプレゼンを 評価。
音 楽 I	中村真	飯田の文化事業について、事業内容や実行組織、行政との関わりについて学び、どのような課題があるのかまとめる。	5 時 間	未定	事業を行っている時 期に調査等を行い、学 年末に発表を行う。	プレゼンとレポー トで評価。
美 術 I	川上	地域の特徴、誇れるもの（文化、芸術、産業、自然、歴史等）をロゴマークとしてデザインする。扱うものを深く理解し、簡潔に表現する。	3 時 間	未定	課題と課題の切れ目 を利用し、製作の個人 差を利用。あるいは自 習時。	デザインを提出さ せ、扱った内容、作 品のコンセプトを 添付させる。
書 道 I	石原	飯田水引の歴史、意味について学習した上で、実用書の書式に従い、のし袋に書く。	2 時 間	A4両面印 刷2ペー ジ程 度	2月中	実用書と製作記録 等により評価
保 健	伊澤	飯田下伊那における交	2	A4カラー	3学期中に実施	保健の期末考査で

		通事故の現状と要因を学習し、安全な交通社会づくりに向けてどのような対策が必要かを考える。また、交通事故が起こった際、どのような対応（応急手当の技能を含む）が必要かを学習する。	～ 3 時 間	印刷（全科統一）で5ページ程度		評価する。
--	--	---	------------------	-----------------	--	-------

## 松川の河川整備事業

### 産・官・学が連携した河川整備の取り組み ～自分たちでつくろうプロジェクト・松川の河川整備～

飯田OIDE長姫高等学校 社会基盤工学科  
鈴木 文明

#### 1. はじめに

建設業界への若年労働者雇用促進事業について、建設現場見学会等の従来の取り組み・イメージアップに加え、県内の建設系学科高校生を対象とした「自分たちでつくろうプロジェクト（高校生DIYプロジェクト）」が展開された。

平成28年度は長野工業高校にて本プロジェクトが開始され、翌29年度からは飯田OIDE長姫高校でも展開された。本校では平成19年度より県との契約から学校近隣に流れる一級河川「松川」の一部区間の除草整備を担っており、3年次の「河川測量」で実習地として利用させていただいているということもあって、「アダプトプログラム」として官・学連携の事業に取り組んできており、今後も継続して実施していく予定である。さらにこの度、長野県飯田建設事務所より「建設系学科高校生における就労支援促進事業」の提案から、「自分たちでつくろうプロジェクト」として産・官・学連携の取り組みを手掛けることとなり、課題研究において取り組むこととした。



さらにこの度、長野県飯田建設事務所より「建設系学科高校生における就労支援促進事業」の提案から、「自分たちでつくろうプロジェクト」として産・官・学連携の取り組みを手掛けることとなり、課題研究において取り組むこととした。

#### 2. 研究・実践内容

##### (1) 平成29年度の取り組み

プロジェクト初年度ということもあり、関係する機関・企業それぞれの役割分担を明確にするための懇談・打合せを生徒抜き会議として行うことからスタートした。官：長野県飯田建設事務所（以下「飯建」）、産：建設業協会（以下「建協」）・測量設計業協会（以下「測協」）、学：飯田OIDE長姫高校 社会基盤工学科（以下「本校」）の、立場の異なる三者が、どのような形態・役割をもって連携していくのかということとは、本プロジェクトの根幹となるべき部分でもあるため、関係生徒に実体験させる前段階でおおよその流れと関わり方について十分に検討しておく必要があった。また、具体的な内容として、どのような形で河川整備を実施してい

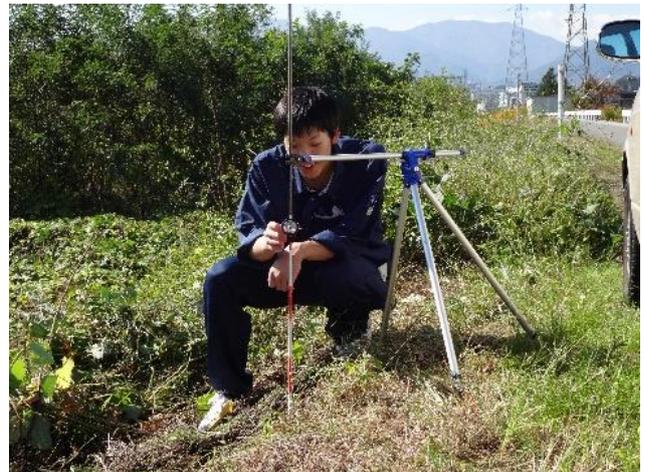
き、どのような施工（ものづくり）を行って何（土木構造物）を残していくのかという検討も行った。しかし、これらに関してはあくまでも目安や提案事項であって、本事業は企画・計画の段階から生徒に考えさせていくコンセプトであるがゆえに、関係機関や企業、そして教師がいかにも多くの引き出しを準備していて、その実行可能性をも想定していることが肝要である。そのため、計画段階から実行過程にわたって、その打合せ回数は数十回におよんだ。

- 長野県飯田建設事務所（飯建）  
現地調査、河川法・砂防法の講習、  
全体統括、実習場所の確保、予算確保
- 建設業協会（建協）  
資材発注、実働支援（技術指導を含む）
- 測量設計業協会（測協）  
基準点測量・工事測量の技術指導

#### （ア）基準点測量作業

学校近隣を流れる「松川」は、本校社会基盤工学科の3年生が長野県との契約により「アダプトプログラム」として除草整備を行っている河川である。また3年次の測量実習として「河川測量」を実施させていただいている場所でもあるので、松川の堤防天端に「対空標示」を設置することに決め、天竜川と松川の合流点より3km以上上流にさかのぼる基準点測量を実施した。本測量は後述する「対空標示」の位置を決定するために行う測量である。

単に場所や位置を特定するということであるならば、既存の地図上から判断して“合流点の上流何m”と決めてしまってもよさそうなものではあるが、より正確な位置出しと、これまでに修得した測量技術の集大成とすべく測量作業を展開した。



#### （イ）「対空標示」設置のペイント作業

天竜川と松川の合流点より上流2.5km、3.0kmの左右両岸計4か所において、堤防天端上に「対空標示」のペイントを実施した。堤防天端上にその位置表示を施した例は県内初の試みであると考えられる。ましてや高校生によってそれが成されたという例は全国的にも稀なことである。この試みは東北地方整備局仙山河川国道工事事務所による「河川管理と災害対応」を一例とした研究報告論文を参考にさせていただき、施工実施したものである。



河川の氾濫等の災害時、例えば堤防の決壊位置の特定や被災現場の特定・被災状況の把握に至っては、防災ヘリによる空撮等によって情報がもたらされる。その際、位置関係の特定のために基準と

なるものが堤防上の対空標示であるという。上述した研究報告論文では先の東日本大震災時で堤防が地盤沈下し、地割れが生じたような被災状況であっても対空標示が立派に機能し、位置特定の役目を果たしたようである。飯田市も南海トラフ巨大地震の危険区域に入っており、少なからず震災の影響があるものとされている。堤防上の左右両岸計4カ所において施工した「対空標示」であるが、地上においては大変に目立つ施工物となっており、関心を持っていただく中で地域の防災意識を高めるという効果も期待できるものである。



#### (ウ) 模型製作（プロジェクト内容の可視化）

松川の河川整備プロジェクトは向こう何年間かにわたって展開される事業であり、3年次の「課題研究」の1パートを担当する生徒によって行われていくため、続く生徒への事業内容の継続・継承が肝心である。そこで、このプロジェクトを引き継いでくれる後輩たちに河川整備に関して事業内容を盛り込んだ施工実施場所の模型を製作して本プロジェクトの全体像を表現した。

- ランニングロード（遊歩道）の施工
- 川を渡れる「飛び石」と階段の設置
- 親水広場の建設（せせらぎ水路・多目的広場・バーベキュー広場・水車）
- 対空標示の設置（上空から見える地上の姿）

#### (2) 平成30年度の取り組み

##### (ア) 「対空標示」設置のペイント作業

前年度に引き続き、「対空標示」のペイント作業を1カ所（天竜川と松川の合流点より上流0.5kmの左岸側）ではあるが実施した。1カ所だけの施工となったのは、松川の堤防天端が主要道路となっている部分が多くあり、かつ交通量も非常に多く、道路使用許可をはじめとする各種許可が下りなかった等の理由からである。新たに「対空標示」のペイント作業を施すにあたっては、堤防天端幅が十分でないと施工出来ず、交通量の影響や各種占用許可申請等の様々な条件がクリアされなければならない。よって施工実習場所として適当な箇所でなくては、対空標示を設置できないのであった。

##### (イ) インターロッキングブロック敷設作業

河川敷内で途切れている遊歩道はアスファルト舗装によるものであるが、その遊歩道を延伸するべく生徒発

案でデザインしたインターロッキングブロック舗装による遊歩道工事を実施した。工事延長は 20m で、インターロッキングブロック 3600 個程度の敷設であった。

(3) 今年度、これまでの取り組み

(ア) インターロッキングブロック舗装の延伸

昨年度に引き続き、インターロッキングブロックの敷設による遊歩道の延伸工事を実施している。前年度は舗装長 20m であったが、今年度は実習日(実習回数)を大幅に増やしたため、プロジェクト目標は 50m と設定された。ブロックの敷設作業は慣れてくると作業効率が大幅に上がるものであるが、敷設長の単純計算でいくとブロック約 9000 個の敷設となる予定であり、目標達成に向けては休日の作業実施も視野に入れつつも作業を進めている。

### 3. まとめ

土木・建設系学科では従来より地元地域や産業と連携しながら数々の見学会や様々な実習、そして課題研究を行ってきた経緯がある。さらには少し立場の異なる県や市町村といった機関との連携を図る取り組みも増えつつある状況であるともいえる。これまで地元地域や産業、地方自治体等々と繋がりを持ち、種々の実績を重ねてきたことによって絆が生まれ、連携した活動は定着・成熟してきているようにも感じる。連携して行われる実習や課題研究については、コーディネーターやコンダクターとなるべき立場が必要であり、大所高所から進行状況や進むべき方向性のチェックなどを行っていくことが重要であるといえる。当事者間で連携を強め、連絡等を密に行っていくことは当然のことであるが、同時に若干の窮屈さや遠慮といったものも生まれてくるものである。役割を異とする立場が関わり合う取り組みでもあるので、地方自治体である「官」の立場が事業主体となることが肝要であり、円滑に活動していくための潤滑油として機能するだけでなく、目的達成のため進むべき方向をチェックしながら取り組んでいく立場となっていくことが望まれる。

県や市町村の関わりについては、事業主体であるという性格から、助成金や補助金という形で予算として組み込まれることもあり、かかる費用負担が学校サイドに及ばないケースも多くある。地元地域において生きた実習・実学を展開できるフィールドを見だし、その了承・準備・打合せさえ出来れば、教師側も生徒も、企画・計画・実行というものづくりのプロセスも体得できる。また建設系学科に特化した部分ではあるが、形となっ

て後世に残るものづくりであるだけに、参加実践した生徒は達成感や大きな充足感をも得ることができる。

課題としてあげるならば、産・官・学いずれの立場であっても、時が来れば担当者が変わってしまうというところである。課題研究として取り組んでいる生徒は 3 年生であり、1 年足らずで入れ替わっていく。担



当することになった生徒にはこれまでの活動について十分に説明し、連携して行う活動の意義や目的・ねらいをある程度の時間をかけて理解させるところからとなるが、導いていく立場の担当者や教師は、これまでの保存資料等に目を通すところから着手することになる。ところが年度初めから待たなして動き出さなくてはならないものでもあるために、最初の顔合わせや打合せの場では戸惑いが生じる。出来るならば窓口となる担当者が複数名存在することが理想的であり、引き継ぎがスムーズになるような人的配慮が望ましいところである。



### 商業開発実践(テックレンジャー活性プロジェクト)と学科融合科目の実践

1 活動内容 総合技術「商品開発実践」における地元企業連携  
～経営コンサルティングに関する研究～

2 日 時 令和元年9月10日(火)  
令和元年9月12日(木)  
令和元年9月17日(火) など全28回

3 実施場所 本校(飯田OIDE長姫高校) 2F 簿記室  
裏山しいちゃん (飯田市元町)



図1：講義のようす

4 講師 株式会社週休いつか 代表取締役 新海 健太郎 氏

5 担当教諭 植原 崇裕、國松 秋穂

6 参加生徒 電子機械工学科・商業科3年 6名

7 目的

- (1) 模擬株式会社設立に向けて、会社の定款や理念、方針を制定する等のマネジメントにかかる調査、分析方法を学ぶ
- (2) 組織編成（プロモーション、商品企画、経理等）に必要な企業ブランディングについて学ぶ

## 8 授業概要

### (1) 模擬株式会社の設立

顧客の経営を支援するコンサルティング会社の設立を宣言。  
 受講している生徒を社員とみなし、合議の上代表取締役を選出。  
 その他、会議（授業）に関する役割分担を実施した。

### (2) クライアントの確認

本校コンピュータ制御部（テックレンジャー）を別会社とみなし、顧問及び部員をクライアントとした。

### (3) クライアントの課題の認識

クライアントに対するヒヤリングを実施。  
 顧問へのヒヤリング1回。部員へのヒヤリング5回実施。このことにより課題の認識を図った。

### (4) 解決方法の模索

ヒヤリングの結果、複数の課題が認識され、協議の結果、クライアント内における従業員の満足度を上げるための方策を検討することが決定した。

仮説として、「従業員同士の意見の交流ができれば満足度が向上し、満足度が向上すれば、クライアントのサービス（テックレンジャーショー）も質も向上が図られるのではないか。」とした。

意見交流のために、直接の交流会ではなく、目安箱を設置し、自由記述用紙を投票してもらう運用とすることに決定した。また、目安箱も自社で制作することが決定した。

### (5) 解決活動の実施

意見箱の制作を実施。また、目安箱の運用案を策定した。

意見箱の設置について、クライアントに打診。

クライアントに採用されなかったため、本案件を終了とした。

### (6) 検証、分析作業

なぜ採用されなかったのか。私たちのアプローチに原因があったのか。仮説の設定が間違っていたのか。私たちの会社に対する分析などを実施した。その結果、私たちが設置した模擬株式会社の設立段階において主体性に関する重大な欠陥があることが判明した。

欠陥① 探究的な学びに対する理解が不足したままプロジェクトが始まった。

欠陥② やることが決まっていた状態でプロジェクト学習が始まった。

欠陥③ 急にやることになり、講師及び教員による丁寧なガイダンスや生徒同士を含めた人間関係の構築をする時間が無いまま、作業に入ってしまった。

## 9 生徒アンケートより

- ・ 今回のプロジェクトは準備が足りなかったと思う。実際、先生に許可をもらう前に目安箱を作ってしまったので、順番が逆であった。リスクも考えて行動することが大切だと感じた。私は企業側の立場とクライアント（テックレンジャー）の両方の立場で考えたつもりだが、実際はどこか企業側の立場で考えることが多かったため、当事者意識を持って考えることがあまりできなかった。だから、自分だったら何をしたいのか、どこまで触れていいのかをしっかりと考えようと思った。
- ・ チーム内のコミュニケーションの重要性が理解できた。信頼関係があれば、誰が何をどのように考えてい



図2：協議のようす



図3：箱制作のようす

るのがわかり、それをもとに活動が出来るということもわかった。意見箱については、コンセプトをしっかりと考えることで、なぜやるのかをクリアにすることができた。課題を見つける際、当事者にヒヤリングをすることが大切だとわかったので、今後生かしていきたい。

- ・「何のために」を考えることや、それについて話し合うことが楽しかった。その上で、相手のニーズをしっかりとつかむことが大事で、確認を怠ってはいけないんだと学んだ。
- ・顧客に対する理解が足りなかった。これは得がたい経験なので次にぜひ生かしたい。また、模擬株式会社の活動で、チームのメンバーと仲良くなれた。自分の意見を言うのは苦手だったが、この授業で意見をすることに慣れることが出来た。急にプロジェクトをすることになったが、社会では急な変更に対応することがたくさんあると思うので、これからも急にやることが変更でもしっかりと対応していきたい。
- ・チーム内のコミュニケーションと情報交換がとっても大切だと思いました。チーム作りにもう少し時間をかけて欲しかったです。また、最初の時点で多くのことを考え、準備・計画しないといけないなあと思いました。
- ・社長として、社員をまとめようと努力しました。また、見つけた課題について解決しようと行動もできました。しかし、相手が本当に困っているか否かを見極めることが出来ませんでした。こうした見極めは、お客さんとよく話すことや、チーム内での報告・連絡・相談が欠かせないこともわかりました。

## UVプリンタの活用を題材にした学科融合実践及び研究開発

### 1 導入目的

付加価値の高い商品を企画製造しプロモーションすることで企業が利益を計上し消費者の便益も向上するという工業技術とビジネスの見方・考え方を働かせ、UVプリンタを使用した実践的・体験的な学習活動を行うことを通して、職業人として必要な技術的・実践的な資質・能力と、工業と商業の学び合いから生まれる協働的・創造的な実践ができる態度と技術を身につけるため UV プリンタを導入した。

### 2 設置場所

工業化棟 3階 FA 実習室

### 3 使用状況、内容

- ・3年選択科目の電子機械応用、電力技術、商品開発実践、商業科の課題研究
- ・職員が放課後や空き時間を利用して操作方法の確認、印刷
- ◆電子機械応用では、生徒がそれぞれオリジナル作品を製作し、ボールペン、アルミケース、スマートフォンケースなどに印刷を行った。生徒の感想として以下のようなことが挙げられた。
  - ・普段開発されている商品がどのように印刷されているのか仕組みを知ることができて良かった。商品開発において興味関心を持つことができた。
  - ・これまで自分の欲しいものが市場に出回っていなく、自分のイメージのデザインをそのまま再現できたので、作品への思い入れが強く価値が上がったと思った。また、画像の編集なども学び、ポスターなど様々なデザインの制作に応用できると感じた。工業科と商業科のある OIDE 長姫高校では、1つの製品を高いクオリティで製作し、企画から販売までの流れを、UVプリンタを使用することでより現実に近い学びができると感じた。
  - ・ペンなど丸いものへの印刷が難しかったが、画像データをどのように編集すれば良いのか学ぶことができて良かった。今回は既存の画像を使用して印刷を行ったが、画像編集ソフトを用いて独自で画像を作ればオリジナリティのある作品にできたと思う。また、レーザー加工機などを併用してオリジナルのも

のを作ることでもできると感じた。

- ・クラスオリジナルの物を作りたいときに、企業に依頼すると費用がかかってしまうので、UVプリンタを使用すれば低コストで製作することができると思った。また工業科だけでなく、商業科の授業で販売する製品にも使用できるので幅広い分野に適していると感じた。
  - ・UVプリンタで印刷するために、画像編集ソフトを使用したのでその点についても理解が深まって良かった。
  - ・どんな物にも印刷できるわけではないので、工夫しながら自分の作りたい物を作ることが大切だと思った。
- ◆電力技術ではアルミの板を使用し銘板の製作を行った。生徒の感想として以下のようなことが挙げられた。
- ・パソコンで名称などを入れるだけで印刷ができるのですごいと思った。デザインを工夫すればもっとバリエーションのある作品ができるので面白そうだと思う。
  - ・予想以上に簡単にできたので、課題研究などでも使用して良い作品を製作したいと思った。
  - ・金属に印刷ができるというのはすごいと思った。



図1 銘板への印刷



図2 デザイン作成の様子

- ◆商品開発実践では、試作としてボールペン、ノート、亚克力、キーホルダー、ハサミなどに印刷を行った。その製作過程において、これまでの製作は昇華プリントによるハンカチ、マグカップ、袋、Tシャツなどに限られていたのが、幅が広がり想像力を高めながらより現実に近い学びができると感じた。今年度は試作として作品を製作したが、来年度は全学科の授業や部活動、課題研究等でも活用し、探究的な学びに結びつけていきたい。

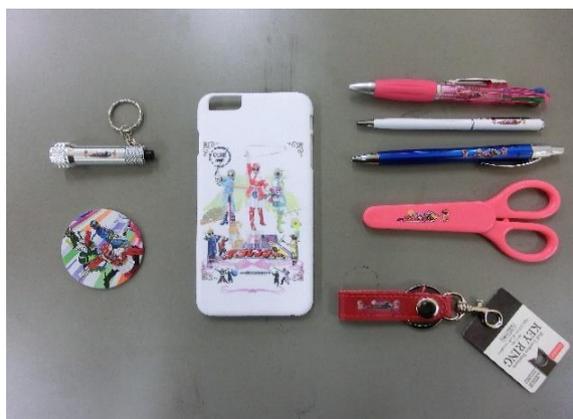


図3 試作製品

- ◆商業科の課題研究ではイベントに参加した小学生向けの参加賞として、オリジナルの下敷き、コップ、筆箱等を製作した。生徒の感想として以下のようなことが挙げられた。
- ・難しかったが工業で物を加工して商業でその商品を売る、そうやって経済が回っているんだと改めて感じる事ができた。UVプリンタで筆箱に絵が印刷されていくのがすごかった。
  - ・UVプリンタは凹凸のある物にはあまり使えないので、平らで子供たちが使う物を考えるのが大変だった。しかし苦勞して製作した景品を子供たちが嬉しそうに持って行ってくれると本当に嬉しかった。デザインがワンパターンではなく、色々なデザインがあると良いと思う。
  - ・UVプリンタを初めて見て、すごいなと思った。工業科の他の機械についてもっと知りたいし使ってみ

たいと思った。

- ・最新の技術はすごいなと思った。好きなイラストが描かれた商品が作れるのは自由度が高くて良いと思った。子供たちにも喜んでもらえたので良かった。

#### 4 成 果

- ・生徒の感想から、工業科、商業科がお互いの学習内容を理解し合う中で、工業科の生徒が商品開発や販売について興味関心を持ったり、商業科の生徒が製品の製作について興味関心を持ったりと、学科を越えた学びの中でより現実に近い学びができたと思われる。
- ・ボールペン、キーホルダー、ノート、アクリル板等への印刷は可能であることを確認した。(図 3)  
しかしボールペンなどの丸みを帯びた製品や段差のある製品に印刷する際は、高低差 3mm 以内であれば印刷可能であるが、画像を大きくしすぎると滲んでしまう恐れがある。よって印刷物は段差が極力少ない製品になるため、企画の際に考慮して考える必要がある。

#### 5 今後の課題

- ・UV プリンタを使用したいが使い方がわからないという声も多数挙げられている。今後、多くの授業や課題研究などで全校の生徒や職員が使用できるようにするため、使用方法の講習会なども行う必要がある。

### 海外交流事業を活用した学科融合実践及び研究開発

シャルル・ヴィル・メジェール市 公式訪問 下見報告書

コンピュータ制御部顧問 西村 武久

#### 1 事業計画

##### 海外交流事業を活用した学科融合実践及び研究開発

- ・ものづくりを海外・異文化でも受け入れられる多様性のある工業製品の提供の視点から捉え、ビジネスを地域産業と製品の強みや魅力をプロモーションする視点から、工業と商業の学びの融合が力となり新しい価値を生み出し、そこに地域を豊かにするビジネスが成立するという「協創力」を培う。
- ・このねらいを実現するため、次の①から③までの事項を身に付けることができるよう指導する。
  - ①海外（交流先）の歴史と文化を学び、その海外・異文化で受け入れられる商品企画、製品製作とプロモーションの実践を通して工業と商業の諸活動を体系的・系統的に理解するとともに、互いに関連付けられた知識と技術を学び合いによって身に付けること。
  - ②科目「課題研究」「テックレンジャー活性化プロジェクト」等により海外に向けた製品製作とプロモーション等を通して異文化で受け入れられる工業技術・ビジネスに関する諸課題を発見する。また、解決策を探究し、様々な情報や科学的根拠に基づいて創造的に課題を解決する力を養う。
  - ③ものづくりに関する広い視野の育成と技術の向上、またビジネスを適切にかつ円滑に展開する力の向上を目指して自ら学び、異文化とのコミュニケーションを図ることでグローバルな視野から主体的にかつ協働的に専門性を向上させ、そこから新たな価値を創造する態度を養う。

- ・「協創力」育成を目指すために、飯田市と本校にて国際交流を協働的に行う海外交流事業を行う。具体的には、「地域人教育」「テックレンジャー活性化プロジェクト」等の学習成果をシャルル・ヴィル・メジエール市（フランス）で披露するとともに、交流を深める。さらに「テックレンジャー活性化プロジェクト」において、新しく海外向け商品を企画・製作・販売することで、世界に向けた商品開発実践力をつける。
- ・渡航前の学習では現地法人・関係部署・学校などと情報交換をして、フランス言語や文化・現地ビジネスを直接学ぶことで、異文化知識を高め、工業技術とビジネス面での国際的な対応力をつける。帰国後は、体験した多文化共生や異文化を他生徒に広め、新しい地域ビジネスの提案を飯田市や各種産業界になげかける。
- ・本年度は教員による視察を行い、令和2年度からは生徒が実際に訪問して活動することを目指す。

## 2 目標

シャルル・ヴィル・メジエール市へ本校生徒を連れていき、世界人形劇フェスタにて「テックレンジャーショー」を披露する。また、商品等も開發生産して試験販売をする。この目標を遂行する過程の中で、海外交流から得られる世界観・文化・技術を学校内で広め、学校全体で共有しグローバルな生徒を育成すると共に学校の発展に役立てる。

## 3 フランス公演計画

- ・令和元年9月
  - ・現地での下見・対面・きっかけ作り
  - ・渡航費用調達計画・PR活動開始
  - ・青少年交流を探る
- ・令和2年4月
  - ・飯田市・メジエール市の協力体制の構築・予算付
  - ・メールで青少年交流の実施
  - ・資金集めのPR活動
  - ・海外商品の開発と製造
- ・令和3年4月
  - ・調達資金状況により決行か中止の決定
- 9月
  - ・「人形劇世界フェスタ」でショー・販売の実施
  - ・現地での青少年交流の実施

## 4 下見の目的

プロジェクトを実施するには、現地へ行き下見が不可欠である。今年メジエール市と交流を密にしている飯田市・龍江地区・人形劇委員会を中心とした訪問団が公式訪問する計画があったので同行させて頂き、下記事項について探ってきた。

- (1) メジエール市までの飛行機・陸路の行程を検討。
- (2) メジエール市長・担当者との顔合わせ。
- (3) ノートルダム小学校訪問から交流の可能性を探る。
- (4) フォンティエヌ中学校の生徒との交流の可能性を探る。
- (5) 人形劇フェスタ実行委員長との会談、
  - 1) 世界人形劇フェスタでのショー出演を探る。
  - 2) 世界人形劇フェスタの発表状況を探る。
- (6) シャルル・ヴィル・メジエール市庁舎内で「テックレンジャー」のPR。
- (7) フランスでの安全面を探る。
- (8) パリ市内でショー公演の場所を探る。
- (9) 現地通訳者・協力者を探る。

(10) 訪問ツアーを通して飯田市で協力して頂ける住民（関係者）を探る。

## 5 開催した下見会議（3月～9月まで）

- 1回目 3/14（飯田市役所）
- 2回目 4/18（飯田市役所）
- 3回目 7/21（本校）
- 4回目 7/19（飯田市役所）
- 5回目 7/30（飯田文化会館）
- 6回目 8/29（飯田文化会館）
- 7回目 9/3（飯田市役所）
- 8回目 9/13（本校）
- 9回目 9/16（解散会 レストラン あかり）

## 6 飯田市とメジェール市

### (1) シャルル・ヴィル・メジェール市について

メジェール市はパリの北東約 250 km に位置する。車で 2 時間、列車だとランスまで TGV で行き、そこから快速列車に乗り換えて、パリから 1 時間半ほどで到着する。ベルギー国境までは 14 km と国境に近い町である。

人口は約 5 万人。面積は約 32k m<sup>2</sup> で標高は約 150m である。アルデンヌ県の県庁所在地でもある。1966 年にシャルル・ヴィルとメジェール両町が周辺の 3 町を含んで合併し、メジェール市が誕生した。森林におおわれているため、林業が盛んである。山麓地帯からは鉄鉱石、石炭を産出し、これをムーズ川で運河と結んで流域一帯に鉄鉱業や繊維工業が発展した。ジビエ料理や川魚の料理、燻製にした生ハムなどが名産品である。

世界の人形劇界の中心的な機関である国際人形劇研究所、国立高等人形劇芸術学院やウニマ、AVIAMA の事務局もあり、世界の人形劇の中心的拠点にもなっている。



### (2) 飯田市との友好都市提携に至るまで

1988 年に人形劇カーニバル 10 周年に合わせて「世界人形劇フェスティバル 88 飯田」が開催された。この時、日本ウニマの尽力もあって、メジェール市との友好都市提携を結んだ。その後、メジェール市で開催される世界人形劇フェスティバルに今田人形座や天龍太鼓、山本南平の獅子舞などが出演している。また、市民ツアーによる訪問交流や人形劇団の交流が盛んに行われている。

昨年、フランスアルデンヌ県シャルル・ヴィル・メジェール市と飯田市が盟約書に基づき、友好都市提携を結んでから 30 年の月日が経過し、メジェール市市長のボリス・ラビニョン市長が来日した。

松沢太郎市長、田中秀典市長、牧野光朗市長と 3 代の市長にわたって、市民の皆さんとともに人形劇のまちづくりを原点とする両市の関係が続いてきたことについて、その歴史の長さやこの間、多くの住民が両市の交流に関わり現在に至っている。

30 年前、飯田市に在住する外国人住民といえば、中国籍の方がほとんどであった。記録を紐解くと、この頃の飯田市は、国際交流・多文化共生というより、在住する中国籍住民の方への対応という観点から、外国人住民に対する各種施策を実施していた。一方で、民間の皆さんからは、来たるグローバル時代を見据え、小さな世界都市を目指そうという動きが生まれ、その一環で、同じ人形劇のまちづくりで地

域を活性化しているメジュール市との友好都市締結がなされ、飯田市と市民が一体的になってこれまで様々な交流を続けてきた。

現在飯田市人口の2%強(2,000人を超える外国人住民)外国人住民が占める町となっている。飯田市は「小さな世界都市」というキャッチフレーズを掲げて、地域の国際化を推進している。

## 7 訪問者名簿

- ・ 飯田市長 牧野 光朗
- ・ 飯田市教育委員長 代田 明久
- ・ 飯田市公民館 館長 棚田 昭彦
- ・ 龍江地区訪問団

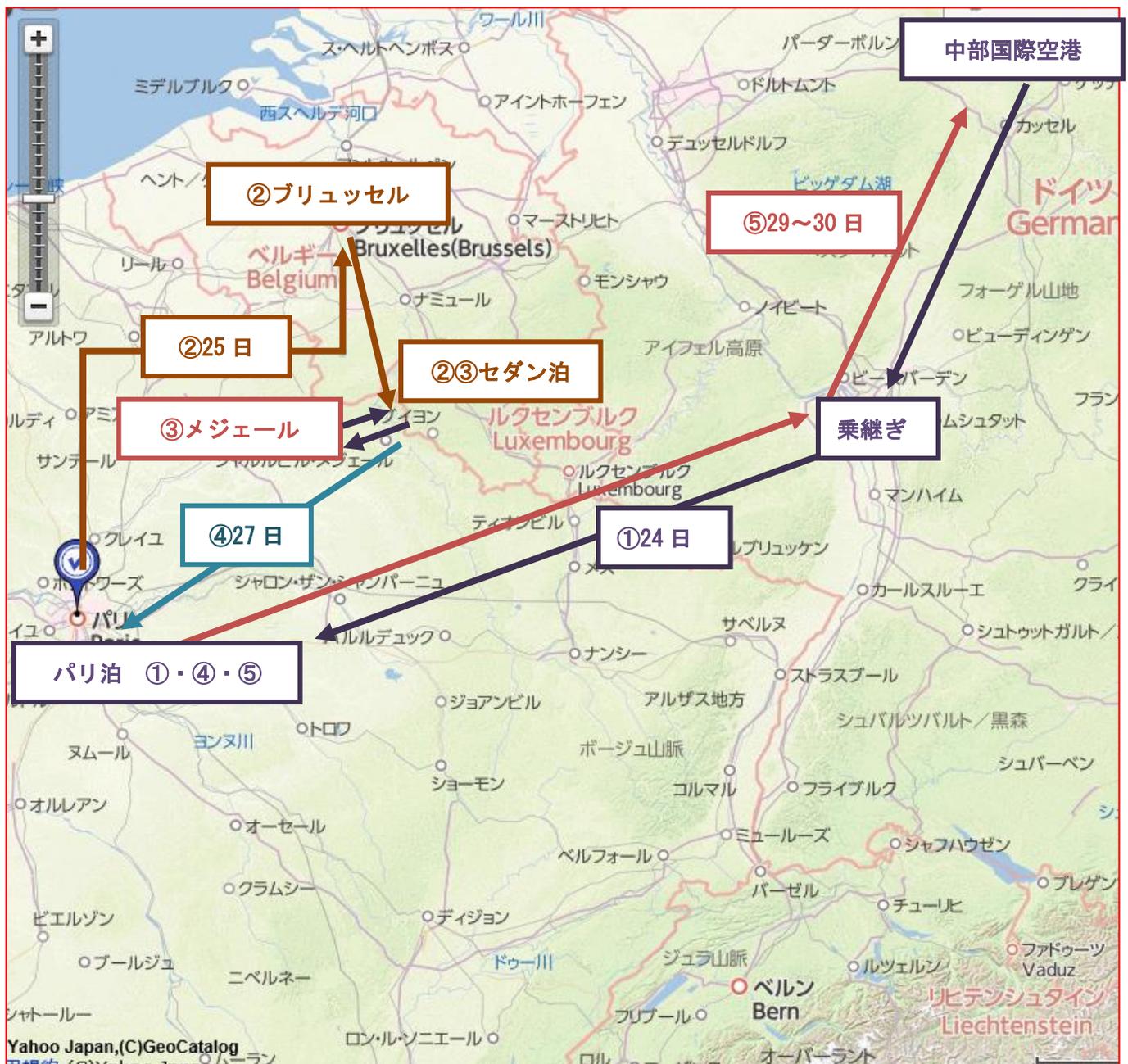
No	氏名	地区	特記事項
1	一ノ瀬 孝司 【団長】	龍江	シャルルヴィル・メジュール市訪問ツアー実行委員長
2	鳴海 和彦 【副団長】	龍江	今田人形保存会 副会長
3	知久 一彦 【副団長】	下久堅	飯田フランス協会 副会長
4	清水 清	龍江	天龍峡桜街道さくら愛護会 管理部長
5	清水 勇	龍江	飯田市議
6	市瀬 隆司	龍江	天龍峡桜街道さくら愛護会 前会長
7	坂巻 邦英	龍江	一般参加
8	塩澤 成人	龍江	龍江公民館 新聞部
9	川口 かず子	龍江	一般参加
10	小木曾 文彦	松尾	一般参加
11	西村 武久	鼎	飯田OIDE長姫高校教諭・テックレンジャー顧問
12	宮島 俊太郎	鼎	一般参加
13	中山 多美子	下久堅	一般参加
14	坂井 喜夫	山本	一般参加
15	小川 博	飯田市	男女共同参画課

- ・ フランスでの対応者

ヴァンソン藤井 氏	公式行事の通訳・飯田市長同行しての通訳
グレゴリー 氏	CVM外交政策担当者・本訪問のCVMと飯田市の調整役
モルマン 氏	龍江地区訪問団の訪問と飯田市CVM訪問の調整役
レリトー和子 氏	龍江地区訪問団の通訳、パリ市観光案内役 飯田市下久堅ご出身
原田 雅弘 氏	いいだ人形劇フェスタ実行委員長
河辺 一恵 氏	訪問団ツアーの添乗員（日本旅行所属）
林 氏	龍江訪問団の26日のみの通訳（日本旅行手配）

## 8 下見行程

- 日程 : 9月24日～30日 (7日間)  
 目的 : シャルル・ヴィル・メジール市交流事業  
 行程 : 23日 コンフォートホテル中部国際空港 (前泊)  
 24日 ①フランクフルト経由でシャルル・ド・ゴール空港  
 25日 ②TGVにてブリュッセル バスでセダン市 (泊)  
 26日 ③メジール市訪問  
 27日 ④セダン市からバスでパリ市 (泊)  
 28日 ⑤パリ市  
 29日 ⑥シャルル・ド・ゴール空港からフランクフルト軽油  
 30日 中部国際空港 バスで本校





## 10 メジュール市庁舎訪問

### (1) フクー・アルメル助役からの歓迎のあいさつ要旨

- ・シャルル・ヴィル・メジュール市への訪問に感謝する。
- ・ラヴィニヨン市長は急用でパリに行ってしまったため、代わりに私があいさつさせていただく。
- ・現在メジュール市では、人形劇フェスタの期間中であるため、日本をはじめ数多くの国から、人形劇ファンが訪れて、市内は大変な賑わいとなっている。
- ・飯田市との盟約書に基づく 1988 年以來の人形劇による友好都市関係が 30 年続いている。飯田市の人形劇フェスタでは 150 あまりの会場で 500 の人形劇が上演されている。おそらく日本で一番の人形劇の祭典だと思う。
- ・飯田市では戦後大きな大火に見舞われたと聞く。一方メジュール市では、第二次世界大戦中に大きな爆撃を受けた。街が戦中戦後、大きな被害を受けた点でも両市には歴史的な共通点があると思う。
- ・1979 年に国連の世界子どもの人権を守る会議にも、飯田から人形劇が参加したと聞く。子どもの人権にも関心の高い地域であることがうかがわれる。
- ・2011 年に「飯田通り」が命名された。これを機にさらに多くの飯田市の関係者がこの命名をきっかけにメジュール市を訪問してくれている。特に、2017 年には飯田市ご出身の方が、メジュール市でフランス料理のレストランを開店された。日本人がフレンチレストランを開いたということが、メジュール市で大変大きな反響を呼んでいる。
- ・日本で若い女性がメジュール市のロゴの入った T シャツを着て歩いていた、という情報をジャーナリストから聞いた。フランスの小さなあまり有名でない町の T シャツを着た方が日本にいることを聞いてとてもうれしい。
- ・昨年、ラヴィニヨン市長が初めて飯田を訪問した。それ以来、ラヴィニヨン市長は飯田市に大変大きな関心を持つようになった。飯田市は、過去の歴史を大切にしながら、新しい文化を創り出していこうという姿勢があり、市長はそこに惹かれている。
- ・メジュール市も過去の歴史や美しい自然環境を大切にしつつ、新しい文化を創造していこうとしている。そういう点でもメジュール市と飯田市には共通点があるとラヴィニヨン市長は感じている。
- ・飯田市にはツアーオブジャパンという大きな自転車レースが開催されている。メジュール市でも、大きな自転車レースのイベントを開催している。また、ジビエ料理もメジュール市では名物になっている。そういう点でも飯田市とは共通点を見いだせる。
- ・世界では今、深刻な出来事がいろいろと起こっていて、世界中の人々が不安に感じていると思う。そのような中で CVM や飯田市が取り組んでいる人形劇は、国籍を問わず人々に多くの感動を与える文化である。メジュール市ではちょうど人形劇フェスタが行われている。そのような時期に、飯田市長や教育長、市民の皆さんがメジュール市を訪問されたことを改めて歓迎させていただく。



市庁舎での歓迎セレモニー



グレゴリー氏と対面



懇談会

### (2) シャール・ヴィル・メジュール市訪問ツアー団 一ノ瀬団長のあいさつ

- ・今回のツアー団の訪問を快くご歓迎いただき感謝申し上げます。9月24日にパリに入り、昨日近郊のセダン市に宿泊して、本日ご訪問させていただきました。
- ・昨年のラヴィニヨン市長ご夫妻が飯田にお見えになり、メジェール通りの命名式や今田人形の館での龍江地区住民との交流において、心に残る交流ができたことを大変うれしく思っている。そのお礼と感謝を申し上げるべく、こうして訪問団を結成し、本日の表敬訪問に至った。
- ・今日は、多くのメジェール市の市民の皆さんとの交流をさせていただく。この交流を足掛かりに、両市の交流と絆がさらに深まることを期待したい。
- ・本日の交流では何かとお手間をかけるが、よろしく願いたい。結びにアルメル助役及びメジェール市のますますのご発展を祈念して、挨拶とさせていただきます。



### (3)懇談

- ・お茶菓子をいただきながら、訪問団メンバーとメジェール市関係者が懇談。

## 11 ノートルダム小学校訪問

### (1)概要

- ・ノートルダム小学校は、メジェール市庁舎から歩いて5分のところにある。学校の名称は、目の前にあるメジェール市のノートルダム寺院に由来するものと思われる。
- ・フランスは、小学過程は5年、中学過程は4年となっている。ノートルダム小学校では、幼稚園から中学校までの一貫教育を行っている。
- ・「エコカレッジ」という看板が校庭に掲げられていて、当市の「学校いいむす」に相当する環境に配慮した学校づくりに取り組んでいる。



### (2)校長先生による小学校案内

- ・各学年の授業中や幼稚園の光景を校長先生の案内で巡回し、見学
- ・学年にもよるが、最後に訪問した4学年は30名ほどのクラスであった。

### (3)最後の教室で訪問団と児童（4年生）の交流

- ・通訳のレリト一和子氏が、ホワイトボードに飯田の位置を图示。
- ・一ノ瀬団長より龍江小学校の児童が折った折り紙を児童にプレゼント。折り紙と聞いて、生徒は興味を示す。中には「ありがとう」と流暢にお礼を返す児童もいた。
- ・龍江小学校1年生児童と校長先生のメッセージ、龍江のメジェール通り命名式、龍江小児童が参加した飯田りんごん（賞を受賞）のDVD、今田人形の風呂敷も記念のお土産として渡す。
- ・児童からの質問
  - ア) 日本の小学生は書くときに何を使うか？  
⇒鉛筆を使う。ボールペンや万年筆は使わない。



イ) 韓国語と日本語は違うのか？（昨今の日韓関係を目にしたの質問か？）

⇒全く違う。それぞれの国の言葉である。日本語には平仮名、片仮名がある。

ウ) 日本の学校には制服があるのか。

⇒中学生になると制服を着て学校に通う。

- ・児童が地元出身の詩人・貿易商人アルチュール・ランボーの詩を朗読（ボヘミアン：吟遊詩人）
- ・児童から手紙、学校の写真、メジュール市の町のガイド、が贈られる。
- ・代田教育長より、書道の色紙が贈られる。
- ・代田教育長が、一番好きな教科を児童に尋ねる。
  - ⇒多くが、数学や国語だと答える。そのほか英語、スポーツ、と答える児童もいた。
  - ⇒人形劇の授業はこの小学校では行われていない。
- ・児童が最後にフランスの童謡を合唱してお別れ。



学校の廊下

## 1 2 飯田通り訪問とフォンティエヌ中学校生徒との交流

### (1) 飯田通り

- ・メジュール市の西北部にある。2011年に命名された。閑静な住宅街の中にある。この通りに面して、フォンティエヌ中学校がある。今回は中学校訪問ではなく、中学校の演劇部員が参加して、パフォーマンスを行ってくれた。

### (2) 牧野市長あいさつ

- ・龍江地区の皆さんにメジュール市にお越しいただき、感謝に堪えない。飯田通りで龍江の皆さん、メジュール市の皆さんとお行き会いでき、本当にうれしく思う。
- ・昨年、ラヴィニヨン市長ご夫妻が、友好都市提携 30 周年で飯田にお見えになった際に、龍江の天竜峡桜街道をメジュール通りと命名させていただいた縁で、今日、こうした出会いができたことに、改めて感謝申し上げます。
- ・龍江地区には、伝統的な人形座「今田人形」がある。人形劇の文化を大切にするメジュール市に敬意を表して、龍江地区に2キロメートルにわたって 200 本もの桜の木が植えられている桜街道を、ぜひ、メジュール通りと名付けたい、という思いを受けて、昨年、ラヴィニヨン市長ご来訪の際、メジュール通りと命名させていただいた。その龍江地区の方が、こうしてはるばるメジュール市の飯田通りの地にお立ちになっていることがとても感慨深い。
- ・今日この場にお越しのメジュール市の皆さんが、日本にいらした際には、ぜひ、龍江のメジュール通りを訪問していただければ幸いである。



飯田通り



牧野市長あいさつ

### (3) マインテ市議

- ・改めて、飯田通りへの訪問に感謝を申し上げる。友好都市  
どうしが、それぞれの地名を持つ通りを持つようになり、  
このことが今後の両市の交流をますます深いものにして  
いくことを期待したい。
- ・自身はもともと音楽の指導者である。この飯田通りの出会  
いをきっかけに、人形劇にとどまらない、音楽をはじめと  
した様々な文化交流が飯田市と生れれば、と期待したい。  
メジェール市のご滞在を楽しんでいただきたい。

### (4) 演劇部の皆さんのパフォーマンス

- ・フランス国内の中学校で、演劇部がある中学校はあまりな  
い。フォンティヌ中学校の特徴である。演劇鑑賞のほか、  
1週間に2時間は実際に演技の稽古もしている。
- ・今日パフォーマンスを行うのは、演劇部に所属する中学4  
年生である。今日は稽古でいつも行っている基本的な動作  
を皆さんに披露したい。
- ・最後に皆さんにも参加していただいて、演劇部の稽古を体  
感してもらいたい。



## 13 メジェール市人形劇フェスタ 見学

### (1) フェスタ関係者との面会

- ・グレゴリー氏との事前メール打ち合わせで、次期委員長とお会いする機会を頂けるとの約束をして頂  
いてあったので、別室で対面すると思っていたが、広場を見学中、突然広場で紹介され、話をする事  
になったのでかなり慌ててしまった。
- ・「テックレンジャー」を、再来年の人形劇フェスタで披露する構想があることを説明。合わせて、高校  
生どうしの交流ができれば、と考えている旨を次年度実行委員長（女性）に伝える。
- ・デュカール広場では、プロの人形劇師や大道芸師が演じるようになっており、アマチュアがこの広場  
で上演することは厳しいと返答された。代わりに披露できる機会について、今後、グレゴリー氏を通  
じて調整していくことになった。



### (2) メジェール市の観光、紙芝居博覧会見学

- ・館内ショーと広場（路上）でのショーをやっており、館内施設上演は有料。野外上演は無料。
- ・当日あいにくの大雨となってしまう、路上でのショーはほとんどやっていた。どうやら、雨天時はショーを実施するかしないかは出演者にゆだねられているようだ。午後3時ごろになり雨が上がると、数名の出演者が広場でショーを始める。すると観客は輪になって集まって観覧するようになる。
- ・隣接する旧市庁舎1階が出演者の控室となっており、大道具・小道具等ごった返し状態となっており、中には日本人（女性）の出演者もいた。
- ・学校ごとの小学生が乗った大型バスが何台も到着し、大勢の子供たちが見学しに来ていた。遠足を兼ねているらしい。雨でほとんどショーをやっていないので、広場を通過するだけなので少し可哀そうだった。
- ・演技の内容は様々。仮装して歩いているだけの団体、伝統的な操り人形を使用して押し車の上で演技をする個人、道化師となり、手品を披露する個人など、多種多様である。
- ・演技エリア図はあらかじめ決定されており、市庁舎に張り出されていたが、見る限りまだ空いたスペースがありそうに思えた。
- ・音響は自前の小型ポータブルアンプを使用している人もいる中、自分の声で演技している人もいた。



デュカール広場 道化師



デュカール広場 演劇の様子1



デュカール広場 演劇の様子2



デュカール広場 観客の様子

## 14 日本の間開所式

### (1) ラヴィニヨン市長より歓迎のあいさつ

- ・遠路、飯田から日本の間の開所式にお越しいただき、感謝申し上げます。今日は日本の間を示すプレートの除幕を牧野市長と行わせていただく。昨年、飯田を訪れた際は、牧野市長をはじめ、飯田市民の皆さんに手厚くご歓迎いただき、心に残る訪問となった。その素晴らしい思い出が、よみがえってきている。我々と同じ、人形劇に情熱をもってまちづくりに取り組む同市に、再びこの地であえて本当にうれしい。
- ・飯田市には、人形劇以外にも素晴らしい地域資源がある。そのうちの 하나가りんごである。飯田では大変おいしいシードル酒を作っている。メジェール市にもおいしいシードル



シャルル・ヴィル市庁

酒があり、今日はその醸造農家も来ていただいているので、あとでその味を堪能していただきたい。

- ・私が昨年飯田市で感じたことは、市民の皆さん、市の職員の方が、新しいまちをつくっていこう、という情熱を熱く持っていることをひしひしと感じさせていただいた。また、飯田市民の方の心温まる歓待も受けた。飯田市民の皆さんの心の温かさは今でも忘れられない。
- ・そのお礼として、ささやかではあるが、シャルルヴィル市庁舎の会議室の一角を日本の間とさせていただいた。地元に住むデザイナーがイメージする日本の間を、障子に代表されるように、木を使って表現してくれた。また、飯田市から贈られた水引工芸や写真を展示させていただいた。この日本の間に訪れた方が、水引工芸や写真を見て、いつか飯田に行ってみたい、と思ってくれることを願っている。さらに、日本とフランスはかなり離れているが、私やメジュール市の職員がこの間で会議をするたびに、飯田の皆さんのことに思いをはせることになるだろう。
- ・私が飯田のメジュール通りを訪れた際、歓迎して下さった龍江地区の皆さんがこんなにも多くお越しになってくれたことも大変喜ばしい。



## (2) 牧野市長あいさつ

- ・およそ1年ぶりに日本の間でラヴィニヨン市長と再会できたことを大変うれしく思う。昨年の8月に、メジュール市と飯田市は友好都市提携30周年を迎えた。昨年の30周年記念事業には、ラヴィニヨンご夫妻とグレゴリー氏が駆けつけてくださった。
- ・メジュール市には飯田通りがあり、その命名のお礼にどうすればいいか、と考えていた際に、龍江地区の皆さんが、美しい桜並木をメジュール通りとして命名しよう、と提案してくれた。龍江地区には300年の伝統を誇る「今田人形」がある。伝統的な人形座のある龍江地区からそのような声をいただき、本当にありがたかった。



## (3) 訪問団一ノ瀬団長より親書の贈呈

- ・昨年、ラヴィニヨン市長には、遠路はるばるメジュール通り命名式にお越しいただき感謝する。そのお礼に15名の訪問団を結成して訪問させていただいた。今回は、龍江地区の地域づくり委員会の木下会長、飯田フランス協会の原会長から親書を預かってきたのでお渡ししたい。また、ノートルダム寺院の火災の見舞金も合わせてお渡しさせていただく。



## 15 下見からの総括

### (1) メジュール市までの飛行機・陸路の行程を検討

- ・今回、中部国際空港→フランクフルト空港（ドイツ）→シャルル・ド・ゴール空港（フランス）の経路（合計16時間）でフランス入りした。さらにパリからメジュール市まで車で3時間。時間的にも無駄であった。乗り換えのフランクフルト空港は超巨大・セキュリティーチェックは厳し過ぎて、

飛行機の乗り換えはとても難航。よって次回、メジール市までの行程は下記の行程がベストであることが分かった。

- 1) 中部国際空港→ブリュッセル空港（ベルギー）→貸し切り車でメジール市（約1時間）
- 2) 中部国際空港→フィンデル空港（ルクセンブルク）→貸し切り車でメジール市（約1時間）

## (2)メジール市長・担当者との顔合わせ

- ・ラヴィニオン市長は40歳前後の明るくとても若い市長であった。簡単だがテックレンジャーの説明をしたのだが、果たしてわかってもらえたのか疑問？ 来年で任期が終わってしまうそうだ。2年後は？（飯田市長も来年で任期が終わる。）
  - ・グレゴリー氏（外交担当者）とは、メールでやり取りをしたが、彼は今年度栄転するらしい。次の担当者（女性）を紹介されたので、テックレンジャービデオを見せてPRしたのだが、理解していただけたのか微妙。
- まだ、自分は何をするのか聞かされていない様子。忘れないうちに連絡を取る必要がある。

## (3)ノートルダム小学校訪問から交流の可能性を探る。

- ・日本語ができる先生がいない為、先生や子供たちとの交流は通訳とメジール市の方が間に入らなければ困難。また、小学校内には大きなホールや体育館はない様子でショーは難しい。
- ・子供たちの反応は凄まじい。興味心は日本の同じ年代の子供以上。もし、ここでテックレンジャーショーを実施すれば、爆発的に盛り上がること間違いない。

## (4)フォンティーヌ中学校の生徒との交流の可能性を探る。

- ・直接中学校を見られなかったため、学校内は全くわからない。
- ・「飯田通り」で演劇の様子を拝見したが、やはり日本と文化が全く違う。演劇部に力を入れている学校なので、もしかすれば私たちと接点を見つけ出せるかもしれない。
- ・中学生にもテックレンジャーショーを披露すれば、きっと目から鱗が落ちるであろう。

## (5)人形劇フェスタ実行委員長との面会。

- 1) 世界人形劇フェスタでのショー出演を探る。
  - 2) 世界人形劇フェスタの状況を探る。
- ・グレゴリー氏から次期委員長へは、あらかじめ「2年後に日本も高校生を連れてショーをしたい。」という我々の目的を伝えて頂いていない様子で、最初は対面の目的は何であるのか理解していなかった様子である。
  - ・世界人形劇フェスタへ出演依頼をしたが、アマチュアはダメだと単刀直入に言われてしまった。交渉にはやはりメジール市の働きかけがなければやはり難しいと感じられた。
  - ・代わりに発表する場所の提供をされると言われたが、あまり信用できない。
  - ・数年前、飯田市の太鼓団体が人形劇フェスタで演技した事があるそうなので、飯田市の働きかけで発表できる機会を得られるかが決まると思われる。

## (6)シャルル・ヴィル・メジール市庁舎内「テックレンジャー」のPR

- ・デカール広場の旧市庁舎内に「日本の間」という小部屋があり、ここで、メジール市長と関係者とのプレゼント交換や交流を行った。しかし、すでに多人数が集まっており、だれが役人なのか、住民の人なのか全く分からずショーの交渉はほとんどできなかった。とりあえず大判ポスターを全員の前で披露して、2年後に生徒を連れてくるので青少年交流をお願いしたいと伝えたが、理解していただけたかどうかはとても不安であった。
- ・フランスでは「戦隊ヒーロー」というジャンルが無いらしく、全く理解できないと感じた。後で気づいたのだが、どうやらテックレンジャーを「漫画を描いている部活動」と勘違いされているのではないかと

と思う。

後日、市長あてにテックレンジャーショーの DVD を郵送して、再度ショー実現について手紙を同封した。

#### (7) ランスでの安全面を探る

- ・メジュール市・セダン市はとてものどかで治安が良い街であると思われた。しかし、パリ市内は最悪である。観光名所はスリが昼夜問わず横行しており、我々旅行団も知らない間にバックのチャックが開けられていた。また、案内バスの運転手も、少しの間バスから離れたすきに貴重品を盗まれた。パリ市内はどこも東京都内のように人が混み合っており、生徒数人を連れての移動は非常にリスクがあると感じられた。

#### (8) 現地通訳者・協力者を探る

- ・今回、通訳者を見つける事が、一番のねらいであった。ところが、当日でも公式訪問の詳しい内容も我々には不明であると共に、現地での関係者がとても多く登場し、誰が何の役職なのかわからなかった。その中で通訳・案内役として、マルモン氏・レリトー和子氏と接触することができた。
- ・マルモン氏は飯田市で初期の人形劇フェスタでのフランス側の役人として、交渉をしていた経緯があり、日本語は堪能。人柄もとても良い方であり、ショー開催についても出来ることは協力して頂けるとの言葉を頂いた。現在は、自由気ままに過ごしている“おじいさん”であり、今は役所関係の仕事はしたがない性格だそうだ。
- ・レリトー和子氏も淑女と言えるととても気さくな“おばあさん”である。4日間共に行動した。飯田市下久堅出身であり、高校時代まで飯田市に住んでいたそうだ。その後早稲田大学を卒業しフランス人と結婚してフランスへ移住。観光ガイドとして仕事をしていた。フランスでは観光ガイドは国家資格が必要であり、難易度は現在も非常に高いらしい。
- ・2年後、生徒を連れて来る事を伝えると、無料で通訳を引き受けて頂けると言われた。娘が日本語も堪能であり、娘を通訳として協力してくれるそうだ。
- ・“テックレンジャー”の説明をしたが、やはり漫画を描いている部活動と勘違いされてしまい、何度説明をしても“戦隊ヒーロー”を理解して頂けなかった。後日、ショーの DVD やグッズを送付する。孫2名も日本語がわかるらしいので、家族でショーを見て頂こうと思う。

#### (9) 飯田市で協力して頂ける関係者を探る

- ・このプロジェクトに対して、最初に相談したのは、飯田市産業部。そこから飯田市秘書広報課。そして飯田市公民館との流れで担当者が決まった。
- ・下見の際は、棚田氏・秦野氏がメジュール市のグレゴリー氏とのメールでの連絡仲介をして頂いた。
- ・飯田市の来年度の予算編成（8月）で、このプロジェクトに対して事業計画予算を計上して頂ければ、一気に現実味が出てくると思う。

今回の訪問で飯田市の議員である清水氏とも知り合うことができた。飯田工業高校のOBであり、テックレンジャーに対して、とても協力的である。飯田市を動かしていただけるようお願いを続けたと思う。

今後、ショー開催に向けて、協力していただける方々

○飯田市

- |           |     |         |
|-----------|-----|---------|
| ・飯田市公民館   | 館長  | 棚田 昭彦 氏 |
|           | 副館長 | 秦野 高彦 氏 |
| ・飯田フランス協会 | 副会長 | 知久 一彦 氏 |

・飯田市議員（同窓生） 清水 勇 氏

○フランス

- ・グレゴリー氏・（次年度 引き継ぎ担当者の女性）  
シャルル・ヴィル・メジエール市 外交政策担当者
- ・マルモン氏  
通訳（セダン市在住）
- ・レリトー和子氏  
通訳・観光案内（飯田市下久堅出身・パリ市内在住）

(10)全体を通して

- ・フランス人はラテン民族特有（ゲルマン民族も多い？）の約束事や打ち合わせなど、あまりあてにならないと思っていた。しかし、メジエール市のグレゴリー氏やその他の方と接してみて、「意外ときっちりしている。」と感じた。ただ、訪問プログラムの中では、我々とのずれ違いが多く見受けられた。グレゴリー氏は、ある程度は計画しておくが、“詳細は当日に何とかする”傾向があると強く感じられた。（よって時間的なロスが非常に多かった。）フランス人の性格をあらかじめ予想しておき、対応してもらえない時は、用意したプランBを実行する必要があると感じた。
- ・フランス料理はとても美味という先入観が日本人にはあるが、今回の下見で食べたすべての昼食・夕食（朝食は至って普通のバイキング）は、どこのレストランに行っても口に合わなかった。（正直まずかった。）また、食事には野菜が全く出てこない。訪問メンバーは食事をほとんど残している有様で、日に日に弱っていくのが感じられた。
- ・男性用トイレは便器のボウルが壁に張り付いているタイプ。問題は設置場所が高い事。186cmの私がちょうど良い高さであるので、子供はどのようにして用をたすのであろうか？（公衆トイレは無い。）
- ・パリでの滞在は3つ星ホテルであったが問題が多数発生。  
館内エレベーターの使用では、部屋カードキーをセンサーにタッチすると希望ボタンを押すことができる仕組みだが、カード感度が最悪。何度やっても反応しない。（すごい不調）センサーと格闘していると、他の客が入ってくるので同乗して何度も上下を繰り返す。さすがシンドラー社製。館内4つあるエレベーター内でも閉じ込められ上下を繰り返している客がいる。「がんばれよ！」と心の中で応援する。  
トラブルはまだまだ続く。3人で1部屋にも関わらずダブルベット1個のみ。クレームを言うも、部屋が無いとの一点張り。結局簡易ベット2個を隙間なく配置。気を取り直してシャワーを浴びようとするが、ホース接続金具が壊れており横からも水平に放水するので洗面所は水浸し。シャワーヘッドも穴があちこち広がっているの、人間に当たる水は3分の1ほど。これが世界の常識かと改めて勉強した。
- ・飛行機の乗り継ぎは重要なポイントである。行きのフランクフルト空港内での入国出国審査では、予想を超えるセキュリティーチェックを受けた。液体類はダメ。身体には金属類一切ダメ。ハンカチやパスポートを身に着けていてはダメ。身体チェックでは円筒形の装置の中に入り、機械がグルグル回ってスケルトン状態の体をディスプレイに表示する。下着等もすべてわかる。出口には何人もの検査係が待機しており、ほとんどの観客がチェックを受けていた。よって、検査場は大渋滞。ここを通過するだけで1時間30分ほど経過した。（よって乗り換えは時間的に全く余裕がなかった。少しでも空港内を迷ったらアウトだった。）
- ・帰りの飛行機ではトラブルが発生。最終日、フランスから出る飛行機が2時間遅れ。原因は不明。よってフランクフルト空港で次の乗り換え時間に間に合わず、中部国際空港行きの飛行機は我々を待って滑走路で1時間待機状態。我々がフランクフルト空港に到着すると、係員に呼ばれすぐに別ルート（1階作業通路）で移動。入国出国審査（行きの時は超嚴重だったのに）を適当（全員でパスポートを一斉に見せて終わり）に済ませて、滑走路で待っている飛行機までバスで移動シタラップで機内へ乗車。乗り継ぎの飛行機会社が同じであったので、乗り継ぎも会社が責任を持ってやってくれたが、飛行機会社が異なっていれば出発してしまったそう。やはり乗り継ぎはリスクがあると実感した。

しかし、これで終わらなかった。名古屋空港で我々の荷物が出てこなかった。まだフランクフルト空港にあるそうだ。空港では昨日から荷物運搬のコンベアが故障しており、飛行機間の荷物の積み込みが間に合わなかった様子。

飯田市に帰ってから聞いたのだが、別便に乗った市長は飛行機トラブルでヨーロッパ内の国々をグルグル回っていたらしい。何が起きても自分で対処しなければならない世界のルールを改めて勉強した。

## 16 最後に

今年から始まった新規事業では「テックレンジャー活動」に対する責任は非常に重く感じている。

正直、本校のプロジェクトは無謀とも思われる内容であるが、逆に考えると学校内外とも、これほど注目される“夢のあるプロジェクト”は全国的に見ても存在しないと思われる。

しかし、生徒はもちろん我々教員側も過去に経験したことが無いような壁をこれからいくつも乗り越えなければならない。

今回のプロジェクトを一つのチャンスととらえ、可能な限り努力して実現できるように頑張っていきたい。



## V 視察研修事業

### 京都すばる高等学校視察

- 1 視 察 日 令和元年 11 月 27 日 (水)
- 2 視 察 先 京都府立京都すばる高等学校 (京都府京都市伏見区向島西定請 120)
- 3 対 応 者 副校長 貴島 良介 氏  
地域協働推進室 室長 北川 博士 氏  
企業創造科 科長 河野 翔太 氏  
企画科 科長 小川 建治 氏  
情報科学科 科長 福江 努 氏
- 4 視 察 者 飯田 O I D E 長姫高等学校職員  
5 名 (安田直弘、堀内優、清水潔、植原崇裕、山田将晶)

### 5 視 察 目 的

(1) 京都すばる高等学校では、本校同様に 2019 年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業 (文部科学省) が採択され、今年度から新学科を立ち上げるとともに地域協働プロジェクトがスタートしている。システム上の課題や運用方法のヒントを得るべく視察をおこない、本校で取り組んでいる地域人教育ならびに地域協働プロジェクトの参考としたい。

(2) 京都すばる高等学校においては、商業に関する専門学科が 2 科と情報に関する専門学科が 1 科設置されている。各専門学科では特色ある学校設定科目を設置し、独自の教育カリキュラムを用意している。多様な学校設定科目を設置することによる功罪を考察し、本校への導入の是非を考えたい。

### 6 視 察 報 告

#### (1) 視察先概要

京都府立京都すばる高等学校

所在地：京都府京都市伏見区向島西定請 120

設置学科：起業創造科、企画科、情報科学科

クラス数：8 (起業創造科 3、企画科 3、情報科学科 2)



#### (2) 各専門学科について

##### ① 起業創造科

募集定員は 3 クラス 110 名。コンセプトは「起業家精神で地域社会をデザインする」。

地域をフィールドに課題解決の力をはぐくむことをねらいとして新設された学科である。従来の会計科の流れを汲んでおり、簿記会計を中心とした学習カリキュラムを構築している。会計・財務的な背景を持ったうえで、新たな価値を創造できる起業家人材や、地域に根ざす起業家人材を育成するために、ローカルをベースに課題解決を目指す教育実践をおこなっている。

1年次では会計の視点から、地域の諸課題に気づくことを学習のめあてとしている。具体的には、フィールドスタディ（伏見大手筋商店街での実地調査）や、貿易ゲームを活用したチーム協働授業、外部教材を活用した創造力養成授業、島根県雲南市への視察などをおこなっている。

伏見大手筋商店街におけるフィールドスタディは、商店街が担う街づくりや、ビジネスにおける簿記会計の必要性について、インタビュー調査等を実施して、リサーチすることを目的として実施している。フィールドスタディの流れは、商店街の歴史や商店街が担う街づくりについての講演を受けた後、グループに分かれ個人商店を訪問。事前に考えた質問を用いてインタビュー調査を進め、事前学習で扱った内容の理解を深めさせることや、予想との違いを感じさせることを重視している。また追加の質問によるコミュニケーションの難しさを体感させることも期待している。2日目の授業ではグループごとに学習した内容を報告し合い、他のグループの様子について共有し、学びを深める工夫もおこなっている。



ビジネス基礎の授業では、伏見税務署と地元税理士事務所と連携して、税金の理解を深めるための授業をおこなっている。生徒たちに主権者として税の意義と社会のあり方を考えさせるのが目的で、税金の意義・目的から日本の財政の現状についての講義をうけた後、長所や短所を洗い出すグループワークをおこなった。さらに新しい税日常の経済事象に対して、主体的に当事者意識を持つことの重要性に気づかせ、考えを深めさせる機会として活用している。

2年次以降では、この学びを学校設定科目「企業マネジメント」で発展させ、さらに地域に深く関わりながら、地域と一緒に成長することをねらう。

このように、机上だけで学びを完結させずに、自分自身で訪れて、見て、聞いて、考えるというプロセスを重視し、机上で学んだことを実地で検証するなかで起業家精神を養い、地域の眠った資源や課題をビジネスの視点で解決していく人材を育成することをねらっている。

## ②企画科

募集定員は3クラス110名。コンセプトは「企画力で京都と世界をつなぐ」。

グローバルをフィールドに学び、ビジネスに関する具体的な企画力を身に付けることをねらいとして新設された学科である。名称は従来の企画科と変わらないが、学習内容を刷新し、新たに観光の視点とグローバルの視点を盛り込んだ。カリキュラムの柱はマーケティングと情報処理と英語としている。マーケティング系統ではグラフィックデザイン、コミュニケーションデザイン、広告・宣伝方法、マーケットのニーズにあった商品開発を学ぶ。情報処理系統では、企画に説得力を持たせる論理的思考力を養うために情報処理やプログラミングを学ぶ。グローバルにスポットを当てている学科であるため、英語科目は3年間で17単位が必修化されているうえに、学校設定科目「グローバルビジネス」が4単位設置されている。論理的に考え、国内外に広く提案する力を育成するという強い意図を感じるカリキュラムとなっている。現行の「グローバルビジネス」は、新学習指導要領の「観光ビジネス」につなげたい考えだ。

京都伏見区役所深草支所との連携授業では、伏見稲荷大社周辺の訪日外国人による混雑（観光公害）という課題を解決するために、混雑緩和を目指したまちづくり会議で提案をおこなった。NTTドコモ空間モバイル統計の資料を活用し、再提案および具体的なアクションをおこなう予定である。またこの取り組みは全国生徒商業研究発表大会でも発表しており、伏見稲荷大社におけるオーバーツーリズムの現状と課題を多くの人に知らせる契機となった。

京都すばるデパート「京都ショップ」開発商品説明一覧

ビジネス基礎の授業では、SDGsの理解を深めるために、17の開発目標のうちいずれかを解決するビジネスモデルを考案し、龍谷大学が主催するビジネスプランコンテスト「龍谷大学プレズンドラゴン×SDGs」に応募する。また「旧二の丸小学校跡地活用プロジェクト」という、地元小学校廃校後の活用プランの立案についても取り組んでいる。

2年次の修学旅行先を台湾としたほか、3年次の課題研究では、商品の開発から台湾での販売実習までを台湾の学校と連携しておこなった。新しい企画科では海外販売実習を学科全体で取り組めるようにするなど、学科全体でグローバルな内容を盛り込めるように体制を整えている最中である。

なお想定している進路先は経営、経済、デザイン、国際関係である。

③情報科学科

募集定員は2クラス80名。コンセプトは「ITで社会の発展を加速する」。

超スマート社会を目前に控え、求められるSTEAM (Science、Technology、

Engineering、Art、Mathematics) 教育を実践することをねらいとしている学科である。前述の2科が商業に関する専門学科であるのに対し、情報科学科は情報に関する専門学科である。なお情報に関する専門学科は全国に18あり、本学科は京都で唯一である。

カリキュラムの中心は情報システムであり、1年次に10単位、2年次に8単位、3年次には7単位が必修化されている。その多くは学校設定科目であり、「ITライセンス」、「サイバー空間と法」、「アプリ開発」、「スーパープロフェッショナル・ラボ」など多岐にわたる。中でも力を入れて取り組んでいるのが、セキュリティ人材の養成、モラルや倫理観の育成、プログラミング力の育成である。昨今のインターネットの爆発的な普及と発展にともなうセキュリティ人材の不足は世界的な課題となっており、人材の確保は経済界からの強い要望でもある。また正しい倫理観が身に付いていなければ、技術を悪用する可能性もあり、個人のモラルにうったえかける従来のスタイルでは通用しない場面が多々あるため、教育の必要がある。さらに論理的思考力を身に付け、コンピュータを使うだけでなく思い通りのものを創り、社会の安心・安全を守るためにアルゴリズムとプログラミングを学ぶ。

「サイバー空間と法」では知識と技術を学ぶとともに、地歴公民科の教員による授業もおこなっている。これは法的な知見からサイバー空間をとらえるねらいがある。小学生にスマートフォンの正しい使い方を教える講座を開くなど、学んだことを発信する取り組みもおこなっている。

★京都すばる高等学校企画科 × 本家ハツ橋西尾株式会社

商品	写真
<b>あんごまラスベリー</b> (5個入り) <b>¥250</b> 今までのハツ橋にない甘すぎずさっぱりしている商品。今年のテーマであるほんなりを最大限に表しています！	



★京都すばる高等学校企画科 × 三星園上林三入本店 × 灘商事株式会社 × 大阪ソーリング印刷株式会社

<b>京のぶづつけどすえ</b> <b>¥600</b> お茶漬け ぶづつけどとは、京言葉でお茶漬けという意味を表します。高級な碾茶(くてんちゃ)と、山椒を使った贅沢なお茶漬けをお楽しみください！		<b>びやうマッチャぼっぶ</b> <b>¥400</b> ほろ苦い抹茶とあまいキャラメルを組み合わせた新しいポップコーン！パッケージも京都らしさとポップな感じに仕上げました。	
<b>ほんないラテ</b> <b>¥600</b> 宇治抹茶を使用しています！とろみのある他にはないラテとなっています。自宅で簡単に本格ラテを楽しみませんか？		<b>ほんないラテ</b> <b>¥600</b> こちらはほうじ茶味です！とろみのある他にはないラテとなっています。自宅で簡単に本格ラテを楽しみませんか？	
<b>あん玉</b> (抹茶) <b>¥350</b> あんこ抹茶を組み合わせたあん玉！子供から大人まで食べられるお菓子です！一口食べたらとまらない！ぜひほろじ茶味と一緒に買い求めください。		<b>あん玉</b> (ほうじ茶) <b>¥350</b> あんこほうじ茶を組み合わせたあん玉！子供から大人まで食べられるお菓子です！一口食べたらとまらない！ぜひ抹茶味と一緒に買い求めください。	



「アプリ開発」ではJavaによるプログラミングをおこない、校内でプログラミング競技会を開催している。アプリケーションの開発を通して、アルゴリズムとプログラミングの基本的な内容を学び、その後のAIプログラミングにつなげたい考えだ。

「ITライセンス」を履修することで、経済産業省情報処理技術者試験の基本情報技術者の午前試験の免除試験の受験資格を得ることができる。高校として認定を受けているのは珍しく、学校全体でIT技術者の育成に力を注いでいることがわかる。

「スーパープロフェッショナル・ラボ」は課題研究の代替科目として5単位を設置している。1年次と2年次で学んだことを土台として、岩手県立大学や京都府警、企業と連携した発展的な研究をおこなう。京都府警との連携では、小学生に情報モラル教育をおこなう「高校生サイバー防犯ボランティア」に協力しているほか、京都府警察本部サイバー犯罪対策課からはホワイトハッカー育成のための指導を受けている。

### (3) 学校設定科目について

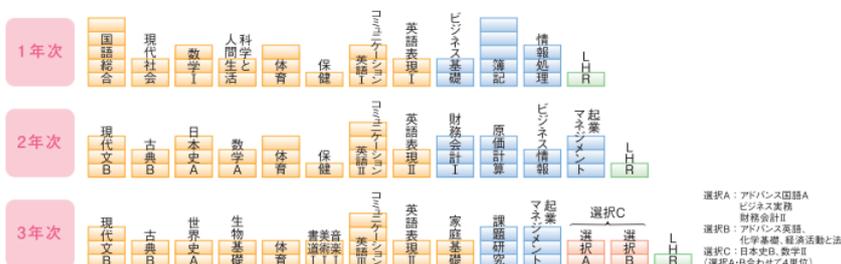
起業創造科で4科目、企画科で5科目、情報科学科で13科目が学校設定科目として設置されている。これだけの科目を用意し、運用させるためには教員一人ひとりの準備と協力が不可欠であることが分かった。河野先生は半年間の長期研修に参加し、龍谷大学の深尾教授や公益財団法人京都地域創造基金とつながりを構築し、人的なネットワークを利用して新しいカリキュラムの構想を練ったという。小川先生は週の授業時間を2時間減らしてもらい、セミナーや研修に参加しやすい体制を整えた結果、研究先でNTTのビッグデータ利用などのアイデアをもらうことができたという。

そのうえで、一番の課題は「教材と人」、すなわち「スキルと配当」というお話をいただいた（貴島先生）。学校設定科目は、①教科書に代わる独自教材の準備、②指導方法の継承、③指導できる教員の配当という3つの条件がそろわなければ続けることは難しい。ゆえに独自色を出そうとすればするほど、その負担は特定の教員に集中し、依存度が高まり、異動とともに瓦解するという危険性ははらんでいる。

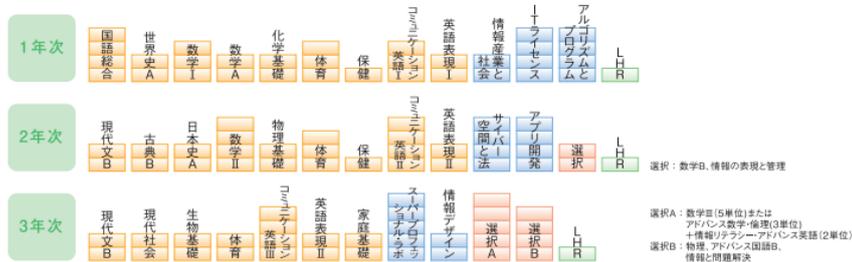
情報科学科では、市販の書籍を利用することと、自作教材の製本化によって①の課題を解決している。②および③の課題については、京都府立の単独商業高校および単独情報高校がないために、教員の異動がほとんどないということがわかった（貴島先生29年目、北川先生16年目、福江先生13年目）が、それだけ長く携わっている先生方にしていても「独自色を強く打ち出しすぎると継続は難しい」ということであつた。

本校の地域協働プロジェクトにおいても、いくつかの学校設定科目が特色あるカリキュラムの構築を目

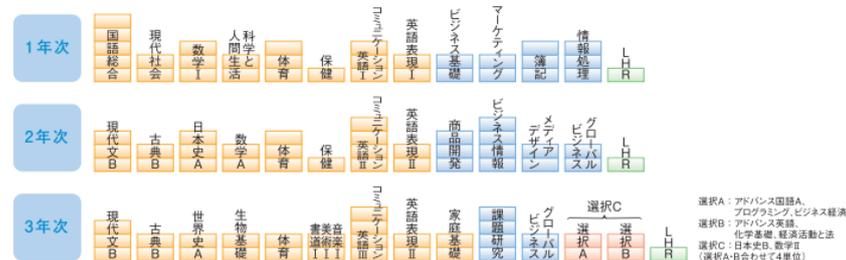
■教育課程(2019年度入学生用)



■教育課程(2019年度入学生用)



■教育課程(2019年度入学生用)



的として設置されようとしているが、安易な導入は教員の負担を増やすばかりか、生徒へ還元する学びの質が低下するおそれがあることを指摘しておきたい。

#### (4) 地域協働プロジェクトについて

京都すばる高等学校では、入学者の出身中学がおよそ 120 校にわたり、出身地域が多様であることが特徴である。そのようなバックグラウンドの異なる生徒たちに対して、「みんなごと化プロジェクト」という合言葉を掲げてスタートした。1 年次から 2 年次の段階では、それぞれの地域課題を「じぶんごと」としてとらえ、2 年次から 3 年次の段階で「みんなごと」へ昇華していく。「みんなごと」とは、生徒一人ひとりの意識が集合し、社会を変える大きな力になることを指す。その結果、協働して住んでよし・訪れてよしの持続可能都市を実現するような京都を支える人材を育てることが目的だ。

このプロジェクトを実践するため、校内では新たに指導体制を整えている。新しく分掌に「地域協働推進室」を設置し、北川博士先生が室長として全般的なとりまとめや陣頭指揮を担っている。北川先生の授業時間数は一般的な時間数より 8 時間程度の配慮がされており、その分は国の予算から教員一名分が加配されている。また学科長である河野先生と小川先生はそれぞれ 2 時間程度の授業時間数の配慮がされており、他の教員がカバーする形をとっている。

これまでは簿記とそろばんができることがステータスであったが、学習内容にプログラミングや商品開発等の新しい科目が加わり、著しく変化する社会に対応できる新しい力の育成が望まれている。これからの商業科の生徒に身に付けさせたい力が多様化するなかで、「これができれば大丈夫」という絶対的な指標は存在しないと言っても過言ではない。課題を見つけて解決するという人材が求められている。そのためプロジェクト型学習（PBL: Project Based Learning）であり、注目が高まっている。PBL はこんにち盛んに研究が進み、教育現場はまさに過渡期の真っただ中にある。ゆえに教員は常に学び続けなければならない、「教育内容を一からつくる」ことはある意味必然である。

しかしながら、PBL は万能ではない。基礎科目の一定の積み上げがなければ、「活動あって学びなし」と揶揄される見せかけの学習に陥ってしまう。基礎科目の学びも押さえつつ、充実した PBL をおこなうためには、絶対的な時間数の確保が必要である。PBL はその特性上、短期的な時間数の確保では効果を発揮しないため、長期的に一定時間を確保する必要がある。それは 1 回の授業における進捗が、従来の一斉型授業に比べて教員の思い通りにならないことが往々にしてあるからだ。そのため京都すばる高等学校では、起業創造科と企画科が 31 単位、情報科学科が 32 単位のカリキュラムを組んでいる。

本校においてもグランドデザインが示されたところ、「高度な専門性」と「総合技術による学科連携」が相反するのではないかという指摘がある。その回答の一つに、7 校時目の実施という選択肢を設ける示唆ではないだろうか。

#### (5) 質疑応答

Q: 働き方改革が叫ばれるなか、新しいプロジェクトを立ち上げている。負担を軽減するために削ったことはなにか。

A: 仕事量自体は増えている。共通テスト、ポートフォリオ、生徒指導、進路指導等…。正直、わが校では働き方改革の真逆をいっていると思う。未だ業務改善には至っていないのが実情である。仕事をやる人、できる人に業務が集中し、一層偏りが大きくなっている。大抵 19 時頃には帰るが、10 数人の職員はそれを超えて学校に残っている。

情報科学科では、全商検定の全員受験、全員補習はやめた。すべてを追いかけることは無理が生じる



ため、国家試験に照準を合わせることにした。

Q：教員の異動にともなう授業の消滅はないのか。

A：実はそれほど異動が多くない。府立の単独商業高校はなく、普通科と併置されている学校が丹後地方にひとつ（編註：京都府立網野高等学校の企画経営科）、木津川市にひとつ（編註：京都府立木津高等学校の情報企画科）あるだけ。もうひとつ学校があったが（編註：京都府立大江高等学校）、総合学科に改編されてしまう。これだけ独自色を打ち出しているなかで授業が成り立っているのは、勤続年数の長さによっている部分はある。当然、教員個人のスキルに依存する弊害はあるが、お互いに競い合い、切磋琢磨しながら授業力を高めている。

Q：情報科学科について、国家試験の合格率はどれくらいなのか。

A：1年次に配当してある学校設定科目「ITライセンス」でITパスポート程度の学習をし、1年次3月にITパスポートを全員で受験する。近年、合格率は20%前後で推移している。2年次6月には基本情報技術者試験の午前免除試験を実施し、希望者が受験している。20名程度が午前免除の認定を受ける。その後2年次10月、3年次4月の本試験に合格するのは10数名程度である。

Q：進路状況はどのようになっているか。

A：卒業生の約半数が大学・短大に進み、約25%が専門学校、約25%が就職となっている。90人の就職希望者に対して1,000件以上の求人がある状態である。離職率は5%程度である。今年は新しい学科ができたばかりで1年生しか在籍していないため、データはないが、新しい学科の特色を生かした進路を実現したいと考えている。

Q：京都すばるデパートについて

A：今年で33回目を迎える。のべ34の企業の協力をいただき、二日間で約1,500万円の売り上げを計上した。各専門学科の特色を生かした取り組みをおこなった。起業創造科は全国の名産品を取り扱う物産展、企画科は西尾八つ橋と連携した開発商品（カフェオレ味）の販売、情報科学科はレジシステムの開発・運用をおこなった。

また2018年度から「すばる通貨」の運用を開始した。すばる通貨はオープンスクールなどで中学生に配布した、今年度のすばるデパートでのみ使用できる通貨である。

## (6) 視察目的の検証

### ① 本校と視察校における地域協働プロジェクトの比較

	本校	視察校
対象学科	全学科	起業創造科、企画科
分掌	なし	あり（地域協働推進室）
PBL	未導入	導入済み
販売実習	なし	あり（京都すばるデパート）
週の授業時間数	30	31

本校と視察校の特徴的な違いについて、表にまとめた。学校の一体感を生んでいる最大の要因は、本プロジェクトを推進する分掌が存在することだ。前述の通り、視察校では北川先生が地域協働推進室の室長として全体の取りまとめをおこなっている。本校の課題は、その任に就く教員の負担軽減策が講じられていないことや、プロジェクトチームの不透明さが挙げられる。また、普通科教員をきちんと巻き込んでいるかどうかや、校内・校外に広く発信できているか、二人目、三人目のコーディネーターは必要でないかどうかなど、検討課題は山積している。

また総合技術や課題研究の授業においては、来年度からPBLを導入し、生徒に身に付けさせたい資質や能力について効果測定を実施することを提案したい。効果測定にあたっては、教員の感覚ではなく、何ができるようになったのかを数値化して、客観的に見える形にすることも重要だ。

### ② 学校設定科目の設置・運用について

視察校では、三つの科で合わせて22の学校設定科目が用意されていた。これには少ない異動が大き

く影響を与えていることは認めざるを得ない。本校に学校設定科目を設置する場合、次の二点について十分に検討を重ねなければならない。

ア一部の教員に開発、運用、反省を集中させないこと

イ従来の科目に比べて、生徒への学びの質が低下しないこと

アは、一部の教員に負担を集中させればさせるほど、学校の一体感を損なうおそれがあるほか、当該教員の異動によって授業が成立しなくなるおそれがあるからだ。

イは、相応の準備時間が必要である。教科書のない科目を実施する以上、教員一人ひとりに任せきりにしては、当初の教育目標を達成することはできない。視察校における地域協働推進室と学科長の連携を例に、本校でも目的と手段の明確化と、プロジェクトメンバーの正式な発足が求められる。



## 7 おわりに(視察職員感想)

### (1)社会基盤工学科 堀内

今年の四月から学科を新設しスタートしたが、学校全体で育てたい資質・能力を明確にしており、そこから各学科の特徴を生かしながら生徒を育てていく学校に感じた。

特に新設の2学科においては、地域の問題、世界の問題を考えながら解決に臨む内容は、本校の地域人教育と似ている部分ではないかと思ひ、参考になるのではと考える。

また、今回のプロジェクトでは、1年単位で考えていくのではなく、3年間を通して学ぶことが客観的な自己評価や、思考力の向上などにつながり、目指す人物像を育てることができるのではないかと考える。

教員も、長期にわたり生徒への指導や学科に関わることができるため、生徒の育成に力を注ぐことができる。そして、担当する教員も長期研修を通して、地域とのつながりや個々の能力の向上に努めることができるのは良いことである。と考える。



### (2)建築学科 清水

学校設定科目は、どの先生が指導しても同じ内容になるように、教材をしっかりとつくっている。それが生徒の質の保証にもつながる。教員の1人に集中する仕事を減らすためにも教材づくりは必要があると感じた。

高校へ通う生徒の出身中学が120校もあり、その中学校に教員が手分けをして高校説明に行っていることに驚いた。

すばる高校は、人事異動が少なく、教員集団体制が複数年あまり変わらず学校運営できることが、地域協働プロジェクトを行う上では強みであると思う。教員1人1人が学校・学科の特徴や、地域の特徴などの情報を持ちやすく、地域を理解しやすい。そして教員同士の共有もしやすく、チームワークが作りやすいのではないかと。

校舎見学では、生徒個人のパソコンを収納する鍵付き電源付きロッカーを見せていただいた。入学時

に生徒全員にパソコンを購入させている。今の時代、これからの時代、パソコンは仕事において必要不可欠なものだ。高校時代から慣れさせておくことは、すばる高校の生徒には特に必要であり、高校を出てからのスキルにつながるはずである。また、各クラスの授業の様子を廊下から見て、どのクラスも生徒全員が教員の話に耳を傾けており、積極的に授業を受ける姿勢があった。学校全体で、生徒の授業に対する意識が高いと感じた。

### (3)商業科 植原

長野県の商業科を持つ高校では、その多くが「商業科」であり、商業に関するいずれの科目も満遍なく学ぶカリキュラムを構成している。視察校では小学科を軸に、特色あるカリキュラムを組んで、生徒に身に付けさせたい力を明確にしている。学校設定科目を設置しやすいのはそのような側面も影響しているのだろう。高度な専門性を追求するのであれば、カリキュラムの構成を見直すことと、学び続ける教員の存在が不可欠であることを学んだ。従来通りの教育方法・教育内容では、これからの新しい社会に対応しうる人材を育てることは困難である。

これから本格的に地域協働プロジェクトを推進する本校にとって、先進的な取り組みをおこなっている京都すばる高等学校を視察できたことは、大きな試金石となった。PBLの導入を契機に、地域人教育を核とする、地域と連携した学習プログラムをさらに充実・深化させるとともに、地域人材を育成できる学び舎としての価値をいっそう高めてまいりたい。

京都すばる高等学校副校長の貴島先生はじめ、ご対応いただいた先生方に厚く御礼を申し上げ、報告とする。

## 立命館大学政策科学部視察

- 1 視 察 日 令和元年 11 月 26 日 (火)
- 2 視 察 先 立命館大学 政策科学部 (大阪府茨木市岩倉町 2-150)
- 3 対 応 者 立命館大学政策科学部 教授・学部長 佐藤 満 氏  
同 教授・副学部長 森 隆知 氏  
同 教授・副学部長 坂西 明子 氏  
同 教授 平岡 和久 氏
- 4 視 察 者 飯田 O I D E 長姫高等学校職員 6 名  
(國松秋穂・植原崇裕・山田将晶・安田直弘・清水潔・堀内優)
- 5 視察前の問題意識

本校商業科において実施している「地域人教育」並びに「探究的な学習」を今後持続的に進めていくにあたり、地域や社会の問題を科学的に分析・検証し、政策の提言を目指す立命館大学政策科学部の学びや研究を、高校教育に落とし込むアイデアを得るため視察を行った。政策科学部では2年次からグループに分かれてのフィールドワークが開始し、多くの学生が積極的に大学外へ出ていくという点に関して、学外との連携についての工夫や教育効果などを考察することを目的とした。また、フィールドワークではPBL (Project/Problem-Based Learning) を重視していることから、高校教育においてPBLを実践するにあたっての考察・検討を行いたい。さらに、高大接続という観点から、政策科学部のアドミッションポ

リシー（AP）・カリキュラムポリシー（CP）・ディプロマポリシー（DP）について考察し、大学が求める高校生像を始め、在学中に身につけられる力や卒業時に必要な力がどのようなものかを学び、帰校後の教科指導や進路指導等に役立てたい。

## 6 視察目的

(1)「主体的・対話的で深い学び」並びに「探究的な学習の時間」を体現していくにあたり、立命館大学政策科学部が取り組んでいる社会問題の調査・分析・政策提言、並びに PBL 科目（主に、2年時のフィールドワーク）について視察を行い、長野県に高校教育における探究学習について考察したい。



(2)政策科学部のアドミッションポリシー（AP）・カリキュラムポリシー（CP）・ディプロマポリシー（DP）について調査し、現在の大学がどのような研究を行っており、それに伴いどのような高校生を受け入れようとしているのか等、高大接続について考察したい。

## 7 視察報告

### (1)視察先概要

立命館大学

- 所在地：大阪府茨木市岩倉町 2-150
- 設置学部：
  - 衣笠キャンパス（法学部・産業社会学部・国際関係学部・文学部・映像学部）
  - びわこ・くさつキャンパス（経済学部・スポーツ健康科学部・食マネジメント学部・理工学部・情報理工学部・生命科学部・薬学部）
  - 大阪いばらきキャンパス（経営学部・政策科学部・総合心理学部・グローバル教養学部）
- 学生数：32,338名（2019年5月1日現在）



### (2)政策科学部について

#### ①学部概要

スローガンは「文理融合」、コンセプトは広く学んだ上で1つのことを専門的に学ぶ「T字型の学び」である。創部当初から学生一人ひとりが使用できるPCを購入し、インターネットを自由に使用できる環境が整備されていた。それに伴い、反転授業やアクティブラーニングはマスメディアに取り上げられるようになる以前から始めていた。「政治を含めながら社会の問題を解決する手段を科学する」「あらゆることを政策と捉え科学する」ことを目指しており、多様な専門分野の教員が配置されているため、学生の興味関心に対応できる体制が組まれている。国際的な学びに力を入れており、専攻は政策科学専攻（日本語基準）と Community and Regional Policy Studies（CRPS）専攻（英語基準）の2つがある。後者の専攻については、「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」ことに主眼を置いている。つまり、外国語を利用し、ツールとして何を学ぶのが重要であるという。

#### ②4年間の学びと2年次のフィールドワークについて

##### a. 4年間の学び

政策科学部では4年間の学びを通して、「社会の問題について深く考え、政策構想力・実践力を身につけること」「国際的視野の獲得」を目標としている。そのため、①政策科学科目、②政策英語科目、③グローバル言語科目、④学部独自留学プログラムというカリキュラムを組み込んでいる。

4年間の流れは以下の通りである。1年次：「発見」をテーマとし、学術俯瞰科目（Meta-Learning Courses：MLC）を中心に多角的な視点を養う。2年次：「調査」をテーマとし、政策科学科目（Policy Learning Courses：PLC）の選択が可能となり、発展的な科目を学ぶと共に、フィールドワークで現場の調査が開始する。3年次：「探究」をテーマとし、各ゼミナールにおいて研究が進められていく。4年次：「発信」をテーマとし、学びの成果を社会へ発信する。

#### b. 2年次のフィールドワーク

1年次にPBLの基礎となる批判的思考力や論理的表現力などを習得した上で、2年次に企業や行政機関、NGOなど政策課題に取り組む現場で、調査活動が実施される。2年次から始まるフィールドスタディは、教員側がフィールドを設定する「特定プロジェクト」と、学生が自らフィールドを設定する「自主プロジェクト」の2種類がある。メンバーについては、1プロジェクトあたり6～13名で構成される。

フィールドワークはチームに分かれての活動であるため、専門的な学びだけでなく組織の一員としてのリーダーシップやフォロワーシップの学びも自然と行われる。研究については、課題設定をきちんとできるか、つまり、研究の実行可能性・論理の明確さ・社会的な重要性などが勘案されているかが学生に求められる点であるという。評価については、基本的には出席を重視。レポートは春学期（1人1,500字以上）と秋学期（1人3,000字以上）に実施している。

#### ②平岡教授のゼミナール

専門は財政学・地方財政論・地域経済論であり、財政学をベースとしながら地域経済、地方財政の研究を行なっている。立命館大学は学輪IIDAに所属しており、さらに平岡ゼミでは「特定プロジェクト」として飯田市の中心市街地の研究を継続して実施している。平岡ゼミ生による過去の研究としては、「」「」などがある。

### (3) 質疑応答

Q：大学は高校生に何を求めるのか？

A：まずは社会に対する関心と好奇心が必要である。学生の興味関心をいかに高めるかは常に悩んでいるに送ってほしい。

Q：高校はまだ文理融合になっていない。文理融合には壁の部分があると思うが、どうすれば良いか？

A：文理の「理」の中でも融合しやすい分野とそうでない分野がある。融合しやすい学部として、例えば、情報工学、環境工学、システム工学などが挙げられる。また、政策科学部も学部間の垣根が比較的低い学部であり、文系である政策科学部に理系の教授がいて政策立案に向かっている。入学してくる子は基本的に文系が多く、なおかつ、まちづくりに興味のある子が入学してくることも多い。

現在、文理融合の研究プロジェクトを進めており、大学の独自予算のうち7.7億円を研究に充て、うち、3億円を文理融合のプロジェクトに充てている。

Q：カリキュラムの課題はあるのか？

A：実践的な政策研究と謳ってはいるものの、実践は授業内ではなく課外活動となる（なお、課外活動は単位外である）。大阪にキャンパスを移してから、課外活動がなかなか充実していない。

Q：大学院へ進学する学生の就職先はどのようなものがあるか？

A：修士（マスター）修了者は基本的には学部卒と変わらないが、ごく一部シンクタンク系への就職がある。博士（ドクター）修了者は研究者がほとんど。現在はドクターの人材を民間で採用する動きが欧米では多くなっているものの、日本はまだまだ遅れている。

### (4) 視察目的の検証

#### ①2年次のフィールドワーク（PBL科目）についての考察

##### a. 研究テーマの設定について

大学における研究活動や、高校における総合的な探究の時間において、研究テーマは教員からある程度示した方が良いのか、それとも1から学生・生徒たちに考えさせた方が良いのか。前述したよう

に、政策科学部においては、大学教員がフィールドを設定する「特定プロジェクト」と学生自らがフィールドを設定する「自主プロジェクト」の2種類があったが、後者について、「最近さみしくなってきた、元気が無くなってきた」という印象を持っているとのことであった。本校商業科の地域人教育においても同様に、「各地区に配置されるグループ」と指定のない「テーマ型」があり、どのグループもテーマ設定には頭を悩ませる。PBLにおけるテーマ設定は非常に重要であり繊細な部分であると考え。教員がガッチリと考えたテーマでは子どもたちの自主性が損なわれてしまう一方で、1からテーマを考えさせるとしてもそもそも研究をしたことのない高校生にとってはハードルが高い。子どもたちの問題発見能力を高め、教員と生徒が上手いバランスで研究テーマの設定ができるよう今後とも考えていきたい。

b. 学びのアウトプットについて

本校の地域人教育においては、3年次に1年間のまとめとして報告書の作成を行っている。しかしながら、学術論文的な要素に関しては課題があり、剽窃の有無（適切な引用方法）の徹底などはできていないのが現状である。さらに問題として挙げられるのは、報告書作成におけるフリーライド問題である。そこで、政策科学部ではフリーライド対策のため、レポート作成の際に「1人1,500字（秋学期は1人3,000字）×グループの人数」というような工夫を行っていた。本校においてもそのような工夫を行うことで、フリーライドはある程度防げるのではないだろうか。生徒1人ひとりが学びをきちんとアウトプットできるような仕組みについても、まだまだ検討の余地がある。

c. 縦のつながりについて

大学には大学院生が教授の補助を行い学部生に指導をする、TA（Teaching Assistant）という制度がある。大学の学び（特に理系）においては研究が単年度ではなく長年にわたって引き継がれていく場合が多々ある。政策科学部でもフィールドスタディの際、TAをつけて指導に当たっているという。このような縦のつながりは、研究の引継ぎや、多様な考え方を学ぶ機会、異世代交流に伴う所属意識の醸成といったメリットがあげられる。高校教育においても、教育課程等の面で実現可能性は低いものと考えられるが、1～3年生が同じ授業で学び合うという形態も今後検討してよいのではないかと考える。

② 高大接続についての考察

政策科学部において2年次からグループごとのフィールドスタディが始まるように、多くの大学ではゼミナール形式での講義が行われる。少人数で課題を発見し、解決を目指すという部分については、本校の地域人教育もゼミナール形式であり、大学進学者に関しては大学出の学びに向けた良い機会であると考え。一方、高校段階における問題意識の醸成に関しては課題が残されている。というのも、佐藤教授からのお話の中で「大学生の社会に対する関心の低さやモチベーションに差がある。高校時点で、この教科のこの部分が本当は面白い！というヒントを与えてあげてほしい。」というご意見をいただいた。今後の高校教育においては、大学の学びに向けた問題意識の醸成、とりわけ「当たり前を疑う力」をどう身に付けさせるかが求められるのではないかと私は考える。

## 8 将来に向けての課題

社会の変化が激しい昨今、子どもたちの問題発見・解決能力や情報分析・活用能力等といった社会を生き抜く力を養う上でPBLは非常に魅力的なものに見える。しかしながら、取り入れるためにはいくつかの壁を乗り越えなければならないと考える。

第1に、教育課程についてである。もし高校教育においてPBLを取り入れるとしたら、3年間という長い時間をかける必要があるように思う。その上で商業科や工業科といったいわゆる職業科は、検定取得という大きな柱があり、PBLという大きな柱も建てるとうると、生徒の負担が大きくなりすぎてしまうことが懸念される。何を残し何を削るのか、魅力的なPBLを実施する上でその点が1つ大きな焦点となるのではないかと考える。

第2に、授業外の教員の負担についてである。質疑応答の部分でもあったように、大学では課外活動は単位外であり、同様に本校商業科の地域人教育についても休日の活動は各グループおよび教員の判断による。働き方改革が叫ばれている世の中である一方で、探究学習を目指すとなると学校内だけの時間ではなかなか

生徒の成長は見込めないというジレンマが起り得る。「探究的な学習の時間」や課外活動が行われるような学校設定科目が、今後持続可能なものであるために教員の負担についても検討を続けていく必要があるように思う。

## 9 おわりに

この度の視察において、立命館大学政策科学部の平岡教授はじめ、大学の先生方には丁寧にご対応いただいたほか、キャンパス内をご案内いただくなど、非常に充実した視察であった。

本校からは商業科3名、工業科3名の職員が訪問させていただき、学科の枠を超えて学べたことで本校および長野県教育のより一層の発展に寄与する視察となった。迎えていただいた立命館大学の皆様に感謝申し上げますとともに、本視察の成果を様々な機会を通して広く伝えていく所存である。

## 和歌山大学観光学部視察

- 1 視 察 日 令和元年 11 月 8 日 (木)
- 2 視 察 先 和歌山大学 観光学部 (和歌山県和歌山市栄谷 930)
- 3 対 応 者 和歌山大学観光学部 教授 藤田 武弘 氏  
同 教授 大浦 由美 氏  
同 特任助教 藤井 至 氏  
和歌山大学食農総合研究所 岸上 光克 氏
- 4 視 察 者 飯田O I D E長姫高等学校職員 3名 (國松秋穂・越康恵・高橋茂)  
飯田市役所職員 2名 (小島一人・竹内淳)  
白馬高等学校職員 1名 (浅井勝巳)

## 5 視察前の観光に対する問題意識

2022年度施行の学習指導要領において、商業科では「観光ビジネス」が設定されている。なぜ観光が商業に入ってきたのであろうか。これまでの科目「商品開発」は有形財を想定したものであったが、無形財というサービスを開発することを想定しているのであろうか(ハードからソフトへ)。発展的に考えれば、ソフトの開発を通じた外貨獲得、地方創生などを担う人材育成といううたい文句ではないだろうか。そうであれば、経済的な背景が色濃く見える。個人的には前述の内容に加え、「人間はなぜ観光に行くのか」という問いについて考察することや観光に行けない状況について考えるなど、観光そのものについてしっかり向き合い、観光を持続的な社会づくりや人の成長と結びつける内容としたい。



## 6 視 察 目 的

- (1)2022年施行の学習指導要領において新科目「観光ビジネス」が設定される。そのため、和歌山大学観光学部における観光教育における視察をおこない、長野県の高次教育における観光教育について考察したい。
- (2)2019年8月に受講したアグリイノベーションフィールドスタディ(AIFS)をきっかけに、受講生徒

たちの「食」と「農」に対する関心が高まっている。そのため、和歌山大学で実施されている食と農に関する研究について視察をおこない、これからの地域人教育、観光、スタディツアー、移住定住、SDGs等々を複合的に考察したい。

## 7 視察報告

### (1) 視察先概要

和歌山大学

所在地：和歌山県和歌山市栄谷 930)

設置学部：教育学部・経済学部・システム工学部・観光学部

学生数：3,996人（平成30年5月1日現在）

### (2) 観光学部について

#### ① 学部概要

1 学年定員 120 名。学部生は 500 名弱。

学部のコンセプトはグローバル。観光を観光に関するビジネスとし、観光ビジネスに関する人材育成をするといった狭義なものとして捉えるのではなく、人が時間と空間を移動することによって起きる事象すべてを「観光」と捉えている。そして、その分野を「観光経営」・「観光文化」・「地域再生」の3つのコースに分けるとともに、コースを超えて統合的に学べるカリキュラムとなっている。また、和歌山大学は国立大学で唯一観光をメインにした学部、大学院である（私立では立教大学が同様のカリキュラムがある）。留学生は国費で優秀な学生が集まり、社会人も企業、リカレント、県庁・市役所等から希望して院生になることが多い。

#### ② ローカルとグローバルの取組

大学での講義とは別に実践する場として、地域と海外での実践的な学習プログラムを設けている。

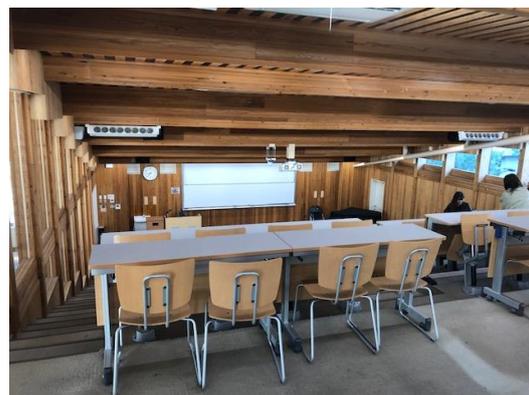
##### ア 地域インターンシッププログラム (LIP)

LIP では、学生が県内外の地域に入り、地域が抱える課題を住民とともに発見し、その解決方法を考え、活動するものであり、30 時間を 1 単位として認定している。大学の教員の管理のもと、3 年生までを対象とし、今年度は学生 360 人中約 200 人が参加している。強制ではないが、大学の精神を理解して入学している学生が多いことから、在学中必ず 1 回は参加している。また、複数回参加する学生もあり、多い学生だと 1 年間で 120 時間程度実践したり、翌年もその翌年も参加するなどしている。

LIP の仕組みは大きく分けて 2 つあり、和歌山県内および大阪府南部の市町村へ公募する公募型と教員が関わり続けているパターンの申請型がある。いずれのプログラムでも、1, 2, 3 回生が一緒になるため、上回生がリーダーとなり、縦のつながりを構築することができる。

身につけさせたい力として、「理論的に解決していく力」、「実践的に解決していく力」、そして、「地域住民と一緒に課題を解決していく力」とし、毎年事前と事後に自己評価及びアンケートを取得しているが、取っただけで、分析等はできていない。今年度は活動を充実させることや地域への恩返しの意味も含め、LIP のまとめのポスター制作をして、地域の公民館等で貼ってもらうほか、活動報告会をおこなうことを計画している。

##### イ 海外研修 (グローバルインテンシブプロジェクト : GIP)



GIP では、ツーリストとして海外を体験するだけでなく、現地の人との交流や海外大学でのキャンパスライフ、文化交流、ホームステイなど、多彩なプログラムを通じて、観光とは何か、世界とは何かを体験して学ぶ。英語ができるからって海外行っても仕方がない。まずは地域を知ってからであるということもある。海外（ヨーロッパ）の若者は地域の制度、社会、政治のことを知っている。国内、地域のあらゆることを知っていることが国際人の前提である。

#### ウ その他のグローバルの取組

- ・グローバルプログラム（GP）

観光に関する専門科目の講義を全て英語で学べる。1年次に70名程度登録するが、4年生まで継続できるのは10名に満たないなど、相当の語学力と胆力が必要である。

- ・国際観光学研究センター

観光学の高度化を目指して先進的な共同研究活動を進める国立大学唯一の本格的な国際的研究機関。世界各国から最先端の観光研究者が集うとともに、国際的なセミナーやシンポジウムを開催している。また、学生や教員の研究活動のサポートもしている。

- ・ツーリズムエデュケーションクオリティ「TedQual」

観光学の教育と研究やトレーニングのレベルの国際水準を満たしているかを認証する、国連世界観光機関(UNWTO)の「TedQual」(ツーリズムエデュケーションクオリティ)を認証取得し、観光教育、研究のグローバルネットワーク(交換プログラム、共同研究、国際学会等)への参加やThemisFoundationとの共同プログラムの実現が可能となっている。

#### ③藤田先生のゼミナール

藤田先生と大浦先生が共同し、「農山村再生ゼミナール」を2年次から開講している。地域実習が多く、単位認定も厳しくしていることから、覚悟を持って学ぶ学生が多い。傾向として農家民泊、地域、地域コミュニティに関心がある学生が多いなど地域志向が強い学生が増えている。卒業後の進路では、公務員が最も多く、次に農業関係(就農、JA、農機具メーカー、飼料メーカーなど)、金融機関となっている。なお、金融機関はメガバンクではなく、地銀が多いのも特徴的で、地域との距離が近いことを望む学生がほとんどである。

#### (3)食農総合研究所について

和歌山大学食農総合研究所は平成28年に開所し、今年で4年目。食と農林水産業の分野に関わる研究活動を通じて、地域社会と大学との連携を強化し、地域貢献機能として発揮している。専任の研究員7名のほか、大学の教授等も含め総勢20名の体制で食及び農について研究している。また、企業や自治体と協働した研究活動も数多く実践中である。そもそも食と農という考え方は、農業というものが切り離されつつある現代だが、食べることは誰にでも共通していることであり、その原点は農業、漁業であり農山村であることは間違いない。ゆえに密接につながっている食と農を結び付け、農を基点とし食につなげる研究は大変重要である。農学部のある大学はこうした研究所や研究をしているところも多数あるが和歌山大学には農学部がない。なぜ農学部がない和歌山大学が食農総合研究所を有しているのか。そこには観光学部だけでなく経済学部や教育学部、システム工学部にも食と農の分野は入ってくる共通するテーマであり、研究していく価値が多いにあるからである。そうした意味から講義も実践し、寄付講義として「食と農に関するこれからの考える」という講義などを毎年おこなっている。観光学部以外は農業・農村といった講義はないが、大変関心が高く、今年は250名以上の学生が受講している。



#### (4)質疑応答

Q：観光とは何か。

A：狭い意味の観光や旧来型の団体旅行、大衆観光の捉

え方では、経済活動のみであり、本来の観光が意味するものが見えない。人が時間と空間を移動することによって、様々な事象が起きている。

例えば、農山村に移住定住、交流、ワーキングホリデー、インバウンドのリピーターが地域社会に、農村に入るといふ事象が起きている。また、近年、観光客が増え、オーバーツーリズムが起きている。オーバーツーリズムによって、住んでいる人や地域の被害、地域の生態系の破壊をもたらす原因になっている。屋久島、富士山などがそれにあたる。住んでいる人やそこにある自然、生態系なども社会の持続性という視点から観光としても捉えるべきである。ゆえに観光が管領する領域が社会全体に広がりつつある。昔ながらの観光協会ではすまなくなっている。いろんな人材をいろんな領域に送り出すということの意味というのがそこにある。観光がもつ学際性を学んだ学生を多様な領域に送り出してこそ、はじめて観光学の社会での実践力が試される。手本となったのはヨーロッパ型の観光学。具体的にはイギリスのサリー大学やオーストラリアのクイーンズランド大学など。サステナビリティを視点とした観光を実践している。最初にアメリカ型の観光学（コーネル大学のビジネススクールのような）を取り入れていたら今のようにはなっていないかと思う。

Q：地域再生にはゴールがあるのか

A：「地域再生」といふ言葉について、地域再生のゴールは再生とは単なるリデュースではなく、「新しくつくりなおす」、「地域をつくと捉える。」ということである。地域再生は、支えていくプレーヤーはそこに住んでいる人だけでなく、移住する、就農する。そして、次なる担い手を育てていく、地域をつくっていくことである。

Q：観光文化について

A：観光文化とは、多様性を認めるか否かである。都市と農村の交流の現象はまさに文化の交流である。

自分とは異なるものとどう生きていくのかを考えるのが観光文化の学習である。具体的には地域の文化を学ぶということとは、地域資源を発掘することにつながる。その際、そこに住まう人との交流だけでなく、その地域の歴史や伝統、文化にまでたどり着くことは至極当然のことであり、自分がこれまで接してこなかったものであるもの、イコール異文化をどう理解するのか。ということが求められる。そこには、倫理学やジェンダー、移民などの問題まで含まれている。

Q：災害ボランティアも観光になるのか

A：なりうる。ボランティアツーリズムという言葉があるくらい、ヨーロッパの方では盛んである。また、ダークツーリズムという言葉もある。これは、戦績めぐり、悲惨な歴史を次世代に繰り返さないための観光。レジリエンスの視点。

## 8 視察目的の検証

### (1) 新科目「観光ビジネス」についての考察

和歌山大学観光学部による「観光」の定義は、ヨーロッパを本流とした観光学を由来としたもので、その学問領域は地域再生や文化、異文化理解まで含まれるなど、学際的で幅の広いものであることが理解できた。一方、新科目「観光ビジネス」について学習指導要領解説編では、一部そうしたものも触れられてはいるが、観光業の振興に重きをおいた内容であることは明らかであり、本視察を経てみると指導領域の狭さを感じざるを得ない。現状では「観光ビジネス」に関する情報はまだまだ足りない状況ではあるが、和歌山大学観光学部のカリキュラムやシラバス等を入手し、高等学校における「観光学」についての研究を進めるほか、研究会等を立ち上げたい。

### (2) 大学における食農研究からの考察

#### ① 地域人教育

飯田下伊那地域であれば食と農を核とした都市と農村の交流、森林など観光などを取り入れるなどの可能性が大いにある。ここにこれまで地域人教育で培ってきた人的ネットワークを機能させ、食と農を結びつける観光をテーマにした学びを導入したい。

#### ② すべての高校で学ぶべき内容

食と農に関する講義は、農業高校に限らず、すべての高校で導入すべき内容であるとする。その理由は視察報告3にある通りだが、地方創生や持続的な社会づくりという視点からも都市、農村問わずすべ

ての高校生はわずかな時間でも構わないので、ぜひ導入を検討したい。

### ③授業における試行

本校商業科では、今年度「商品開発」という授業で食について学ぶ内容を取り入れていたが、10月からは、ここに農の視点を入れた内容へとシラバスを変更するなど一部試みをしている。11月現在の状況であるが、食べものについて選ぶ際の基準がこれまでの価格重視から、品質、鮮度、生産者や生産方法などを加えるなど、変容する姿を見せている。今後は本格的に農に入るわけだが、食と農とのつながりや農業、農村に対する意識の変容を期待するとともに、それを結びつける商品を考案させたい。

## 9 将来にむけて課題

日本における大学と高校の連携は、「接続」を前提にしたものが散見されるが、本視察で見えてきたものは大学と高校が融合しながら共に学び合う姿である。そのためには「地域」が欠かせないのではないだろうか。つまり「大学」と「高校」と「地域」が共に学び、共に育ちあいながら、持続的な社会づくりを目指すことが大きな目標であり、本来の課題であるということが理解できる視察であった。そして、最も大事なことはこうした本来の課題をコンセプトとし、このコンセプトを「大学」と「高校」と「地域」が共有しながらも、持ちうる機能や役割は別であることから、それぞれが自律的で生徒たちの将来や社会に向け良俗なインパクトを創発しつづける組織であるべきということではないだろうか。そうした自律分散協調型の組織や地域の中にある高校を目指したい。

## 10 最後に

この度の視察において、和歌山大学観光学部の藤田先生はじめ、大学の先生方には訪問の2日間にわたりご対応いただいたほか、紀の川市にある直売所「めっけもん市場」までもご案内いただくなど、本当に充実した視察であった。

この充実した視察の背景には、飯田市が展開する大学の域学連携「学輪 I I D A」の存在が大きい。この学輪 I I D A がなければ、和歌山大学への訪問は実現できなかったのではないだろうか。そういった意味からも、学輪 I I D A を担当する市役所職員の方とも一緒に訪問し、共に交流し、学べたことは大変ありがたいことであり、今後の発展性についても期待のもてるものであった。

さらに、国際観光科を有する白馬高校の浅井先生にも同行いただけ、高校間を超えた視察が実現できた。

ふりかえると、今回の視察は我々が飯田から学んだ「交流が学びを促進し、学びが交流を促進する」という言葉を体現する視察であった。迎えていただいた和歌山大学の皆さま、御同行いただいたすべての皆さまに感謝申し上げるとともに、本視察の成果を様々な機会を通して広く伝えていく所存である。



### 東川町・朝日大学視察

- 1 視 察 日 令和元年 11 月 27 日（水）～11 月 29 日（金）
- 2 視 察 先 東川町教育委員会（北海道上川郡東川町 1 丁目 1 6 - 1）  
東川商工会（北海道上川郡東川町東町 1 丁目 1 - 9）

旭川大学 経済学部経済学科 江口ゼミナール  
yoshinori coffee（北海道上川郡東川町1 2丁目1 1ー1）

3 対応者 東川町教育委員会 教育長 杉山 昌次氏 教育課長 佐藤文泰氏  
東川商工会 江口尚文教授 瓶子遼太氏  
旭川大学 会長 小岩昭市氏 事務局長 小西一郎氏  
yoshinori coffee 轡田 紗世氏

4 視察者 飯田OIDE長姫高等学校商業科職員3名（國松秋穂・河野繁・武藤悠子）

5 はじめに 本校商業科で続く地域での学び「地域人教育」は、これまでを振り返り、これからを見つめていくべき年数を迎えた。生徒たちは3年次に地域に入り、グループごと地域の中で実践的な学びを深める。PDCAサイクルの中で繰り返し自分たちなりの地域と関わりを持つ活動の中で探求学習を行っていく。彼らの活動は、高校生ならではのアイデアで地域に旋風を巻き起こし、温かく受け入れられ、そして卒業とともにその取り組みは終えていく。その活動は、彼らが高校生であるからこそ、どのような学びの展開になったとしても温かく地域に受け入れられている。

高校生である彼らが行っている取り組みは、地域にとってどのような効果をもたらすことができるのか。

彼らの活動は、本物の「ビジネス」として地域に還元することはできないのだろうか。

今回、IターンやUターンによる人口増が30年間続く東川町を中心に、視察を行った。行政や商店街といった受け入れ側の体制や支援を含めた「ビジネスの持続性」への取り組み、そして「環境保全」、「地域資源」を活かした取り組みはどのようなものか。

「写真甲子園」や「君の椅子」、「留学生の支援」など教育への支援を多々行っている東川町の行政や商工会が、どのように教育現場と関わっているのか。持続可能な地域活動を目指す、旭川大学江口ゼミナールでは、どのように地域の中で学生が活動し、地域はどう受け入れ態勢をとっているのか。

多くの視察が産学官の観点から行われているが、今回の視察では、あえて高等学校の教育現場ではなく、行政中心の視察を展開した。上記内容について事前に共有しつつ、生徒たちは地域とどうつながっていくべきなのかを問題視し、今回の視察に3人で臨んだ。

## 6 視察報告

(1)東川町教育委員会

### 【概要】

北海道のほぼ中心に位置し、旭岳を中心とした豊かな自然を持つ東川町。高度経済成長期には札幌や首都圏などへの人口流出が相次ぎ、人口は7000人を割り込むまでに減少した。その後、多くの地域活性化のための取り組みが実施され、少子高齢化が続く現代において、この町の町づくりに共感した方が今もなお移住し続け、持続的な人口増加が実現している。そこには多くの移住者がこの町の思いに共感し、住みたいと思う、町民による町独自の取り組みで町づくりがあった。

ここでは、教育の基盤ともなる地域資源について中心にお聞きするとともに、実際の教育と行政がどうつながっている

- ・町の人口：8,382人（人口の50%が移住してきた方） [2018年12月現在]
- ・外国人の数：380人 [2018年12月現在]
- ・観光客数：年間約129万人 [2017年度]
- ・海外事務所：5か所（台湾・タイ・中国・韓国・ベトナム。留学生の受け入れ窓口にもなっている）

るのか、その思いとともに、取り組み事例を伺った。

①地域資源：豊かな土壌

[立地条件] 旭川空港から車で約10分

[自然環境] 湧水が豊富で、地下水で生活する町。旭岳源泉のカルシウムとマグネシウムが2:1の健康に良い比率の湧水が出ており、上水道は整備する必要がないほど水に恵まれている。

[主産業] ものづくりと農業

i) 旭川家具の生産(家具生産全国第2位:市場シェア率約30%)

九州大川市に次ぐ第2位のシェアを持つ高級ブランド家具の生産地。

ii) 東川米の生産(道内屈指の米どころとして知られている)

純農村地域になっており、都市開発はできない区域。

②移住環境の整備に向けた取り組み

i) グリーンビレッジ

H17年法に基づく景観条例により、乱開発規制の仕組みが整備された。美しい景観を守るため、住宅と住宅の間に道路のない公共の公園を設置したほか、道路から住宅までの距離を定める条件を設定するなどした分譲区画の販売を行った。細かな規制を設けたが、それでも完売した。移住により住民同士の軋轢の問題も生じるが、ここでは、住宅を建てたら、新しい自治会を作るのではなく、その地域の自治会に入ってもらい仕組みになっている。

ii) 民間賃貸住宅建設のための高い補助金制度

・民間賃貸住宅建築費の1/4以内。上限4000万円の補助(町外業者 上限3200万円)

ほかにも、住宅に関する多くの補助金制度を実施。

③教育に向けた取り組み:30代など子育て世代が戻ってくる場所を用意

【人口流出と向き合い、その流れに逆らわない取り組み】

・若い世代は出ていくもの。落ち着こうとする世代が戻ってくる場所、戻ってきたいと思う教育を用意してあげる

こと。

i) 町職員の力量研修

国内に留まらず、フィンランドやスウェーデンなど海外の市町村へも数多く研修にいくという同町の職員の方々は、様々な視点から教育現場を捉える基盤がつけられている。

ii) 新教科 Globe(文科省 研究開発委託事業)の取り組み[H29年度~R2年度までの4か年計画]

「自国の文化や伝統への理解を深めるとともに、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていく子供を育てたい」という願いから、「ふるさと東川を愛する心情を深め、人間尊重の精神を基調とする国際性を養い、国際社会に通用する英語を中心としたコミュニケーションの育成」が主な研究課題として掲げられている。外国籍の子どもの受け入れの多い同町では、2030年には人口の4%以上が外国籍になるのではとされている。外国人が多く住むこの町で、それを生かした教育はできないのか。そのメリットを生かして子どもにどのような力がつけられるのかなどの観点から、Globeが展開されている。

<Globeの三要素>

- ・Global: 多様な異文化を受容し、共生することのできる態度の育成。
- ・Local: 自国の文化や伝統に根差した自己の確立
- ・Communication: 文化の異なる人々との英語をツールとしたコミュニケーション

・発達段階に応じた「目指す子ども像」の設定

幼児センター: 異国の人との触れ合いを通して外国語に慣れ親しみ、友達と仲良くする子ども。

小学校: 様々な国の文化について理解し、誰とでも寛容的で強力的な態度で接する子ども。

中学校:世界の諸問題を自分と結びつけて考え、解決方法を探り、自分の意見を発信する生徒

高等学校:自己と世界とのつながりを意識したうえで、どのように社会に関わっていくかについて、主体的かつ建設的に考え、意思決定し行動する生徒。



- ・国際教育事業によるよって訪れた豊富な人材による様々な形での授業や指導への支援体制

国際交流員  
スポーツ国際交流員  
外国語指導助手  
東川日本語学校生  
専門学校留学生

- ・町内の幼小中高で取り組む事業(合同会議を定期的に行い、連携した取り組みの実施)の展開

小高連携:小学生が英語を使ってプレゼンする支援を高校生がする。高校生のモチベーションや自己肯定感につながっている。

課外学習でもの本後留学生や交換留学生との交流:中学校で部活動指導員制度活用

東川高校:国際交流クラブ

#### 【学習の流

Local: 地域の教材を扱い、良さや課題について考え、単元全体の課題を

Communication: 課題解決に向けて、必要な知識・技能を外国語活動や外国語科の学習で身

Global: 学習で得た知識・技能を使って、様々な人と関わり、自分の考えを持ち表

授業にはいろんな先生が登場し、授業後の単元ノートで子どもの成長をはかる。

#### iii) 東川スタイルでの留学生受入れ

- ・台湾・タイ・中国・韓国などからの受け入れが多い
- ・学費50%奨学金支給[1人あたり年間80万円]
- ・生活費の50%奨学金支給[人あたり月間7、8万円のうちの50%]
- ・日本文化体験:町民との交流を深めることで、町民理解をはかられている

HUCカード(詳細:商工会報告部分にて)による支給で、町内における経済循

#### ④ 企業誘致

- ・中小企業には100万円の補助金で支援。

これにより、当初は木工クラフト作家の移住から始まっていき、ここ10年でカフェやベーカリーを営む方の移住者が増えていった。⑤「君の椅子」プロジェクト:世界に一つだけの「君の椅子」

- ・2006年から続く、旭川大学院生が発案したプロジェクト。
- ・“生まれてきてくれてありがとう。君の居場所はここにあるからね。”そんなメッセージを込め誕生から100日目に町からプレゼントされる。
- ・贈られる椅子は、毎年デザインが選定される、家具職人の手で製作されている。この椅子を目当てに移住される方もいるほどのプロジェクト。



## ⑥充実した子育て環境

### i) H14 年町内の保育所と幼稚園の統合: 幼保一元化と子育て支援センターの郷地区施設の開園

- ・幼稚園児と保育園児は、設立当初より同じクラスに。
- ・担任は養護教諭、保育士の両方の免許を持ち、副担任はどちらか一方を所有する。
- ・子どもたちが通う時間など様々な部分で相違点はあるものの、そういった部分も融合させる努力がされた。
- ・当初 140 名だった幼児たちは、現在は 248 名に増え、特に未満児の増加が目立つ。



### ii) 新しい東川小学校【小さいころから本物に触れる】

- ・50 周年を迎えた祝賀会などの費用を一切やめ、小学校新築費用へ費やした。
- ・平屋でオープン教室、地域の交流センターが併設されており、周りには 12 ヘクタールの公園等が配置され、児童たちは体験農園で米作りを体験する。小学生 5 年生全員がコンバインに乗り、手植えと機械農業の両方を体験する。

- ・子どもたちが本物を体感できるよう小学校をはじめ町内には、芸術作品が設置されている。



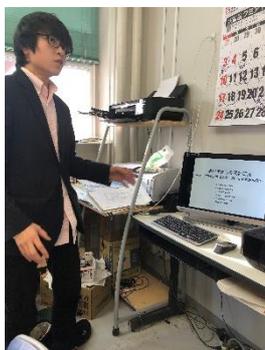
### iii) 東川中学校

- ・入学時に手作りの名前入りの椅子がひとつずつ渡され、毎日の学習に使用。
- ・卒業式の日にはプレゼントされる。
- ・町の家具業者に製作を依頼することで、町の経済循環をもちかっている。



## (2) 旭川大学 経済学部経済学科 江口ゼミナール

### 【概要】



江口ゼミナールでは、旭川ラーメンの研究、出店を通じて、様々な形で地域に根差した活動を行い、地域と結びつけた教育の実践を行っている。今回この活動の詳細をお聞きするとともに、活動を続けてきた結果、学生にどのような変化が起きているのか、地域の受け止め方はどう変遷してきたのかを主たる視察内容として訪問した。

実際にはこの活動に加え、地域からの要望に応えた活動も行われており、想像以上に地域からの信頼は厚く、またその要望に応えるために行っている江口教授の研究や学生への強い思い、地域というフィールドへ学生を立たせるための努力を教えていただく良い機会となった。

一方で、地域からの依頼は多いが、すべて請け負うことはせず、教授が求める地域との関わりに、教授が行おうとしている学生の学びに合致するものだけを選別して請け負っているということも教えていただいた。

視察当日、江口教授とともにお話をしてくれたのは、4 年生のゼミ生だった。人前で話す事、パソコンを使ってのデータ集計や表現、仲間と情報を共有する事など、入学当時は苦手だったとは思えないほど堂々としていた。

またゼミ室はゼミ生の普段の活動の拠点であり、それぞれが抱えている役割分担に対する情報を共有するための場

となっていた。出会った2、3年生のゼミ生たちまでも、1人1人名刺を持ち、訪問者である私たちに丁寧に挨拶をしてくれた。

この学生たちの普段の様子が、下記に挙げる、このゼミナールで行っている地域での学びから創り出されるのだと終始実感した視察であった。

①江口教授が地域というフィールドへ学生を送り出す意義

i) 学びを目的とした町の元気づくり[経験から学ぶ:マイケル・ポランニーの暗黙知の知識論を地域活動へ]

自分たちの活動によって、旭川の良さを伝える。

それは、暗黙知を、旭川ラーメンという地元の食文化を通じて、自分たちオリジナルの製品を作り上げ、地域で販売することで教えられていた。大学で学んだ言葉にできる形式知を、実践によって得られる言葉にできない暗黙知と結びつける事によって、使える知識が初めて生まれる。

ii) 付けるべき力:行動力・思考力・対人関係

行動力という土台の上に思考力があり、その上に対人関係が身につく。

考える前に動く、失敗したら考えればいい。そうしたら、対人関係は良くなっていく。この理論のためには、常に学生たちの間で情報共有できる場づくりと、役割分担が大切。役割分担は経営学的な分業ではなく、プロジェクトごとのリーダーの存在。リーダーになる時もあれば、フォローにまわる時もある。みんながすべての事を学べる機会を持つことが必要。それによってチームワークが生まれ、個々の力が他者へ影響を与え、相乗効果が生まれる。



②江口教授が地域と学生を結びつけ行っている代表的な学び

i) 地域の良さを伝える旭川ラーメン

- ・道内の小麦粉を使った面を使い、オリジナルのラーメンを考案し販売
- ・学内の調理室を使い、数十時間にも渡るスープの仕込みを行い、その年その年の味を研究させる。
- ・“ラーメン部長”に3年生が任命され、ラーメン販売を取り仕切っている。
- ・原価の計算から利益計算まで、ラーメン部長のもとで行われている。当初は赤字続きであったこの活動も近年では地域に認められ愛される味となり、赤字から黒字に転じている。

ii) 旭川ラーメン甲子園の企画・運営(2016～)

[目的]高校生にラーメンを通して旭川の魅力の再発見をしてもらい、地元愛を育てる。

[開催日]地元を中心とした高校生に参加を募り、毎年10月の第1土曜日に実施。

[内容]学生が企画から運営までを担い、高校生にラーメン販売を競わせる。

参加高校は、350杯のラーメンを仕込み、11:00～15:00の間にどれだけ売ることができたのかを競う。昨年の優勝校は350杯を2時間で完売させた。

[出店場所]あえて人通りの少ない商店街で開催。(平和通買い物公園で実施)

[高校生の出店条件時は3つ]①小麦100%の大学側が用意した麺を使用すること。

②他の食材も道産産のものを使用すること。

③お店のものではなく、オリジナルのものを考案し販売すること。

ストーリー性のあるものを売ることによってラーメンを通じて地元を表現させる。

[企業と高校生をつなげる]参加が決まると、各高校はラーメン店へ修行に行き、顧問となってもらう、商品開発から販売までのすべての協力を得る仕組み。

[運営費]企業協賛 約90万円

残りの費用 約100万円:自分たちのゼミで普段行っている旭川ラーメン売り上げから捻出して運営。

[組織体制]初めた頃は大学側だけで運営をしており、さまざまな課題があった。

そこで実行委員会を立ち上げ、旭川ガスや旭川信金の方に参加していただくことで、不明確だった組織の部分の課題を解消することができた。また、協賛金や物資面の援助を受けることができるようになった。

[高校生にとって地域のイベントに参加することとは]ラーメン1杯を作るまでの工程から、仕事は見えている部

分だけではないということを知る機会となる。

〔実施後の高校生アンケートより〕「地元が好きになった」

「人通りが少ない所で開催したが、その場所が好きになった」

などの感想がみられているという。

## ii) 商店街MAPづくり

〔内容〕永山まちづくり推進協議会との共同プロジェクト

〔学生の様子〕

- ・取材から、初対面の方との会話の難しさを感じる。
- ・取材内容を記事にまとめるが、なかなか伝えわる文章にまとめることができず、何度も江口教授の添削を受け、その度に取材を繰り返し、ようやく完成させていく。
- ・取材から、話の仕方、空気の読み方を学ぶ。
- ・次年度への活動意欲へとつながる、苦勞して作成したMapへの愛着心。
- ・完成したMapは自分たちの足で8000世帯に配布。



## iii) ラーメン本の出版: 製作依頼を受けて出版

〔学生が出会った経営者〕 延べ165人

〔ラーメン本に掲載した店舗 145 店舗〕 学生の取材回数 794 回〔1 店舗あたり5, 6回〕

〔取材のために学生が食べたラーメン〕 延べ413杯

〔新規ラーメン店の調査〕タウンページから調べ行った。

〔人間的な成長〕経営者の方に信頼され、自分たちなりの理論を構築しながら1つの記事をまとめていく。

## iv) 旭川市労働基本調査の請け負い

〔内容〕旭川市の委託を受け、調査と報告書の作成。

層化有意抽出法によって選び出した企業へ、郵送によるアンケート調査で回答を求め、集計・分析。

〔学生の様子〕住所宛名に不備があり、旭川市へクレームが入った。学生たちは、調査対象すべての企業へお詫びの電話連絡を。温かく対応してくださる企業の方もあり、地元の温かさを感じる。

慣れない電話連絡でのコミュニケーションも、この経験を通して学ぶ。また、些細な失敗からの大きなコストと信用の大切さを学ぶ。

## ③ 大学で地元の研究をする意義

〔高校時代に地元を知る教育をする意義とは〕

- ・ラーメンを研究し初めて地元の良さを知る。
- ・地元を知らなければ、地元の良さは知ることができない。
- ・地域の授業を通して、地域の歴史を知る。地元の歴史を知らなければ、地元のすごさを知ることができない。歴史を知れば、にぎやかにしなければと、感ずるはず。(江口教授より)

## (3) 東川町商工会

### 【概要】

新婚姻届や、新出生届、君の椅子プロジェクトなど、全国に類をみない取り組みで移住者の増加を狙ってきた東川町。町にそのような取り組みが行われる中、商工会としてどのように行政の取り国や教育に関わってきたのか。その詳細や住民の気持ちの変化、理解について中心に視察した。

「米と観光、工芸のまち」だった東川町に、1985年より「写真のまち」が加わった。商工会には、190の会員がおり、昨年



は新加入17件、脱退17件と出入りは激しい。

平成の市町村合併の時代、町民たちは自立を選択し、それぞれが町のためにという気持ちが強い。その理由は下記にあった。

①木彫り看板

商店街に何か特徴のあるものを、と考えられスタートした。現在は東海大学芸術部でデザインされ、民芸品工房が製作を担っているが、開始当時は、商店街の店主たちの手で製作がされており、商店街一致団結のきっかけとなっている。



②土日にぎわう東川町の仕組み

i) ひがしかわユニバーサルカード「HUCカード」

【町内事業者全業種と行政連携による次世代ポイントシステム】

H I G A S H I K A W A	東川町に関わ
る	
U N I V E R S A L	全ての人々で町の未来をつく
る	

- ・事業主体: 東川商工会
- ・事業開始: 平成 29 年 11 月
- ・導入団体: 商工会員 120/190 の加盟率。  
(工業系を除く商工会会員 120 の店舗+30 の行政機関で利用可能)
- ・発行枚数: 町内外 約 1 万 6 千枚(町民の約8割)

[内容]

- ・200円で町外の方もつくれるカード
- ・110円で1ポイント付与
- ・スーパーやコンビニ(セイコーマート)も加入。

[以前のポイントカードの課題]

- ・利用が減っていた(採用店の伸び悩み。過去4年間新規加盟店なし)
- ・買い物ポイント付与のみ(100円購入で1ポイント)
- ・利用者登録なしのばらまき型。顧客がどれだけ利用したか把握できていない。

[導入による変化]

- ・HUCカード導入により売り上げが伸びた店舗もある。
- ・東川町での買い物や施設利用、ホテルや温泉等の予約をはじめ、町が主催するイベント参加、健康診断、銀行来店、分譲地購入などでポイントがつくため、町外の利用者が増加。これにより町に賑わいと活性化が起きた。
- ・事業者・産業・行政の連携がとれたポイントシステムは、住民の暮らしにつながっている。
- ・留学生の支援もこのカードのポイント付与で行い、町内にある加盟店での買い物利用で町へ還元する。これによりさらに町の経済循環をはかる。
- ・外国人留学生や株主ともつながっているこのカードは、新しい事業を行おうとする起業家支援にもなっている。
- ・今後、町内の子どもたちのスポーツチームへの寄付をポイントで行える制度の導入も検討中。

ii) ひがしかわ株主制度

- ・東川町への応援の気持ちを寄付で表すもの。(ふるさと納税として住民税などの控除が受けられる)
- ・寄付をすると、株主となり、株主証となるHUC株主証を持つことができ、東川町へ訪れた際には、お店や施設での利用によるポイントの付与や使用、特別料金での東川町施設利用ができるなどの優遇がある。

iii) カフェなどの利用者増加

- ・移住や起業がしやすい支援が多く、近年では、カフェなどの数が多くなり、週末町内外の利用者が増加している。そこには HUC カードの取り組みと上手にとリンクした一面が一役買っていた。



③ 「写真の町」への取り組み

1985 年豊かな文化田園都市づくりを目指し「写真の町宣言」をした。自然、文化、人と人の出会いを大切にすることを目的に、『写真写りの良い人、風景をつくろう』『写真によって出会いにみちた町にしよう』という理念からスタートし、今年で 35 年目を迎えた。

写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようとする試みだ。

i) 東川町国際写真フェスティバル

「写真の町」の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985 年から毎年夏に開催。携帯電話にカメラ機能が付いたことが契機となり、時代に合ったイベントで集客が増した。

ii) 写真甲子園(全国投稿学校写真選手権大会)

- ・“写真の町”宣言から 10 年後より開催されるようになった。現在、500 校程の応募があり、予選を経て本選は東川町にて実施される。
- ・写真の面白みとともに全国の高校写真部に元気を届けようという目的で始まった。
- ・写真甲子園への応募をきっかけに、廃部寸前のクラブが立て直ったり、カメラ好きが集まり新たな同好会ができたりするなど、全国の高等学校に変化をもたらしている。
- ・全国各地の予選を突破した高校生たちが東川町に集結する。
- ・大会期間中の高校生たちは、町民宅へホームステイする。

iii) 高校生国際交流写真フェスティバル

- ・22 か国 24 校が参加。
- ・ここへ参加する高校生たちも、フェスティバル開催期間中は町民のお宅へホームステイする。
- ・高校生を受け入れることで、町民とともに自立した町を作り上げる構造、住民理解へつなげる取り組みとなっている。また、フェスティバルに参加した高校生が卒業後、ボランティアとしてこの取り組みを支援するために戻ってくるなど、参加する高校生の人間的な教育としても大きな役割を担っている。

[持続させるために]

- ・出場する高校生たちをホームステイさせるなど町民理解につながる取り組みの実施
- ・ボランティアとして学生が戻ってくる仕組み
- ・町職員による道内外企業からの協賛金集め
- ・さまざまな出会いが町職員のスキルアップへとつながる研修の場

④ 企業誘致による道の駅年間利用者数 40 万人→50 万人へ増加

i) 毎月更新する商店街MAP

入れ替わりが激しいため、MAPは修正しやすいよう手書きとし、毎月最新版として発行される。

ii) モンベル誘致による相乗効果

- ・企業誘致補助金を含め約 1 億円の建設費をかけて町が店舗を建設し、貸出し。町には、月々 10 万円程度の家賃と、年間 700 万円程度の税収がある。
- ・旭川市には店舗を構えていないため、旭岳に向かう人はもちろんのこと、町内外から東川町のモンベルへ

買い物に訪れる。

#### ⑤祭りやイベントの運営上の変化

[以前]商工会主催の行事には町の職員の関与がなかった。

[現在]さまざまな取り組みを通して町の職員と商工会、町民との理解が深まり、みんなでつくり上げるものへと変化した。

## 7 視察から見たもの

### (1)東川町教育委員会・東川町商工会

今回視察した東川町教育委員会にいる方はすべて行政の方であり、教職現場に携わった方は居ないとのこと。行政の立場から、自らの町の教育をどうしたら良くしていけるのかを考え、取り組まれている。そこに向ける熱量の大きさをとても感じた。なぜこんなにも町の教育に向ける熱を感じるのか。

そこには町の人々が“自分事”として働き、町が自立して暮らすための、豊かな土壌の上にある豊富な取り組みと、仕組みが、人間的資源に対するバックボーンにつながっているのではないかと感じた。

また、商工会では、随所に人とお金の経済循環や、町内へ人を呼び寄せる斬新な仕掛けがあった。高校がある事、人が集まることで町は活気づく。高校統廃合の時期を乗り切り、幼保から小中高までを町に存続させ、連携させたハード・ソフト両面から充実した教育の実施が、大きな受け皿としての役割を担っていた。

さまざまな地域に根差したコミュニティビジネスの展開が、住民と行政が真剣に教育について考え、学校と共に地域内外の子どもたちを育ててゆく土壌となり、IターンやUターンによって、やがてはそこへ戻ろうとする地域愛や原点になっているに違いない。

### (2)旭川大学

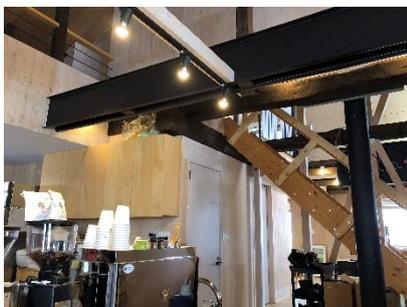
旭川大学では、助成金に頼るのではなく自らの力で財源を確保し、ラーメン販売を運営させていく。進級や卒業で活動メンバーが変わっていく学生たちの中で、やがては黒字化していく経営方法を試行錯誤させながら見出していく手法。その経営的にも人間的にも継続していくための学びが、地域を巻き込み、納得させる持続性のある活動につながっているのだと感じた。

### (3)yoshinori coffee

今回、時間の関係で実際の店舗等への視察は計画に入れることができなかった。しかし、どうしても私たちは移住されてきた方のお話をお聞きしたいと思っていた。

そんな中、視察の終わりに、空港へ向かう道すがらに一軒のお店がある事に気が付いた。

立ち寄らせていただいたのは、yoshinori coffee さん。視察に訪れる前に読んだ本にも紹介されていたお店だ。



移住によってカフェを開き、自宅兼店舗となるお店では、旭岳の湧水で入れたオリジナルブレンドされたコーヒーが飲める。ご主人の趣味から転じたというカフェは、納屋だったところを改修し、2階が居住スペース、1階のリビングが客席に解放されていた。土間だった場所は、焙煎機を置くのにちょうど良かったという。

大きな窓に向かって座る窓際の客席は、雄大な旭岳を一望できる素敵なひと席だった。



もちろんHUCカードが使える店舗に指定されており、町外の方の利用も多いという。土日には株主さんたちもこのカフェを利用するとのことだ。

このカフェに町内外の方が訪れ、さまざまなお話をされるという。

「君の椅子」が欲しくて移住してきた方、ハード・ソフトの両面で充実した東川小学校へ子どもを入学させたくて移住してきた方などのお話もお聞きすることができた。加えて、近くに旭川医科大学があることから、医療面でも充実しており、さまざまな年齢層の方の移住があるという。そういった移住されてきた方々と、もともとの町民の方々、そして、HUCカード利用もあって訪れる町内外の方々などの交流の場として、このカフェがあるのだと感じられた。



## 8 おわりに

町全体に「東川に来てもらいたい」という思いが随所に感じられる視察だった。そこに幼保統合教育や小中高校への取り組みが重なり、さらに子育て世代の移住者を呼びかけづくりにつながっている。子育てと共に働ける町。そうした東川町の人々の働き方、暮らし方そのものがこの町をつくっているのだと感じた。住民自らが、「自立」できているこの町に、誇りと自信をもっていらっしゃる。自分たちのペースで働き、自分たちのペースで暮らす。町が行う取り組みは、町の自立のための土壌をしっかりと築き上げ、そして、その取り組みに対する町民の理解は深い。

その土壌の上に成り立つこの町の教育は、子どもたちを様々な目線で見つめ、様々な方々がいろんな観点で関わり、子どもたちの成長を見守っている。

人口 8000 人の小さなこの町には、世界につながる大きな扉があるに違いないと実感しつつ、今後さらにグローバル化していくであろうこの町の教育が、その後どのように変遷していくのか、さらに関心を抱かずにはいられない視察経験となった。

受け入れてくださった東川町教育委員会みなさま、東川町商工会のみなさま、旭川大学 江口教授とゼミ生のみなさま、そして、突然の訪問にも関わらず温かく受け入れてくださった yoshinori coffee のみなさまに感謝の気持ちでいっぱいです。この視察にご同行していただいたお2人の先生方にも感謝しつつ、今回の視察で見た、“東川町と教育”、“旭川大学と地域”を、多くの方と共有し、本校だからこそできる地域での学びを通じて、生徒が地域で活動することの意欲や思い、成長につなげていきたい。



## VI 各種委員会の取組

### コンソーシアム

#### 1 コンソーシアムの構成団体

機関名	機関の代表者名
機械・電子・電気系コンソーシアム「未来ものづくり委員会」 飯田精密機械工業会 飯田電子工業会 飯田商工会議所	会長（株式会社キョーポームレック社長）野沢稔弘 会長（信菱電気株式会社代表取締役社長）川手清彦 会頭（南信スバル株式会社社長）柴田忠昭
建設系コンソーシアム「夢まちづくり委員会」 長野県建設業協会飯田支部	支部長（北沢建設株式会社代表取締役）北沢資謹
商業系コンソーシアム「地域人教育推進委員会」 松本大学（地域人教育三者連携） 飯田市（地域人教育三者連携） 飯田信用金庫	松本大学学長 住吉廣行 飯田市長 牧野光朗 飯田信用金庫理事長 森山和幸

#### 2 活動日程・活動内容

##### (1) 機械・電子・電気系コンソーシアム「未来ものづくり委員会」

活動日程	活動内容
令和元年8月7日 第1回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本事業における研究開発構想の概要，このコンソーシアム（当委員会）の位置付け，について校長及び本校担当者より説明。</li> <li>・本年度実施予定の講演会について検討し，専門性の追究の観点から「今年度はものづくり業界におけるリーダーシップ論」の講演会を行い，ものづくりに対する心構えや多様な人と協働する力を生徒に付けさせることの提言を行った。</li> <li>・「課題研究」の企業等連携のテーマの確認を行うなかで，ロボティクスアイデアミーティングへの参加の依頼があり，「電子機械」やコンピュータ制御部等の生徒の参加を検討。自由な発想力や，他者とのコミュニケーション能力を身に付けさせる。</li> <li>・次回については令和2年1月末を予定。</li> </ul>
令和2年1月23日 第2回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講演会とGOT講習会等の報告。講演により製品の開発に対する心構え，今後の学習の仕方など学びに向かう姿勢を向上させることができると共に生徒の心を揺り動かすことができた。そのため、コンソーシアムの委員からは来年度も必要であるとの助言があった。GOT講習会については自主的に参加している生徒ため、成長がみられた。生徒が選択し，自ら学んでいるというスタイルの講習会が持てれば良いと思う等の意見があった。</li> <li>・来年度のコンソーシアムの会議は4月～5月に実施すると確認。</li> </ul>

(2) 建設系コンソーシアム「夢まちづくり委員会」

活動日程	活動内容
令和元年 10 月 8 日 第 1 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本事業における研究開発構想の概要，このコンソーシアム（当委員会）の位置付け，について校長及び本校担当者より説明。</li> <li>・今年度は「地域で活躍する人材の育成」を目標に事業支援を行うことを決定。</li> <li>・社会基盤工学科と建築学科の講習会及び建築学科のワークショップについて，テーマや内容について検討。設計スキルの育成とともに，地域の発展に主体的かつ協働的に取り組む姿勢を育むことが必要とアドバイスがあった。</li> </ul>
令和元年 12 月 4 日 第 2 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建設系卒業生の進路状況の確認と，当委員会所属の企業を中心とした事業所の受入状況，採用や人材育成に関する状況について意見交換を行った。その中から来年度の当事業で身に付けさせたい力について確認した。</li> <li>・意見交換をもとに，来年度に計画について協議し，今年度は一部の生徒だけであった建築士会による「課題研究」の各テーマに対するアドバイスを全生徒に対して行うこと，実務的な建築模型制作に関する追加の講習会の実施を行うことの助言があった。</li> </ul>

(3) 商業系コンソーシアム「地域人教育推進委員会」

活動日程	活動内容
令和元年 4 月 3 日 第 1 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本事業における研究開発構想の概要，このコンソーシアム（当委員会）の位置付け，今月の事業内容について校長及び本校担当者より説明した。</li> <li>・本事業の趣旨を踏まえ「交流を重視した地域連携学習ー地域社会において主体性を発揮するー」を本年度の年間学習テーマとすることで合意した。</li> </ul>
令和元年 5 月 24 日 第 2 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1 年生による松本市フィールドスタディ，2 年生による地域インターンシップなどの事業について説明及び協力を要請し，役割分担について合意した。</li> <li>・3 年生の「課題研究」における各グループの進捗状況を共有し，生徒の主体性を発揮させるための仕掛けについて協議を行った。</li> </ul>
令和元年 7 月 4 日 第 3 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実施済みの事業を中心に，取組による成果及び課題を協議した。</li> <li>・7 月から夏期休業中の事業について本校担当者より説明した。</li> </ul>
令和元年 9 月 13 日 第 4 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3 年生による地域人教育中間発表会参観及び提言内容についての意見交換を行った。</li> <li>・10 月の 1 年生飯田市フィールドスタディの説明及び協力を要請し，合意した。</li> </ul>
令和元年 11 月 1 日 第 5 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・台風の影響により，予定していたイベントが中止になったが，計画を変更するために思考錯誤することで，新たな地域課題を生徒は見いだしているとの報告があり。</li> </ul>
令和元年 12 月 4 日 第 6 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域人教育成果発表会の発表内容について情報を共有。</li> <li>・次年度に向け，校内の講義内容に関して協議した。</li> </ul>
令和元年 12 月 24 日 第 7 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当日実施の地域人教育成果発表会に関する意見交換会を実施した。</li> <li>・松本大学白戸先生に地域連携授業における評価について，文章表現を通した「課題解決力の育成」の必要性が指摘され，委員と教員が今後の評価方法について協議。</li> </ul>

## カリキュラム開発専門家

### 1 カリキュラム開発等専門家

- ・飯田産業センターオーガナイザー 久保田優典 氏
- ・長野県建設業協会飯田支部理事 野島 登 氏
- ・長野県建設業協会飯田支部 事務局長 牧田 孝好 氏
- ・飯田市公民館副館長 秦野 高彦 氏

### 2 活動日程・活動内容

#### (1) 久保田優典 氏（機械・電子機械・電気機械工学科）

日程	内容
令和元年 11 月 28 日 他	<p>「企業展示説明会」を企画，実施・運営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象は飯田下伊那地域の生徒・保護者および学校関係，出展企業は地元企業 70 社</li> <li>・生徒が職業や就職について考え，日々の学習とのつながりを理解する機会にするために，企業担当者及び生徒に配付用のガイドブック作成（よい成果物であると推察いたします。添付してください。）など運営全般を担当</li> <li>・この説明会を契機に，出展企業との授業連携について学校と企業の双方に働きかけを行うなど，今後のカリキュラム開発について助言，支援</li> </ul>
令和元年 12 月 20 日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・機械工学科課題研究発表会にて，指導・講評</li> </ul>
令和元年 12 月 25 日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電子機械工学科課題研究発表会にて，指導・講評</li> </ul>
令和元年 12 月 26 日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電気電子工学科課題研究発表会にて，指導・講評</li> <li>・本年度の課題研究の課題設定方法や，研究に関する企業との連携方法について協議し，次年度の課題研究に向け，知識及び技能或いは思考・判断・表現力の育成または 2 年次までの各科の学習内容について専門的知見からアドバイス</li> </ul>

#### (2) 野島 登 氏・牧田 孝好 氏（社会基盤工学科・建築学科）

アドバイス	内容
令和元年 8 月 22 日 23 日 9 月 7 日	<p>「2 級 建築・土木施工管理技術者試験講習会」を企画，実施・運営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外部機関の講師を招き講習会を実施し，講習会の内容と学校の授業やクラブ活動の学習内容が連携できるよう，学校と外部機関との調整を行い，実技講習を支援</li> <li>・知識及び技能或いは思考・判断・表現力の力を身に付けさせる授業展開やカリキュラムについて，「建築構造」「建築施工」「土木施工」を中心にアドバイス</li> </ul>
令和元年 11 月 14 日	<p>「現場見学会」を企画，実施・運営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会基盤工学科，建築学科それぞれのコースを設定，当日は生徒への説明を行う</li> <li>・対象学年である 2 年生にとって「建築構造」「土木施工」「測量」を中心に，学んだことが理解できると共に実践できる力を身に付け，次年度の「課題研究」の課題発見につながる見学になるようコースを設定するとともに，次年度の授業について専門的見地からアドバイス</li> </ul>

(3) 秦野 高彦 氏 (商業科)

日程	内容
令和元年4月5日 他	<p>「課題研究キックオフ」企画，実施・運営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・商業科「課題研究」における飯田市長の講義実施に係る交渉・調整</li> <li>・地域の方と協働した学びを実現するための，公民館と地域住民との交渉・調整</li> <li>・地区別フィールドスタディの実施方法，聞き取りを通じた課題発見のための手法など、社会教育に関わる専門的知見からアドバイス</li> </ul>
令和元年12月24日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・商業科地域人教育成果発表会にて，指導・講評</li> <li>・本年度の地域人教育における公民館や地域側の変化についての情報提供</li> <li>・次年度の地域人教育において，地域で生きることの豊かさをより感じながら学べるよう，「伝統芸能」や「伝統文化」の要素を踏まえた授業の実現などの提案</li> </ul>

**地域学習実施支援員・学校指導委員会**

1 地域協働学習実施支援員について

(1) 指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

・株式会社週休いつか代表取締役 新海 健太郎 氏

(2) 実施日程・実施内容

日程	内容
令和元年12月18日	<p>全学科の授業の見学他，各科教員との意見共有</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本校教育及び本授業のカリキュラム・マネジメント実現に向け協議</li> <li>・新科目「地域活性プロジェクト」の在り方についてアイデア出しをおこなった。</li> </ul>
令和元年12月24日	<p>商業科地域人教育成果発表会にて，指導・講評</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・企業は課題の宝庫であることから，職業人を育成するためにも高校時代に協働して地域課題に向き合うことが大切であることのアドバイスをいただいた。</li> </ul>
令和2年1月9日	<p>工業科「地域人教育」次年度開講「地域活性プロジェクト」担当教員と協議</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単位数，教員体制，受講する生徒などの確認。</li> <li>・生徒が主体的に授業に取り組むための仕掛けづくりを協議</li> </ul>
令和2年1月10日	<p>工業科「地域人教育」次年度開講「地域活性プロジェクト」担当教員と協議</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業計画を協議し，社会課題にIoTを組み合わせる内容に向けて検討</li> <li>・実務における業種を超えた協力プロジェクトの実態等を例に，次年度計画を協議。</li> </ul>

2 運営指導委員会について

(1) 運営指導委員会の構成員

委員長：平岡 和久 (立命館大学政策科学部教授)

委員：田開 寛太郎（松本大学総合経営学部ホスピタリティ学科専任講師）  
 木下 悦夫（飯田市副市長）  
 中谷 秀幸（長野県南信州地域振興局環境課長）

(2) 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年9月11日 第1回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業の研究構想とこれまでの取組に関する説明。</li> <li>・生徒によるプレゼンテーション（テックレンジャー、建築学科、商業科）</li> <li>・運営指導委員による指導・助言及び意見交換。               <ul style="list-style-type: none"> <li>①環境教育についてはECO検定を活用し、地球規模の知識を得ること。</li> <li>②保護者への新しい学びについての理解を得るために、発表会等を活用すること</li> <li>③南信州の自然について、環境教育や産業観光の学習で扱うこと。</li> </ul> </li> </ul>
令和2年3月23日 第2回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度事業の主な取組の成果、来年度に向けた課題と今後の事業構想。</li> <li>・運営指導委員による指導・助言及び意見交換。               <ul style="list-style-type: none"> <li>①各学科で共通した学習評価ができるようにすること。</li> <li>②学校独自の評価観点を持ち、本事業の成果を評価できるようにすること。</li> </ul> </li> </ul>

(3) 議事録

① 令和元年 第1回 運営指導委員会

日時 令和元年9月11日（水）9時～11時  
 場所 飯田OIDE長姫高等学校 会議室  
 出席者 委員長 平岡 和久（立命館大学政策科学部教授）  
 委員 田開 寛太郎（松本大学総合経営学部ホスピタリティ学科専任講師）  
 委員 中谷 秀幸（長野県南信州地域振興局環境課長）  
 教育員会事務局 学びの改革支援課  
 主幹指導主事 小川 幸司  
 指導主事 宮澤 美郷

<次第>

- 1 開 会
  - (1) 学びの改革支援課よりあいさつ
  - (2) 飯田OIDE長姫高等学校長あいさつ
  - (3) 委員紹介および出席者紹介
  - (4) 資料および本日の日程確認
- 2 今年度の取組生徒発表
  - (1) 商業科地域人教育の取り組み
  - (2) テックレンジャーの取り組み
  - (3) 建築学科コンテストへの取り組み
- 3 議 事
  - (1) 地域との協働による高等学校教育改革推進事業計画と現況について
  - (2) 今後の見通しと来年度の以降の取り組みについて

## 4 閉 会

### 【議事録】

原校長より事業計画および令和元年度の実施内容についての説明

平岡委員長： 説明を受けて質疑をお願いしたい。

田開委員： 環境学習についての計画があるが、私も松本大学の学生へ ECO 検定を活用した指導をしている。系統立てて授業ができるが、一方で知識詰め込み型になるように感じており、せっかくこの地で暮らす高校生であれば、テキストだけでなく、南信州の自然から学ぶこともある。知識と体験の有機的な連携ができないか。

原校長： 「工業技術基礎」と「ビジネス基礎」を中心に環境に関する学習分野がある。そのほかの教科にも環境学習に関する部分があるが、ものづくりやビジネスの分野からの視点になっているので、どうしても地球規模での環境を考える視点がない。そこでまずは、ECO 検定を活用することで地球規模な環境保全に関する知識をつけさせたいと考えて計画したところ。したがって现阶段で、知識と体験を有機的にとという点では、あまり考慮していなかった。今後の計画の参考にしていきたい。

中谷委員： 事業内容を伺い、様々な内容があつて本当にワクワクする。そのうえで、この体験を通して、どんな生徒の将来につながるのか。ここで培った力を日本の企業でどう受け入れていくのか、受け入れ側にも対応が求められている。例えば就職するのであれば、現在、100%の就職率。ただ、離職率を考えれば問題はあり、この事業を通して地域連携をすることで、生徒の能力や希望をもとに、企業とのマッチングにつなげることができるのではないか。また、進学希望者には、ここでの学びが入試の評価対象になることで、生徒に対しては学習意欲につながり、親に対しては新しい教育に対する不安をどうぬぐうことにつながるという。生徒の発表をみると大変心強いので、親に対しても学習の成果を伝える方法を考えていってもらいたい。

平岡委員長： 商業科で行われて来た「地域人教育」を工業科でも行うことも、工業と商業をそのまま融合させることも、大変難しい部分があると思う。そのうえで、学科連携としてテックレンジャープロジェクトで行おうとしていることは素晴らしい試みである。ただし、工業と商業の融合を実現するには、地域や地元住民の要請の視点が必要ではないか。例えば、土木と建築は同じようでも全く違うが、建築学は実は社会科学と融合がうまく行く面もある。そういった学科を超えた連携をどう進めるか。

原校長： 商業科でも工業科でも「課題」が何かを発見するまでが大変難しい。そこでこの事業では、飯田市やそれぞれのコンソーシアムの企業からアドバイスをいただきながら、地域や企業の実情を理解させる取り組みに力を入れて進めていきたい。

平岡委員長： 運営指導委員として、指導助言をお願いしたい。

田開委員： 以前、他県の工業大学で環境教育コーディネーターとして勤務していた。この事業の環境教育と似ている点は、ECO 検定ははじめとして、まずは学生に知識をつける

こと。それと並行してエコツアーを実施しており、第1段階では自然そのものを理解できるよう絶滅危機の在来種を確認に行くツアーを行い、第2段階として企業訪問ツアーを行い、工業技術基礎的な内容を学び、そのうえで学生自身が環境配慮型の行動を行っていくことを促すプログラムであった。この事業でECO検定を扱うように、グローバルな視点で環境を学ぶことは重要で、そこからグローバルな中身へ進むことはよいと思うが、エコツアーのような形で南信州の自然に触れたり、南アルプスの環境実態を自分の目で見る機会を取り入れることがよい。これは工業科も商業科もともに行うことができるし、特に商業科はエコツアーを行うことから観光ビジネス分野の学習へつなげることも可能。その際に、工業科のコンソーシアムの協力を仰ぐことで、南信州の産業観光へとつなげることもできると考える。

原校長： 素晴らしい提案。実現に向け、今後もご指導をいただきたい。

平岡委員長： 環境学習をコンソーシアムとともに行うことへ広げていくことを、運営指導委員会として提案したい。

中谷委員： グランドデザインにあるように、3つの柱で目指す力をバランスよく身に付けることが必要。そのうえで「課題解決力」と「協創力」の関連性は密接であると感じた。地域人教育は学科を超えて行うことで、より有効な課題解決力が求められるわけで、もちろん高度な専門性に裏付けられていることは必要。コンソーシアムがそれぞれやるだけでは、狭いように感じる。工業科でも地域課題をつかむために、その分野の教材だけではなく、分野を広げてみる必要があるのではないか。また、テックレンジャープロジェクトがゆくゆくは地域での「起業」へつなげることになればよい。学科を超えてチームを作ることは大変ではあるが、ぜひ進めてほしい。

平岡委員長： 来年度の見通しについて、簡単な説明をお願いしたい。

原校長： 環境教育については令和3年度から始めたい。環境の部分については工業科の教員が担当するので、来年度はテキスト作りをする。工業科における地域人教育は、キャリア教育と連動させながらすでに始めている。また、共通教科の中で地域人教育を進める点については、現在、各教科で扱う内容や時間数について調整を進めている。テックレンジャープロジェクトについては「商品開発実践」で現在扱っているが、模擬株式会社で進められるよう準備をしている。海外交流事業について、姉妹都市との交流を中心に令和3年度へ向けて進めたい。

平岡委員長： 改めて、今後の取組について助言があれば。

田開委員： 資格取得について、学科共通で取り組むものとして、ファイナンシャルプランナーがあったが、観光に関する資格取得に取り組んでみてはどうか。例えば、国内旅行業務取扱管理者などは難しい資格であるが大学生も取り組んでおり、地域限定旅行業務取扱管理者試験もある。外国人観光客が増える中で、国内旅行の中でも地域に根差した部分を系統的に学ぶことから、資格取得につなげて良いのではないかと。商業科になるかと思うが、ツアーづくりを学習活動に取り入れることで、観光を通して地域の特徴を理解しながら、コンソーシアムの企業とともに地域の産業観光を作り上げ

ることができる。

平岡委員長： 地域人教育の視点を少し広げてみることで、市民として住民として、社会の一員としての「社会教育」(シティズンシップ教育)の視点も加えてみることはどうか。また、地域人教育で求められるものは、これは普通科でも課題になっている。そのうえで、職業科で実施していくためにどう深めるかについてこの事業では期待したい。これらをあわせると、18歳選挙権も始まることから、市民教育としての学校教育が、「地域人教育」というこの事業をとおして社会に浸透できるよう位置づけができるといい。

小川主幹： 委員長の今の発言は事業評価をするうえで重要な視点。この後、生徒の学びをアンケート調査等で数値化して、成果を示していく。その中で、「市民教育」としてこのプログラムを通してどう成長し、市民として生きるための意識の深まり、自覚の深まりの「事例」を抽出して、その成長を示すことが必要。もし深まらなかったのであれば、その問題点を改善したプログラムにすることが求められる。この点は、SGHでも成長の度合いを説明するために必ずやってきた。委員長さんのご指摘のとおり実現していった欲しい。

原校長： 中学校でも協働学習を行っており、系統立てた取り組みを行っていきたい。また、飯田市内の飯田や風越、女子高などの普通高校でもつながる取組ができればよい。

## ② 令和元年 第2回 運営指導委員会

日時 令和2年3月23日(月)13時～15時  
場所 飯田OIDE長姫高等学校 会議室  
出席者 委員長 平岡 和久 (立命館大学政策科学部教授)  
委員 木下 悦夫 (飯田市副市長)  
委員 田開 寛太郎 (松本大学総合経営学部ホスピタリティ学科専任講師)  
委員 中谷 秀幸 (長野県南信州地域振興局環境課長)  
教育員会事務局 学びの改革支援課  
主幹指導主事 小川 幸司  
指導主事 宮澤 美郷  
学校 原 康倫 (学校長)  
福澤 竜彦 (教頭)  
栄 隆志 (未来モノづくり委員会の運営)  
清水 潔 (夢まちづくり委員会の運営)  
國松 秋穂 (地域人教育推進委員会の運営)  
西村 武久 (海外交流事業・UVプリンタ活用事業)

<次第>

1 開 会

- (1) 学びの改革支援課高校教育指導係主幹指導主事あいさつ
- (2) 飯田OIDE長姫高等学校長あいさつ
- (3) 出席者紹介
- 2 校内見学（工業実習棟UVプリンタ他、関連教室等）
- 3 議 事
  - (1) 委員長あいさつ
  - (2) 今年度の取組の進捗状況及び成果と課題
  - (3) 協議等（意見交換）
  - (4) 来年度の事業計画について
  - (5) 協議等（意見交換）
- 4 閉 会

#### 【議事録】

学校より令和元年度の実施内容についての説明について

平岡委員長： 本年度の事業報告の説明を受けて質疑をお願いしたい。

田開委員： 商業科の地域人教育について、社会人基礎力の項目を使用した生徒アンケートの伸び率に注目した。全ての項目が授業の前後で伸びているが、主体性の項目の伸び率が一番少ない。もともと主体性が高い生徒が集まっているとも考えられるが、どう分析するか。

國松教諭： 今年、主体性の項目の伸び率については、過去5年間で一番低かった。その理由として1つ目は、4月の課題設定を教員主導でおこなった。その分、授業のスタートは非常にスムーズであったが、生徒の課題意識が低いままスタートした。2つ目は、この学年は1～2年の授業の中で、飯田の産業やものづくりを理解する機会が少なかった。この点については、今後実施する「地域人教育基礎」などの科目を実施する際、課題研究を始めるまでに、課題発見力を身に付けさせることで、回避できると考えている。

中谷委員： ふりかえりのアンケートが興味深い。シーケンス講習会の生徒アンケートの評価が非常に高い。少人数だからこのような結果になったのか、それとも意欲が高い生徒だけが参加したのでこのような結果になったのか。

栄教諭： そもそも大人数でできる内容の講習会ではなかった。人数が少ないことで、指導者から丁寧な指示をしてもらえるので、評価が高かったと考える。

木下委員： 社会人基礎力は大変重要な指標であり、この能力を高めるには、どれだけ多くの社会人に会えるかがポイントになる。商業科の地域人教育では、多くの交流の場面があるが、工業科のコンソーシアムで行っている活動では講師とのかかわりはあるが、多くの社会人に会えることはあるのか。

栄教諭： 受講する生徒が多い場合は、社会人（講師）触れあう場面はどうしても少なくなってしまふ。本日配布した資料以外にも、企業等と連携した課題研究の授業を行っており、社会人と触れ合い、タッグを組んで課題解決に取り組む場面はもう少し多くあると思

う。

國松教諭： 商業科の地域人教育はそもそも「交流」をメインテーマにしているので、多くの地域の方と出会う場面がある。しかしながら、商業科で学んだ知識・技術を活用した課題解決方法に必ずしもなっていない問題点があることも事実。また、これまでの学習の経緯からも、本校の地域人教育では、商業科と工業科の違いについては、幅広くとらえている。そこで今回の事業では、「地域活性プロジェクト」において、ものづくりを含めた地域の方、企業の方との交流の場を設定していくことを考えている。

平岡委員長： 学習評価の観点として、工業科、商業科それぞれに身に付けさせたい力があっても、社会人基礎力を身に付けるという点は共通して求められること。生徒アンケートでその点について、成果があったかどうかを確認できることが必要。課題研究発表会に参加したが、その成果は大変素晴らしいものであり、商業科以外にも社会基盤工学科の河川整備や、テックレンジャープロジェクトなどにも多くの事業をおこなっていることがわかるが、その成果をどう評価するかについてはわかりにくい印象があった。

原校長： 学科ごとにコンソーシアムとの連携の方法や取組が異なるため、現状では評価の方法も異なっている。工業科は産学連携、商業科は官学連携が主となっていることも影響し、評価については統一したものが難しい面がある。その中で、「社会人基礎力」という指標を用いることは、どの学科でも対応できるので、統一して次年度は生徒の意識や、側教員の側の意見から力が身に付いたかどうかを評価、検証していきたいと考える。

平岡委員長： この事業ではコンソーシアムとの連携が重要であると考えますが、講師やインターシップ実施先、課題研究への協力など様々な場面で行われていることはわかるが、事業におけるこの機能の達成度はどうなのか

栄教諭： 評価という形で報告書には掲載しなかったが、それぞれのコンソーシアムとの連携は順調に進んでおり、教員側とすれば非常に助かっており、生徒の力は着実に向上している。

平岡委員長： 国際交流は、現在新型コロナウイルスの感染拡大により、このような状況になっているので、挑戦してみるという部分になるのか。それでは、それぞれの委員から指導を頂きたい。

木下委員： それぞれの取組の目的と目標を明確にした方がよい。海外交流で目指すところは、グローバルな視点を生徒に身に付けさせたいということではないか人形劇をしている方の目指すこととは異なってしまうので、難しい部分がある。また地域人教育については、地域の人材育成の視点が重要であり、市の職員である公民館主事が、地域の方々と関わるのと同様に、地域の中において地域に関わる人材が育っていくことが大事である。社会人基礎力についてだが、市役所も職員を採用するときに学生時代のことを語ってもらう時、人から聞いたことなのか、それとも自分が体験したことなのかによって、身に付いた力は全く異なっていることがわかる。どこの会社へ行っても地域に関わった経験は

生きるのに、社会人基礎力を身に付けて次へ進んで欲しい。

田開委員： 多様な取組がある一方、工業科と商業科が二つ別々のものになっており、「学校としてどうやっていくか」についてはまだ課題がある。地域人教育がどうしても注目されてしまうが、生徒とすれば同じ学校の生徒として、協創力を身に付けさせるためには、学科融合、学科連携が重要になってくる。そのうえで社会人基礎力が基本にあって、商業科であれば課題発見能力の育成に注目することもよいし、工業科であれば企業に課題をもらった中で引き出す主体性があるのもよいと思う。学科横断的な学習を行いながら、各学科の強みを生かして、社会人基礎力をベースに独自の評価項目を作ってもよいだろう。そのうえで「主体性」をどう引き出し、どう評価するかが軸になる。

中谷委員： 新しいカリキュラムを創出しようという先生たちの熱意に敬意を表したい。そして、そのカリキュラムによって、これから生きていくうえで必要な力を身に付けることができることが生徒に伝わるといい。講座を選択するにあたっては、先生がこういう想いを持って作ったプログラムであることをプレゼンする場面があってもいい。先ほどのシーケンスの講座もそうであるが、生徒が自ら選んだテーマだと理解させることが重要である。

「地域ビジネスと環境」については、この視点は非常に複雑であり、また新しい視点や、新しい考えが出てきてもある。もちろん地球温暖化がテーマであるが、それを実現するために、全世界は省エネ社会から地域循環型社会へと進もうとしている。この流れに出てくる要素は、この学校の様々な分野が関連している。例えば、プラスチックに関する研究や、再生可能エネルギーの活用などは、必要であっても時間がかかることがデメリットで進まないわけだが、そこをどうビジネスとして成り立たせるかが重要である。災害への対応や蓄電池、廃棄物のリサイクルについても、ビジネスとしてみることであれば、大きな問題解決につながる。ビジネスと環境保全はこの学校の持てる力をすべて活用してできる取組であるので非常に期待している。

平岡委員長： もう少し全体像が整理されたうえで、説明いただけると助かる。とはいえ、カリキュラムを学科横断として実施することの難しさを感じながらも、それぞれの学科で地域と連携する取組を行い、各種の講習会をこれだけ行い、いろいろなチャレンジをされた1年間で、良い手ごたえがあったのではないかと。ただし、評価については、今後の改善が必要である。

また、今、新型コロナに関して、正しい情報を理解するメディアリテラシーや、公衆衛生といった自分にはない知識をどうつけていくかなど、まだまだ人類には求められていることが多いことに気づく。さらに飯田下伊那で培われてきた、他者への信頼や仲間意識がこのような時代になったときであっても、例えば移動の自由や基本的な人権をお互いに認め合いながらこの地で生きていく教育を実現してほしいし、そういった要素を地域人教育基礎の中に入れてほしい。

学校より次年度の計画について説明

平岡委員長： 時間を延長したいと。それでは質問をお願いします。

田開委員： 地位活性プロジェクトについて、3年生で凝縮した内容を実施するとあるが、発表会は計画しているか

國松教諭： 課題研究はスライドを使った発表をしている。この授業については、ポスターセッションを考えている。その作成過程で論理的に考える力や表現力を身に付けさせた。

中谷委員： 定量目標設定に悩んでいることがわかる。私も県庁の政策評価課で県の事業に対し、達成目標を設定する業務を行ったことがあり、大変苦慮した。そこで質問だが、知識・技能はある程度客観的に評価できるように思うが、ペーパーテストをあえてとらない理由は何かあるのか。また定量目標について、3.5～3.8に幅があるが、例えば望ましい達成レベルは3.5だが、項目ごとに重みをつけてそれ以上にできたと評価するものを、3.6, 7, 8で示すことも可能ではないか。

栄教諭： ペーパーテストを避けたわけではないが、すべての取組がテストを実施するわけではないので記載しなかった。定量目標の数値については、商業科の社会人基礎力の評価をまねて事業全体に反映させたものである。今のご意見をもとに、再考したい。

平岡委員長： それでは次年度の計画について、各委員から指導・助言をお願いしたい。

木下委員： UVプリンタを技術的に扱うのはもちろんだが、入り口はデザインなのではないか。UVプリンタを活用して、売れるものとは何かを考えることも大事ではないか。また、評価については、客観的な数値をもって評価しないと、多くの人に事業の成果を理解してもらうことは難しい。フランス交流については、事前に歴史や文化の違いやその背景を学んでから、実際の取組につなげてほしい。

田開委員： 「地域活性プロジェクト」に大いに期待する。特に公民館を介して高校生が地域と交流することを、どう具体化するかで、私も協力できることがあればしたい。UVプリンタについては、技術は技術でしかなく、この技術が社会にどう寄与してるか、どうイノベーションにつながっているのかに視点を置きたい。また、企業の社会的責任（CSR）の観点から、国産材を利用した紙への印刷ができる点を取り上げるなど、ビジネスと環境の視点からプリンタの活用や企業の動向を考えてもいい。ツールはツールで置いておいて、学校設定教科の独自性を生かしたテーマがあってもいい。

中谷委員： 評価の仕方についてだが、思考力・判断力・表現力の評価について、アンケートの自由記載に何割の生徒が書いてくれたか、生徒の行動観察については、私語や居眠りをしている生徒が1割以下になったなどといった指標での評価でもよいのではないか。

平岡委員長： 取組内容が素晴らしいことは繰り返しておくが、評価の部分がどうしても気になる。新学習指導要領の3つの柱で整理することはわかるが、それだけでこの取組を評価と

してもピンとこない。今までの地域人教育の実績に基づき、もっと新しいものでもよい。特に「協創力」はどう落とし込むのかは重要な点で、学習指導要領の3つの柱だけで整理して身に付けさせる力を表現することは難しく、定性目標で独自性を出してもよいと思うので、ここをどう評価するのかについては再考が必要。この学校の地域人教育は、この事業のモデルであり全国が注目している。評価についても他の学校のモデルになるよう更なる工夫が必要であり、繰り返しになるが、その実現に向けてのキーワードである「協創力」をより具体化し、どう評価するかにかかわってくる。

UVプリンタを活用については、本当は地域の企業にあるツールを使うことが協働でもあり、何もUVプリンタに固執することもない。しかし、せつかくあるのでツールとして活用し、他教科横断的で、地域と協働しながら新しい取組ができればよいのではないか。先ほど見学した第4パソコン教室についても、生徒がどういう準備をし、どういうディスカッションができるかについて具体化する必要がある。例えば松本大学の学生がチューターとして各グループに入り、チュータリングの仕方は田開先生が学生に教えることができる。いろいろな可能性をもって研究開発を進めて欲しい。

平岡委員長： 一通り意見を伺った。追加がなければ、議事はここまでとする。

## VII 広報活動

### 1 発表会の公開

- ・ 課題研究発表会 機械工学科 12/20（金） 電子機械工学科 12/25（水） 電気電子工学科 12/26（水） 建築学科 1/24（金） 地域人教育成果発表会（商業科 12/24（火））
- ・ 全校課題研究発表会 1/17（金）

### 2 学校長ブログ 本校のホームページの学校長ブログにより逐次公開。

### 3 視察・訪問受入

- ・ 外務副大臣及び経済産業省職員 5/14（火）
- ・ 文部科学省ワーキング・グループ 9/26（木）
- ・ 各種校長会 南信校長会 5/16（木），飯伊中高特校長会 10/18（金），工業校長会 10/29（火）
- ・ 中国瀋陽市教育フォーラム 8/23（金）
- ・ 県議会議員及び市議会議員 高知県議会 8/28（水），岡山県真庭市 1/27（月）
- ・ 徳島県徳島市経済同友会 10/4（金）
- ・ 北海道奈井江町職員 9/13（金）
- ・ 島根県邑南町長及び職員 11/19（火）
- ・ 学校関係者 岡山県玉野商工高校 10/16（水），飯田市伊賀良小学校 10/24（木），島根県立矢上高校 12/24（火）

### 4 ベネッセ教育総合研究所月刊誌『VIEW21 8月号』掲載 先進事例紹介

### 5 リクルート進学総研月刊誌『キャリアガイダンス2月号』掲載 実践事例レポート

### 6 長野県教育委員会月刊誌『教育指導時報12月号』掲載「地域で活躍するスペシャリストを育成」

### 7 NBS長野放送「信州・学びの改革～主体性・協働性・創造性を育む」1/24（金）放映

# VIII 関連資料

教育課程 工業科と商業科

学校番号	66 飯田OIDE長姫高等学校			全日制課程						機械工学科	
区分	教科	科目	標準単位数	1年		2年		3年		合計	備考
				必修	選択	必修	選択	必修	選択		
		※は学校設定科目									
各学科に共通する各教科・科目	国語	国語総合	4	3						3	
		国語表現	3					2		0・2	
		現代文B	4			2		2		4	
		古典A	2						2	0・2	
	地理歴史	世界史A	2			2				2	
		日本史A	2						2	0・2	
		地理A	2					2		2	
	公民	現代社会	2	2						2	
	数学	数学Ⅰ	3	4						4	
		数学Ⅱ	4			4				4	
		数学Ⅲ	5						4	0・4	
		数学A	2						2	0・2	
	理科	科学と人間生活	2	2						2	
		物理基礎	2			4				4	
		物理	4						2	0・2	
		化学基礎	2						2	0・2	
	体育	体育	7~8	2		2		3		7	
		保健	2	1		1				2	
	芸術	音楽Ⅰ	2		2					0・2	
		美術Ⅰ	2		2					0・2	
		書道Ⅰ	2		2					0・2	
		音楽Ⅱ	2						2	0・2	
		美術Ⅱ	2						2	0・2	
		書道Ⅱ	2						2	0・2	
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						3	
		コミュニケーション英語Ⅱ	4			3				3	
		英語表現Ⅰ	2						2	0・2	
		英語会話	2						2	0・2	
家庭	家庭総合	4					3		3		
情報	情報の科学	2								情報技術基礎2単位にて代替	
主として専門学科において開設される各教科・科目	工業（機械工学科）	工業技術基礎	2~6	3						3	
		課題研究	2~6						3	3	
		実習	2~16				3		3	6	
		製図	2~12	2		2				4	
		情報技術基礎	2~6	2						2	
		機械工作	2~8	3		2				5	
		機械設計	2~8			2		3		5	
		原動機	2~4					2		2	
		工業数理基礎	2~4						2	0・2	
		生産システム技術	2~8						2	0・2	
		※電子製図							2	0・2	
		自動車工学	2~8						2	0・2	
		環境工学基礎	2~6						2	0・2	
		プログラミング技術	2~8						2	0・2	
	総合技術	※商業基礎				2				2	
		※経営実践							2	0・2	
		※地域活性プロジェクト							2	0・2	
		※電気総合							2	0・2	
	家庭	子どもの発達と保育	2~6						2	0・2	
		フードデザイン	2~6						2	0・2	
各教科・科目の単位数合計					29	29	29		87		
総合的な探究の時間				3							課題研究3単位にて代替
ホームルーム活動				3	1	1	1		3		
合計単位数					30	30	30		90		

		教育課程表							(平成31年度入学生適用)			
学校番号	66	飯田OIDE長姫高等学校			全日制課程				電子機械工学科			
区分	教科	科目	標準単位数	1年		2年		3年		合計	備考	
		※は学校設定科目		必修	選択	必修	選択	必修	選択			
各学科に共通する各教科・科目	国語	国語総合	4	3						3		
		国語表現	3					2		0・2		
		現代文B	4			2		2		4		
		古典A	2					2		0・2		
	地理歴史	世界史A	2			2				2		
		日本史A	2					2		0・2		
		地理A	2					2		2		
	公民	現代社会	2	2						2		
	数学	数学Ⅰ	3	4						4		
		数学Ⅱ	4			4				4		
		数学Ⅲ	5					4		0・4		
		数学A	2					2		0・2		
	理科	科学と人間生活	2	2						2		
		物理基礎	2			4				4		
		物理	4					2		0・2		
		化学基礎	2					2		0・2		
	体育	体育	7~8	2		2		3		7		
		保健	2	1		1				2		
	芸術	音楽Ⅰ	2		2					0・2		
		美術Ⅰ	2		2					0・2		
		書道Ⅰ	2		2					0・2		
		音楽Ⅱ	2					2		0・2		
		美術Ⅱ	2					2		0・2		
		書道Ⅱ	2					2		0・2		
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						3		
		コミュニケーション英語Ⅱ	4			3				3		
		英語表現Ⅰ	2					2		0・2		
		英語会話	2					2		0・2		
	家庭	家庭総合	4					3		3		
	情報	情報の科学	2								情報技術基礎2単位にて代替	
	主として専門学科において開設される各教科・科目	工業（電子機械工学科）	工業技術基礎	2~6	3						3	
			課題研究	2~6					3		3	
			実習	2~16			3		3		6	
			製図	2~12			2		2		4	
※電子製図								2		0・2		
情報技術基礎			2~6	3						3		
機械工作			2~8					3		3		
機械設計			2~8			2				2		
電子機械			2~6			2				2		
電子機械応用			2~6						2	0・2		
電気基礎			2~10	4						4		
電子回路			2~8						2	0・2		
コンピュータシステム技術			2~8						2	0・2		
原動機			2~4						2	0・2		
総合技術		※商業基礎				2				2		
		※経営実践						2		0・2		
		※地域活性プロジェクト						2		0・2		
		※機械総合						2		0・2		
家庭		子どもの発達と保育	2~6					2		0・2		
		フードデザイン	2~6					2		0・2		
各教科・科目の単位数合計				29		29		29		87		
総合的な探究の時間		3									課題研究3単位にて代替	
ホームルーム活動		3	1		1		1		3			
合計単位数				30		30		30		90		

		教育課程表							(平成31年度入学生適用)		
学校番号	66	飯田OIDE長姫高等学校			全日制課程				電気電子工学科		
区分	教科	科目 <small>※は学校設定科目</small>	標準単 位数	1年		2年		3年		合計	備考
				必修	選択	必修	選択	必修	選択		
各学科に共通する各教科・科目	国語	国語総合	4	3						3	
		国語表現	3					2		0・2	
		現代文B	4			2		2		4	
		古典A	2					2		0・2	
	地理歴史	世界史A	2			2				2	
		日本史A	2					2		0・2	
		地理A	2					2		2	
	公民	現代社会	2	2						2	
	数学	数学Ⅰ	3	4						4	
		数学Ⅱ	4			4				4	
		数学Ⅲ	5						4	0・4	
		数学A	2						2	0・2	
	理科	科学と人間生活	2	2						2	
		物理基礎	2			3				3	
		物理	4						2	0・2	
		化学基礎	2						2	0・2	
	体育	体育	7~8	2		2			3	7	
		保健	2	1		1				2	
	芸術	音楽Ⅰ	2		2					0・2	
		美術Ⅰ	2		2					0・2	
		書道Ⅰ	2		2					0・2	
		音楽Ⅱ	2						2	0・2	
		美術Ⅱ	2						2	0・2	
		書道Ⅱ	2						2	0・2	
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						3	
		コミュニケーション英語Ⅱ	4			3				3	
		英語表現Ⅰ	2						2	0・2	
		英語会話	2						2	0・2	
	家庭	家庭基礎	2					2	2		
情報	情報の科学	2								情報技術基礎2単位にて代替	
主として専門学科において開設される各教科・科目	工業（電気電子工学科）	工業技術基礎	2~6	3						3	
		課題研究	2~6					3		3	
		実習	2~16			3		3		6	
		製図	2~12					2		2	
		情報技術基礎	2~6	2						2	
		電気基礎	2~10	5		2				7	
		電気機器	2~6			3				3	
		電力技術	2~8						4	0・4	
		電子回路	2~8			2				2	
		※電子回路応用								2	0・2
		電子計測制御	2~6						2	2	
		通信技術	2~6							2	0・2
		プログラミング技術	2~8							2	0・2
	総合技術	※商業基礎				2				2	
		※経営実践								2	0・2
		※地域活性プロジェクト								2	0・2
		※機械総合								2	0・2
家庭	子どもの発達と保育	2~6							2	0・2	
	フードデザイン	2~6							2	0・2	
各教科・科目の単位数合計				29		29		29	87		
総合的な探究の時間			3							課題研究3単位にて代替	
ホームルーム活動			3	1		1		1	3		
合計単位数				30		30		30	90		

		教育課程表							(平成31年度入学生適用)			
学校番号	66	飯田OIDE長姫高等学校			全日制課程				建築学科			
区分	教科	科目 ※は学校設定科目	標準単 位数	1年		2年		3年		合計	備考	
				必修	選択	必修	選択	必修	選択			
各学科に共通する各教科・科目	国語	国語総合	4	3						3		
		国語表現	3					2		0・2		
		現代文B	4			2		2		4		
		古典A	2					2		0・2		
	地理歴史	世界史A	2			2				2		
		日本史A	2						2	0・2		
		地理A	2					2		2		
	公民	現代社会	2	2						2		
	数学	数学Ⅰ	3	4						4		
		数学Ⅱ	4			4				4		
		数学Ⅲ	5						4	0・4		
		数学A	2						2	0・2		
	理科	科学と人間生活	2	2						2		
		物理基礎	2			2				2		
		物理	4						2	0・2		
		化学基礎	2						2	0・2		
	体育	体育	7~8	2		2			3	7		
		保健	2	1		1				2		
	芸術	音楽Ⅰ	2		2					0・2		
		美術Ⅰ	2		2					0・2		
		書道Ⅰ	2		2					0・2		
		音楽Ⅱ	2						2	0・2		
		美術Ⅱ	2						2	0・2		
		書道Ⅱ	2						2	0・2		
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						3		
		コミュニケーション英語Ⅱ	4			3				3		
英語表現Ⅰ		2						2	0・2			
英語会話		2						2	0・2			
家庭	家庭基礎	2					2	2				
情報	情報の科学	2							情報技術基礎2単位にて代替			
主として専門学科において開設される教科・科目	工業（建築学科）	工業技術基礎	2~6	2						2		
		課題研究	2~6			1		2		3		
		実習	2~16			1		2		3		
		製図	2~12	1		3		2		6		
		情報技術基礎	2~6	1		1				2		
		建築構造	2~6	2		2				4		
		建築施工	2~6					2		2		
		建築構造設計	2~8	2		3				5		
		※建築構造設計応用								2	0・2	
		建築計画	2~8	2				2		4		
	建築法規	2~4					2		2			
	総合技術	※建設簿記				2				2		
		※建設簿記実践							2	0・2		
		※地域活性プロジェクト							2	0・2		
		※測量基礎							2	0・2		
	家庭	子どもの発達と保育	2~6						2	0・2		
		フードデザイン	2~6						2	0・2		
各教科・科目の単位数合計				29		29		29	87			
総合的な探究の時間			3	27		29		21		課題研究3単位にて代替		
ホームルーム活動			3	1		1		1	3			
合計単位数				30		30		30	90			

		教育課程表					(平成31年度入学生適用)					
学校番号	66	飯田OIDE長姫高等学校			全日制課程			社会基盤工学科				
区分	教科	科目	標準単位数	1年		2年		3年		合計	備考	
				必修	選択	必修	選択	必修	選択			
※は学校設定科目												
各学科に共通する各教科・科目	国語	国語総合	4	3						3		
		国語表現	3					2		0・2		
		現代文B	4			2		2		4		
		古典A	2					2		0・2		
	地理歴史	世界史A	2			2				2		
		日本史A	2					2		0・2		
		地理A	2					2		2		
	公民	現代社会	2	2						2		
	数学	数学Ⅰ	3	4						4		
		数学Ⅱ	4			4				4		
		数学Ⅲ	5						4	0・4		
		数学A	2						2	0・2		
	理科	科学と人間生活	2	2						2		
		物理基礎	2			3				3		
		物理	4						2	0・2		
		化学基礎	2						2	0・2		
	体育	体育	7~8	2		2			3	7		
		保健	2	1		1				2		
	芸術	音楽Ⅰ	2		2					0・2		
		美術Ⅰ	2		2					0・2		
		書道Ⅰ	2		2					0・2		
		音楽Ⅱ	2						2	0・2		
		美術Ⅱ	2						2	0・2		
		書道Ⅱ	2						2	0・2		
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3						3		
		コミュニケーション英語Ⅱ	4			3				3		
		英語表現Ⅰ	2						2	0・2		
		英語会話	2						2	0・2		
	家庭	家庭基礎	2					2	2			
	情報	情報の科学	2								情報技術基礎2単位にて代替	
	主として専門学科において開設される教科・科目	工業（社会基盤工学科）	工業技術基礎	2~6	2						2	
			課題研究	2~6						3	3	
実習			2~16			2			1	3		
製図			2~12			2			2	4		
情報技術基礎			2~6	2						2		
測量			2~8	2		2				4		
土木施工			2~8	1		2				3		
土木基礎力学			2~10	3		2			4	9		
土木構造設計			2~4						2	0・2		
社会基盤工学			2~4							2	0・2	
環境工学基礎			2~6						2	2		
※建設簿記						2					2	
※建設簿記実践									2	0・2		
※地域活性プロジェクト									2	0・2		
※建築基礎									2	0・2		
家庭		子どもの発達と保育	2~6							2	0・2	
		フードデザイン	2~6							2	0・2	
各教科・科目の単位数合計					29	29	29		87			
総合的な探究の時間				3							課題研究3単位にて代替	
ホームルーム活動				3	1	1	1	1	3			
合計単位数					30	30	30		90			

		教育課程表				(平成31年度入学生適用)						
学校番号	飯田OIDE長姫高等学校			全日制課程				商業科				
区分	教科	科目 <small>※は学校設定科目</small>	標準単 位数	1年		2年		3年		合計	備考	
				必修	選択	必修	選択	必修	選択			
各 学 科 に 共 通 す る 各 教 科 ・ 科 目	国語	国語総合	4	3						3		
		国語表現	3					2		0・2		
		現代文B	4			3		2		5		
		古典A	2						2	0・2		
	地理 歴史	世界史A	2			2				2		
		日本史A	2						2	0・2		
		地理A	2						2	2		
	公民	現代社会	2	2						2		
	数学	数学I	3	3							3	
		数学II	4			3					3	
		数学A	2						2		0・2	
	理科	科学と人間生活	2	2							2	
		生物基礎	2			3					3	
		生物	4						3		0・3	
		※ヒトの生物学								2	0・2	
	体育	体育	7～8	2		2			3		7	
		保健	2	1		1					2	
	芸術	音楽I	2		2						0・2	
		美術I	2		2						0・2	
		書道I	2		2						0・2	
		音楽II	2						2		0・2	
		美術II	2						2		0・2	
	外国語	書道II	2						2		0・2	
コミュニケーション英語I		3	3							3		
コミュニケーション英語II		4			3					3		
コミュニケーション英語III		4						3		3		
英語表現I		2						2		0・2		
英語会話	2						2		0・2			
家庭	家庭総合	4			1		2		3			
情報	情報の科学	2								情報処理3単位にて代替		
主 と し て 専 門 学 科 に お い て 開 設 さ れ る 各 教 科 ・ 科 目	商業 ( 商 業 科 )	ビジネス基礎	2～4	2						2		
		課題研究	2～8						3		3	
		総合実践	2～6						2		2	
		マーケティング	2～6						3		3	
		経済活動と法	2～4							3	0・3	
		簿記	2～8	3							3	
		原価計算	2～6	2							2	
		情報処理	2～8	3							3	
		※地域人教育		1		2					3	
		財務会計I	2～6			4					4	
		※会計実務								3	0・3	
		財務会計II	2～6							3	0・3	
		ビジネス情報	2～8			3					3	
		ビジネス情報管理	2～8							2	0・2	
		広告と販売促進	2～6							2	0・2	
	プログラミング	2～6							3	0・3		
	ビジネス経済	2～4							2	0・2		
	商品開発	2～8							2	0・2		
	総合技術	※ITシステム				2					2	
		※ITデザイン								2	0・2	
※地域活性プロジェクト									2	0・2		
家庭	子どもの発達と保育	2～6							2	0・2		
	フードデザイン	2～6							2	0・2		
各教科・科目の単位数合計					29		29		29	87		
総合的な探究の時間					3						課題研究3単位にて代替	
ホームルーム活動					3	1	1	1		3		
合計単位数					30		30		30	90		

編集・発行者

長野県飯田OIDE長姫高等学校

〒395-0804 長野県飯田市鼎名護熊 2535-2

T E L : 0265-22-7117 F A X : 0265-53-4995

H P : <http://www.nagano-c.ed/oideosa>